

定論なり。

アウグスティヌス以爲へらく神は正義なるがゆゑに人間の罪を救はんには其の罪に對して賠償の成さるゝを要す而して基督は人間の爲めに此の賠償を爲したる者なり。故に彼れの媒介に頼らずして救はるべきもの一人としてなし而して教會は基督の救済の業を繼續するもの即ち彼れの代表者なり。故に地上に於いては教會以外に救済の道なしと。是に於いてアウグスティヌスは羅馬教會を盤石の安きに立て其の堅固なる組織によりて世界救済の業を成就せん企圖を描けり。

〔二四〕アウグスティヌスの思想には教會を中心としたるものと吾人が意識の實證を基礎としたるものとの兩面相纏綿せり。蓋し彼れは一方に於いて吾人は唯教會の規定する所を信ずるによりて救はるべしと考へたると共に又一方には人々直接に己が意識に實證する所を基礎として考へたり即ち彼れが哲學思想には専ら此の吾人各自の意識に驗する實證を基とせる而して其の教會を中心として考へたるとはものづから其の趣を異にせる點あり。彼れは一切の證據の究極

を吾人の意識に求め而して意識に於て我の存在の確實なることを知りまた之れより考へて神の存在することを知ると論せり。是れ即ち近世哲學の始めに於いてデカルトの説ける所を豫想せるものなり。此の吾人が意識證明を根據として出立する思想は哲學の歴史に於いては新傾向を含めるものと云はざるべからず。

〔二五〕基督敎理の組織はアウグスティヌスに於いて一段落を告げたりと謂ふべし。而して其の敎理を取りて更に之れを哲學的に組織せんとしたるものは所謂スコラ哲學なり。然れどもアウグスティヌス以後スコラ哲學の起れる迄には大凡そ四百年の間隙あり。是れ歐洲歴史に謂はゆる暗黒時代にして、北方の蠻人が羅馬帝國を蹂躪したる後、久しき歲月の間文物其の影を隠したりし時なり。此の文物其の影を隠したりし暗黒時代に於いて野蠻人を教化し且つ希臘羅馬の古代文明の遺物を保存したるものは當時の教會なり。北方の蠻人は當時未だ希臘羅馬の文物を了解すること能はざりしが故に彼等は其の遺物の文學上のものと美術上のものとに論なく悉く之れを破壊して惜しむ所なかりしが此の時に方たりて彼等野蠻人を懐け得しもの唯當時の宗教的勢力ありしのみ。アウグスティ



「キリストの思想によりて基礎を堅大にしなる羅馬教會の大組織、其の大宗教的勢力にして始めて能く彼等蠻人を教化し遂に彼等をして希臘羅馬の文化を了解するに至らしめしなり。希臘羅馬の文化の遺物を傳へて彼等に手渡したるの功績は専ら教會に歸せざるべからず。一言にして云へば此の時に方たり古代の文藝は寺院に其の隱家を發見せるなり。中世紀に在りて文事は勿論産業の事に至るまで凡そ社會の事業に於いて指導者となりしものは羅馬教會の僧侶なり、彼等が當代の知識の倉庫なりしなり。」

### 第二十三章 中世紀哲學總論

〔一〕 基督教會の教理は教父時代に於いて略、其の形を成じ而して教理を形づくらんが爲には主として希臘哲學を用ゐたりしが、哲學と宗教、道理と信仰との關係に就きては未だ明かに決定する所あらず、或は教義は哲學上より考へてまた道理にかなふ者なりとし、或は兩者の必ずしも一ならざることを主張せるものあり。蓋し尙ほ宗教と哲學、信仰と道理とは唯相並びて存在し未だ其の間の關係の明瞭に定められざりし也。中世紀哲學は更に進みて宗教上の信仰をば哲學上道理あるものとして論ぜんとするものなり、別言すれば其の目的哲學上の究理と宗教上の信仰との一致することを示さんとするに在り。教父時代は之れを教理組織の時代といふべく、中世紀哲學は已に組織せられたる教理を受け繼ぎ道理に合ふものとして之れに哲學的組織を與へんとするものなり。此の事を成就せんとしたる人々是れ所謂スコラ學者、而して件の目的を以て成れる當時の教學是れ所謂スコラ哲學なり。

上述せし如く歐洲の文物は一時暗黒時代の裡に没したりしが、シャルルマーヌ帝の頃



より或は朝廷に附屬し或は寺院に附屬したる學林を興こして學者を集め學問に従事せしめたり。當時學者はなべて教會の僧侶にして其の謂ふ學問は専ら教法を講ずるとにありき而して其れらの學林は其の初め傳教師を養成するの目的を以て興こりし也。此等の學校即ちスコラ(Schola)に集まりて學を講じたりし故を以て彼等にスコラ學者(Scholastic)といふ名稱あり彼等は一言にいへば教會の學者即ち教法師(Doctores Ecclesiae)なりき。

(二) スコラ學者の目的とせる所は教會の信仰の道理にかなへることを示さんとするに在りしが故に彼等の根據とせる假定は(一)宗教上の信仰に於いて吾人は已に確實不易なるものを有し居ること而して(二)吾人の知識(或は理性或は理解力)は吾人が已に信仰として有するもの、道理に合へることを示すに過ぎざるものなること是れなり。故に彼等に従へば吾人は已に信仰として必要なるものを有し而して吾人をしてその理解せしむるが哲學の目的なり。故に理性は信仰に對して獨立の位置を有するものに非ず唯だ信仰の爲にそれが道理上の根據を示すに止まるものなり。是れスコラ哲學に於いては理性は信仰に對して婢僕の地位に

在りと云はるゝ所以なり。

然れども謂ふところ吾人が宗教上確實として有するものを二様に見ることを得蓋し或は之れを(一)教會の教理として客觀的に定まれるもの、換言せば教會の傳説として存在するものとも見るを得べく或は之れを(二)各人の心底に宗教上直接に實驗する所のものとも見るを得べし。約言すれば此の二つのものは教會の制度教理信仰傳説として存在するものと各人の主觀に直接に意識し實驗するものとにして是れさきにアウグステイナスに於いて相交錯して存在せりしものなり。前者を取りてその道理に合へることを示さんとしたるが是れ嚴密なる意味にいふスコラ哲學にして後者に立脚して専ら各人直接の宗教的經驗に基きて説を立てんとせるものは神秘家なり。蓋し中世紀哲學に於いては嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に神秘家の流れの存在するを認む。中に就きスコラ哲學こそ中世紀思想の主要の部分を作成するものなれば一言に之れを中世紀哲學と稱することあり。

今云へる如く嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に神秘者流の在りし外に尙多



少自然科学めきたる研究に心を用ゐたりし學者もありしが此れは他の流派に比しては極めて微少なるものなりき。併しなから後ちスコラ哲學の衰微し破壊するに至り却つて大に其の頭を擡げ來たり因りて以て學問界の面目を一新するに至れるものは後に述べんとする所を以て知らるゝ如く實に自然界の科學的研究なりき。

〔三〕 斯くスコラ哲學の目的は信仰と道理との一致を示さんとするに在るを以て宗教上の信仰が道理に合ふことを證し得たりと考へたる時は是れ正さしくスコラ哲學の最も生氣を有したりし時にして其の兩者の必ずしも相合ふもの非ざるを認め寧ろ全く其の領域を相分かつたんとしたる時は是れ即ちスコラ哲學衰頹の時代なりとす。

中世紀哲學は略之れを三期に大別するとを得。第一期は第九世紀より第十二世紀に至るまでにして之れを其の發生の時代と稱し得べし。第二期は第十三世紀にして其の全盛の時代なり。第三期は第十四及び十五世紀にして其の衰頹の時代なり。各期の思想に於いて其の基礎となれる特殊なる哲學上の學說あり而し

て這般學說は皆希臘の哲學に由來せるものなり。第一期に於ける哲學的基礎はプラトーン學風の實在論第二期のはアリストテレス學風の實在論第三期のは唯名論なり。哲學思想の上より見ば實在論と唯名論との争ひがスコラ哲學の骨子を成せりといふを得べし。而して唯名論の勝を制するに至りて信仰と道理とが相分離するととなれる也。中世紀哲學の經過を希臘哲學のに比すれば恰かも反對の趣を呈せりと云ふことを得べし。希臘哲學はもと學術的研究の通俗的宗教より分離することによりて始まれるものなりしが其の末路なるプラトーン學派に至りては遂に俗間の宗教に合躰し宗教的思想を離れて哲學なしといふも不可なき有様となれり。中世紀哲學はもと宗教と哲學とは相一致するものなりと云ふ確信を以て生まれりしが其の末路に及びては兩者は全く範圍を異にするものなりと云ふに終れり。

〔四〕 哲學思想の内容より云はば中世哲學は概ね希臘學術の遺物を受け繼きたるものにして哲學上其が根本思想に特に新らしきものあるを見ず。嘗に然るのみならず中世紀の思想に於いて哲學は宗教に對して寧ろ婢僕の位置に在りて獨



立のものならざるの故を以てスコラ學は正しくは哲學と謂ふべきものにあらざると考ふる史家もあれど歴史上より見てそを一種の哲學的思想と云はんは少しも不可なし。歐洲思想の變遷を叙せんには中世紀思想を飛び越ゆると能はず、且つ其が根本思想は希臘哲學より來たれりとはいふものから、其れが當時教會の教理に形を成せる基督教思想に和合したるの故を以て、また多少當時に於ける新問題を解釋せんとしたるの故を以て尙其中幾分在來の哲學に存せざりし新しき趣きの生し來たれんとを忘るべからず。

中世紀に於いて希臘哲學は初めより善く知了せられたるにあらず。當時の學者が最初希臘哲學に關して有したる知識は極めて淺少のものなりしが、後に至りて漸次希臘羅馬の哲學及び凡べて古代の文物流れ込み來たり、而してスコラ學者これを以て當時の羅馬教會の理想に哲學的組織の表現を與へんとしたるなり。而して殊にそが組織の用に供せらるゝ材料を與へたるものはアリストテレースの哲學なりき。然れども希臘哲學を假り來たることは一方に於いて教會を利したると共に他方に於いては其の信仰を維持する上に障礙を呈するの結果に至ら

ざるを得ざりき。何となれば希臘に起こりし哲學的研究は元來究理心の獨立を根據としたるものなれば其の研究の進むに従ひ其れが教會の信仰に對して獨立を稱へんとするに至るは自然のとなればなり。

且つまた嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に流れたる神秘説よりいふも其は一個個人が厚き敬神の心と深き宗教的經驗とを基として立ちたるものなれば固より教會の目的に援助を與ふる所あり。蓋しスコラ哲學が動もすれば單に論理的、究理的、組織的に流れんとする傾向に對して深奥なる宗教的確信を維持せんとしたるものは神秘家なりき。然れども他面より見れば是れはた教會の教理と權威とに對して不利なる傾向を有せる所あり。何となれば神秘説は個人が自家の意識に存生する實證を基とするが故にそれが教會の定めたる教理に合はんとを必ずべからざれば也。

宗教と哲學とを一致せしむることを目的とせるスコラ學其のものは道理と信仰とを相接觸せしむることにて於いておのづから其の辨證討究の結果は往々教會の教理より見て正當ならざる論說に陥らんとしき。是れ其の學本來の目的よりし



て止むを得ざりし事なり。蓋し信仰と道理との調和を計るといふ其の事は其が自然の結果として道理によりて教會の定めたる信仰を牽強附會するを免るゝ能はざればなり。

## 中世紀哲學第一期

### 第二十四章 スコラ哲學の發生

(エリゲーナ及びアンセルムス)

〔一〕希臘哲學に於いて新紀元を劃したるはソクラテースが所謂概念的知識の論によりて開始せられたる研究なり。件の思想はプラトーンのイデア論ともなり、次いでアリストテレスの相索の論となりて遂に希臘哲學の頂上に達せり。中世哲學は其の主要なる觀念を希臘哲學に取り來たり之れに被らすに頗る趣を異にしたる衣裳を以てしたりしが謂ふところ主要なる觀念も畢竟すれば彙にプラトーンのイデア論及びアリストテレスの所謂相の論となりて現れたりしも、の即ち通性の論に外ならず。通性と個性との關係は前に云へる實在論と唯名論との爭論の中心的問題にして是れ即ち中世哲學の骨子とも謂ふべきものなり。

〔二〕件の通性論即ちプラトーンに於いてイデア論となりて存在せる思想の夙く中世紀哲學に影響せしは専ら其れが新プラトーン學派風の形を取れるものなり。但し希臘哲學上の著書の當時に傳はれるは基督教會に於いて新プラトーン



ン學派風の思想を混和して成りしもの及び後世註釋家の手になりしもの數種の外には殆んど無く希臘哲學者みつからの著作としては唯アリストテレースが論理學の一小部分及びプラトーンのテイマイオスの知られたるに過ぎざりき。新プラトーン學派に従へば万物の神體として働き居る者は形骸なきもの、即ち精神的のもの一言にいへば理想なり。而して此等理想の根原は絶対に一なる者なり。絶對者より出で、漸くに個物界に近づき下るに従ひて物々次第に不完全となる而して再び完全なるものとならんには其の段階を上りて絶對者に合せざるべからず。此の新プラトーン學派風の思想に影響せられて中世紀哲學の濫觴となれりしはスコットス、エリゲーナ(Scotus Erigena)の所説なり。

スコートス、エリゲーナ(Scotus Erigena)

〔三〕 彼れは紀元後八百年乃至八百十五年に生まれ八百七十七年には尙ほ生存せりき。恐くは愛蘭土の産なりしならん。巴里なる宮廷の學校に聘せられて教授たりき。彼れ初めてスコラ哲學の精神ともいふべき語即ち眞正の宗教は眞正の哲學なり眞正の哲學は眞正の宗教なりといふことを唱へ出でたり、蓋し彼れは

道理と教會の教義とを相並べて其の一致することを示さんとせしなり。ゆゑに彼れの論證は一方に於いては教會の教義を標準とし一方に於いては理性を根據とせり。されど彼が實際爲す所の見れば寧ろ道理を獨立なるものとして之れに従へる傾向あり。而して彼れは固より公然教會の教理に反對することは爲さざりきと雖も其の道理と信仰とを相和せんとするや重きを道理に措きて之れに合はさんが爲には教會の教ふる所を譬喩として解するに躊躇せざりき。エリゲーナは其の標準とする所の理性を知識的直觀(intellectualis visio)或はintuitus(Enosticus)と見たり。彼れが所謂理性は唯だ論理の歩武を追うて推理するものを謂ふにあらすして寧ろ眞理を直觀するものを謂ふ。彼れに従へば吾人の有し得る最高知識は思想と存在とを一致せしめたる直觀(intellectus)次ぎなるは論理をたどり行く推理作用(Ratio)最下に位するは五官の知覺なり。理性的直觀を以て最高知識なりとする點に於いて彼れが如何に新プラトーン學派に影響せられたるかを見よ。

〔四〕 エリゲーナまた新プラトーン學派風の思想に従ひ説きて曰はく神は凡べ



ての物の太原即ち絶對的原因なり。凡べての實在は彼れの中に在り、彼れの外に實在するものなし。萬物の存在すと云はるゝは神がそれについて現るればなり、故に森羅萬象は神の發現といふも可なり。神其のものは萬物を超絶す吾人は彼れに附するに彼れを定限する性質を以てすること能はず、善といふとも以て彼れを形容するに足らずと。エリゲーナは此の神を名つけて全有 (το παν) 又は自然 (Nature) と云へり。

神は萬物を造化する所以のもの而して造化せられたるものは世界なり。而して能造化なる神と所造化する萬物との間に位するものは形骸以上の理想にして即ち萬物の模範的原因 (causae primordiales) として其をしかあらしむるもの也。これは造化の太原なる神に對すれば造化せられたるもの、世界に對すれば能造化にして能く萬物を造るものはれ、ロコスなり。ロコス即ち理想の全体は神の發現にして其の中の最高なるものはれを至善と云ふ、此等の理想が高下の段階を成すの關係は恰もプラトーンがイデア論に於いて説けりし所の如し。斯くしてエリゲーナは萬有は三段を成すと見たり。第一は神即ち能造化にして所造化ならぬ自然

natura quae creat et non creatur) 第二は萬物の模範的原因にして是れ一面所造化にして一面能造化なる自然 (natura quae creatur et creat) 第三は唯だ所造化にして能造化ならぬ自然 (natura quae creatur et non creat) 即ち天地の萬象なり。

神は常に萬物の太原なるのみならずまた萬物の究極なり。凡べての物は神に歸入し和合することを以て其が終極の目的となす。エリゲーナは右述べたる三段階の外に造化せられたる萬物が神に復歸して彼れに一致和合する状態を設けり。即ち前者に於ける開展 (egressus) の方面と共に復歸 (regressus) の方面あるを云へり。以爲へらく是れ即ち能造化にもあらず所造化にもあらずる自然 (natura quae nec creatur nec creant) なり、是れ即ち凡べての物が神を我が實性として、能知なる主觀と所知なる客觀とが一に契合したる状態なり、人間にていへば前に所謂知識的直觀によりて神と融合せる状態なり。但し此等四段の状態は實は一體を成せるものにして唯だ吾人の考ふる時にそを四段に分かつのみ、如實には其の間時の前後なく皆同時に相合して一全體をなすものなり。

〔五〕 前にもいへる如く神は凡べての定限を絶するもの唯だ發現して万物とな



れるのみ。而して其の發現したる万物は皆至善を極致とす、各善に與かる(即ち善き所ある)の故を以て存在す。實在は皆な善なるものなり。惡は消極的のもの即ち實有の欠乏これ惡なり、惡といふ實有の躰を具ふるものあるに非ず。吾人に於ける罪惡は意志の向け方の誤れる也、詳しく云へば眞實存在せざるものを眞實存在するかの如く迷想しそを善なるものとして意志する、是れ即ち罪惡の根元なり。かくの如く罪惡に於けるの意志は非有なるものに向かひてこれを求むる者なれば必然失敗せざるを得ず、換言すれば罪惡はそれが必然の結果として刑罰を受けて亡びざるを得ず。而して萬物は皆遂には神に歸り彼れに和合すべきものなり。

〔六〕 かくの如くエリゲーナの思想は一見して其の如何にプラトーン學派風(寧ろ新プラトーン學派風)の思想に影響せられたるかを認めらるべし、従ひて後に教會が彼れの説を排斥して正説ならずとしたるも怪しむべきとにあらざ、蓋し當時に在りては哲學は尙一般に怪しげなるものとせられし趣ありしが上にエリゲーナの思想は前に述べたる所にてても知らるゝ如く教會の方面より云へば餘りに獨立なるに過ぎたればなり。彼は時代に先んじて出でたる深奥なる思想家なりき。

スコラ哲學を組織することに於いて彼れよりも更に正當なる意味をもてスコラ學者と云はるべきはアンセルムスなり。

〔七〕 アンセルムスの出でたる時代とエリゲーナの時代との間には殆んど二世紀の隔たりあり。益シシャルマーヌ帝の歿後歐洲の天地は復た擾亂の世となりて時勢はまばし學問の隆興に適せざりし也。アンセルムスの出でたるは十一世紀の前半に在り。スコラ哲學は彼れに於いて初めてそれが正當の目的に適へる組織を成せりと謂ひつべし。

#### アンセルムス (Anselmus)

アンセルムスは紀元千三十三年アオスタに生まれ千百九年に歿す、カンターベリイの大監督なりき。信仰と知識との關係は彼れに於いてスコラ哲學に取りての正當なる主義によりて更に明らかにせられたり。彼れ以爲へらく宗教上の信仰は知識に先だちてあるもの也。知識を開きて道理上推考することを爲し得ざる者は信仰を以て足れりとすべし、然れども更に進みて知識に達し得る者に取りては信仰に加ふるに其の信仰の理由を以てせんは甚だ望ましきことなり、知識を添



へたるの信仰は單純なる信仰に優れり。而して彼れの考ふる所によれば道理(知識)と信仰とは必ず相契合すべきものなるを以て假りに特別の天啓は無きものとして唯吾人の理性に依りて推考して宗教上の信仰を立し得べしとす。故に彼れの論法は吾人の通常謂はゆる理解力を用ひ論理をたどりて辨證するに在り。此の點に於いて彼れの論はエリゲーナが直觀的知識を説けるとは其の趣を異にせり。之れを要するにスコラ哲學の辨證的論法はアンセルムスに依りて其の形を成したりと云ふを得べし。

〔八〕アンセルムスの思想はプラトーン學派風の實在論に根據せり。其の根據は凡そ物遍通なるに従ひて愈、實有に愈、完全なりといふとに在り。即ちプラトーンが五官に現はるゝ個物を最も實有に遠きものとして漸次イデアの界を溯りて實有の頂上に達することを説きしが如く、個性に近づくに隨ひて實有愈、減し、通性に上るに隨ひて實有愈、増加すといふ思想是れ即ち實在論の根本義なり。アンセルムスの説く所は冥々裡に此の思想を根據として立てりて見て初めて善く之を了解するを得べし。

かゝる思想に基きてアンセルムスは先づ神の存在を論證せんと企てたり。以爲へらく神は絶対に完全なるものにして、之れに優りて全きものは考ふべからず。(quo majus cogitari non potest)斯かる者を名づけて神といふと。此の神てふ觀念は宗教思想の樞軸を成すものなり。而してアンセルムスが此の神の存在を證するの論に曰はく、神といふ觀念其のものに於いて已に彼れの存在することは含まれてあり、如何とならば吾人の心にもあるもの、即ち吾人の思ひ浮ぶることに於いてのみ存在するもの(esse in solo intellectu)よりも吾人の思ひに存在すると共に實物として存在するもの(esse in intellectu et in re)にかた更に多く實有なる者なり。故に神にして若し唯だ吾人の心にも存在する者ならんには彼よりも更に優りたる實在を考ふることを得べし。然るに彼れは之れに優りて世に實有なるもの、考ふべからざるもの、謂ひなり。故に神を以て唯だ吾人の思ひにのみ存在するものとなすこと能はず即ち神は絶対に實有なる、完全なる者として實在すべきものなりと。是れ謂はゆるアンセルムスの實體論上の(神の存在)論證として有名なるものなり。



〔九〕此のアンセルムスの論證に就きては早く已に疑訝を挾める者ありき。ガウニロー(Gaunilo)の駁撃の如きは即ち是れなり。ガウニロー以爲へらく、若しアンセルムスの論の如くならんにはアトランタ島(古人の想像して幸福なる島)の存在も亦同一の論法(即ち完全てふ形容詞を加ふると)によりて證據せらるべし、何とならば唯だ想像上のみ存在して實に存在せざる島よりも更に完全なる即ち實在する島の考へらるゝが故完全なるアトランタ島は實に存在するものなり然らずんば完全ならずと論し得べければなりと。

然れどもアンセルムスの論旨は此のガウニローの駁撃に云へるものと全くは同じからず。蓋しこゝの論點は絶対に完全なる實有なる者といふ觀念とアトランタ島といふが如き觀念とは等し並に取扱ふべき者なりや否やと云ふとに在り。アンセルムスの論旨を酌みて考ふるにアトランタ島といふが如き觀念は必ずしも無かるべからざる者にあらす筈に然るのみにあらずして自家撞着の觀念なりと云ひ得べし。島といふとき一個物を一向きに完全なりと云ふ如きはあるまじきことなればなり。然るに絶対に完全なるものといふ觀念は如何。惟ふにア

ンセルムスの論證の根底には絶対に完全なるものは奈何にしても無かるべからずといふ主意の横はれるあり。蓋し彼れの論證の言ひ表はし方に於いては一面唯だ神といふ觀念を分析して其の存在を證せんとするが如く見ゆれどまた深く其の旨意を探れば此の言表の仕方と相交はりて寧ろ其の根底に横はるものとして眞實に存在するものは絶対に實有なるものなりといふ實在論の根本思想の存するを見るなり。

アンセルムスの論旨を考ふるに心には絶対に完全なる存在者といふ觀念は完全なる島といふ如き觀念とは異なりて必ず無かる可からざるものとして思惟せられしなり。若し苟しくも存在するものあらば其の一切の物が依りて以て其の存在を得る絶対に實有なるもの莫かる可からず。不完全なる個々物は之れを無しとも考ふるを得べし、絶対に遍通なるもの即ち凡べての實有を包含するものをば存在せざるものとは考ふべからず。實有は唯だ實有として考へらるべし、非有として考ふべからず(エレンア學派の思想に聯絡を引ける所あるを見よ。語を換へて云へば凡そ或る事物をしかく)なりと云ふ時には其の事物がしかく)なりと



云はるゝ事に與かり居る所なかるべからず、其の事に與かり其の事を分有するに  
よりて初めて、しかあると云はるゝなり。看るべし一事物をしかくなりといふ  
時には其が與かる事物の實在することを含み居らざる可からざるを。斯くして  
推究し行けば遂に凡べての事物が與かりて其の存在を得る最高のもの、即ち凡べ  
てがそれによりて存在の相を得る所以の絶對者即ち實有其のもの(esse)のある  
を知るべし(プラトンのイデア論に現はれたる思想がいかにか此の論の根據をな  
せるかを看よ)。一言にして云へば、事物若し存在せば其が依りて存在する絶對の  
もの、遍通のもの完全なるもの即ち諸物の實體となるもの無かる可らずといふ是  
れアッセルムスが論證の根底に横はれる實在論的思想なり。

〔一〇〕 斯くしてアッセルムスは神の存在を論證し、而して以爲へらく神の性質  
は其の謂はゆる完全なる者と云ふよりしてものづから解せらる。凡べて世にあ  
るものは皆彼れによりて存在す、彼れを離れて一物もあるなし。更に委しく云へ  
ば神は三一神なり、父と子と聖靈との三つが一の神を成すなり。子は父の言に  
て、父なる神は子に於て自らを云ひ表はす、猶ほ技術家が自らの製作に於いて自ら

を知り自らを現はすが如し。子なる神に於いて天地万物即ち神の圓滿なる相の  
發現の模範的觀念(イデア)あり。父は子によりて天地万物を造れり、語を換ふれば  
子によりて天地万物に現はる。父と子とは現はるゝものと現はれたる者との關  
係を有す、兩者相離れたるに非ず、而して其の相互の通交が是れ即ち聖靈なり。此  
等三つのヘルソナが一體の神を成すといふは、怪しむべきとにあらざ。恰も神の  
象に似せて造られたる人間に於いて想念(memoria)と知力(intellectus)と愛欲(amor)  
との差別はありながら、尙ほ各が他を含みて離れざる一體を成し居れるが如し。

〔一一〕 天地万物はもと神の意中にある觀念の表出されたるもの也。神に於け  
るの觀念は模型にして萬物は此の模型に象どりて造られたるもの、而して神の意  
中に於けるの模型はそれに象どりたる世界に優りて善美なり。吾人の萬物を知  
識するは萬物を我が心に於いて象どる也。萬物は神の創造力によりて無より造  
り出だされ唯だ彼れに依りて存在す故に獨立自存のものとしては萬物は無なり、  
(無より造り出だされたりと云ふは此の意なり)。凡べての物の實有の體は神より  
得たるものにして彼れの圓滿なる相の發現に外ならず、天地萬物は神の光榮を顯



はさんが爲に造られたりとは此の謂ひなり。造られたるもの、中最高なるは自由意志を具へたる知あるもの即ち謂はゆる天使なり。

〔一二〕然るに彼等天使は意志の自由を誤用して罪を犯したり。罪惡は意志の向かふべき方向を誤りたるものに外ならず、須からく唯だ神の光榮を顯彰すべきものが而も恣に自我の慾望を充たさんとするに生ずるもの是れ即ち罪惡なり。眞實は神の光榮を顯すものとしてのみ實在しながら己れ神を離れて獨立自存なるかの如くに自家を思ひ做し來たる所是れ即ち罪惡の根原なり。此の故に罪惡は意志が非有に向かひたる者なりと謂ふも可なり蓋し眞實には存せざる者即ち神より離れたる者としての我が獨立の光榮を得まくして之れに向かひ非有と求むる者なれば也。されば此等の罪惡に陥れる天使は墮落して茲に造化に發現する神の光榮に缺損を生じたりと云ふべく而して神の發現の圓滿ならんには、換言すれば神の光榮の持續せられんには、件の缺損を補足せざるべからず。件の缺損を補はんが爲に人類は造られたり。然るに人類も亦罪を犯せり。何の故に罪を犯したるか罪は素より自由意志に由來するものなれば其の理由と謂ふ

可きものなし (incidental) 理由なく唯だ我が儘なるに由りて出で來たれるなり。是に於いて神の光榮の維持せられんがため復た此の缺損を補ふの必要を生じたり。幸に人類は子孫相遺傳して一跡を成すものなるを以て其の墮落より救濟さるゝを得。人類は此の點に於いて子孫相傳ふるとなき天使と異なり。

同一の人性は父より子に傳へらる。アダムの初めて造られしや全人類は種子として彼れの身に存したりアダムの罪を犯したりし時に人類が罪を犯し人性が罪惡に染めるなり。是れを以て其の子孫は皆罪に染みたる性を得生れながらにして罪を犯す者となれりこゝに一種類のものゝ概念を一跡として見る實在論上の思想を認むべし。然れども斯くの如く一方に於いて其の罪惡の相遺傳するは他方に於いてまた其の救はれ得る可能性ある所以なり。人間はアダムに於いて潰れたりし人性を受け繼ぎて罪に染めるものとなれるが如くにまた基督に於いて實現されたる神聖にして完全なる人性に與かることによりて罪惡を脱することを得るなり。

〔一三〕人間は今已に神に對するの義務を欠けるが故に自力もて己を救ふ能



はず。假令今善事を爲すといふとも、それは唯だ神に對する當然の義務を爲せるに  
て以て其の犯せる罪過を贖ふに足らず。まかも其の罪過は人間自らの犯したる  
ものなるを以て人間自らが之れに對する責任を負はざる可からず。然らば奈何  
にすべきか。曰はく、唯だ一途あるのみ。人間は自らを救ふと能はず、彼れを救ひ  
得るは唯神なり。されど人間の自ら犯したる罪過なれば自ら其の罪過を贖ふを  
要す。故に人間を救ふ者は神にして又人ならざる可からず、神が自ら人間に降り  
人間を自らに引き上ぐるとによりて初めて吾人は救はるべし。即ち吾人は「神人」  
の媒によりて初めて神に歸るとを得而して「神人」として世に現れたる者これ基督  
なり。基督の世に在りて譬めたる艱苦は人間の罪過を亡ぼし得る無限の功徳を  
有す何となれば彼れは人類が其の自然の生殖の道によりてアダムより傳へたる  
潰れたる性を享けず新たなる人として處女の胎に宿りて生れたる者にして些も  
罪惡に染まざる義者にてありながら世に在りて十字架上の苦痛を受けなければな  
り。此の義なる基督の苦痛は不義の樂みを求めて犯したる人間の罪惡を贖ふの  
功徳を有す。基督は神人の一致せるもの、彼れに於いて人性の全く墮落し了した

るものに非ず尙善く神性と一致和合し得ることの證せられたるなり。信仰によ  
りて彼れの功徳に與かり彼れを受け容れて生まれ更へる者は皆無垢なる新らし  
き神の子となるを得べし。

〔二四〕教會の教理を組織し又之れに附するに哲學上の論證を以てせんとした  
るスコラ哲學の正常なる組織はアンセルムスに於いて其の模範を得たりといふ  
を得べし。教父時代に於いて決定せられたる神性論、基督論及び人性論を中心と  
なせる教義を一大組織に建立し上げんとしたるものは是れ即ちアンセルムスの神  
學なり。而して彼れが多くの特に於いてアウグスティヌスの所説を襲ひたる  
こと、また哲學上より云へば通性を實有とする實在論の思想が其の骨髓を成せる  
ことと見るに難からざるなり。

通性のももの果して實在なるかまた如何なる意味にて通性に實在を附すべきかの  
論争はアンセルムスの時に於いて已に其の頭を擡げたり。但し是れより先きア  
リストテレスの論理書或部分に存在する語及び後の註釋者がそを釋せし語  
よりして通性論に關する問題は漸次に學者の注意を惹かんとしつゝありしが此



の時に至りては既に二つの正反對なる學說の明かに分立して互に闘はんとせるを見る。是れ即ち中世哲學史を貫通する實在論と唯名との争ひなり。一派の論者は曰はく、通性(*universalia*)は實在するもの(*realia*)なりと故に彼等を稱して實在論者といふ。他者は曰はく、通性は唯だ名目(*nominis*)に過ぎず、聲として發する氣息(*flatus vocis*)に過ぎずと、故に彼等を名つけて唯名論者又は名目論者といふ。

「一五」初めて明らかに唯名論を唱へ出でたる者として有名なるはロッセリーヌスなり(*Roscellinus*、第十一世紀に生まれ千百二十一年には尙ほ生存せり)。彼れ以爲へらく、實に存在するものは分かつ可からざる個物あるのみ、通性てふものは唯だ個物を總稱するの名目に外ならずと。此の唯名論がスコラ哲學の教説にたいならぬ關係を有することは、已にロッセリーヌスの神性論に於いても見ることが得べし。彼れは三位一體論は正當には三神論と解すべきものなりとし謂へらく、若し三神にあらずんば父は子と共に基督に於いて人間とならざるを得ず、換言すれば子のみが化身して父は化身せずといふこと能はず、故に若し父と子とを一體なりとせば父自らが人間と自らとの媒介を爲すととならざる可からずと。是れ彼

れが唯名論に基きたる個物的觀念よりせる結論なり。而して斯くの如き思想が中世紀哲學を如何なる運命に導かんとするかは尙ほ後に至りて明かになるべし。實在論の根據に立てるアンセルムスが思想は固より斯くの如き思想に反對せざるべからず。アンセルムスは未だ明らかに唯名論に對して實在論を主張せざりしと雖も彼れが思想に實在論的根據あることは嚮に論述したる所を以て明瞭なるべし。

「一六」かくの如く明かに言ひ現されたる唯名論に對して極端なる實在論を主張したるをシナム・ポー人・井ルリアムとす(紀元一千七十年に生まれ一千百二十一年に歿す、彼れは辨證法に於いてロッセリーヌスに聽く所ありき)。彼れ主張するく實躰を有するものは唯だ通性のもの、み個性の差別は偶存のもの(*accidens*)なり。通性は個々物をして存在せしむる眞實の存在者にして其は實躰として全く同一時に(*essentialiter, totaliter, et simul*)存在するものなり。個物に於ける差別は唯偶然のもの、實存せざる外相たるに止まりて實躰は通性の外にあらずと。

アンセルムスが神學の根柢に横はれる實在論は當時教會の本旨に適ふ者とせら



れて唯名論を壓倒せり。一時起こりたりし唯名論は直ちに抑壓せられて其の跡を收めぬ。此の故に中世紀哲學第一期の思想の哲學的根據はプラトーン風の實在論なりと謂ふを得べし。然れども井ルリアムの唱へ出でたる如き極端なる實在論に對しては種々の困難あるを免れざるの故を以て當時主張されたる實在論は此くの如き極端なるもの而已にはあらずして寧ろ多少其の形を變へたるもの多きに居れり。

上に述べたる井ルリアムが極端なる實在論に對しては種々なる難點を掲ぐるを得べし。例へば其の一には、若し通性のみが眞實存在するものにして差別なる個性はたゞ偶存のものならば同一實在に相容れざる個性を有せしめざるべからざることあり、譬へば同一體の人間を或は賢或は愚なりと云はざる可からざるべし。故に實在論は其の極端なるものに存する困難を避けんがために種々の異なりたる形に言ひ表はされなり。其の一は無差別論とも名づけ得らるべし。其の論に曰はく實在する通性は個々物に於ける無差別の邊即ち個性の差別によりて變せざるものなり。と此の論は個物を離れて通性を見ずして個物に於ける通性を説

くの論なり(アリストテレス風の通性論に近寄れり)と見て可なり。此の無差別論の外又或は通性が相異なれる個性の形を取ると云ひ或はそれが相異なれる状態に存すと云ふ如きの解説あり。此の如き言ひ表はし方に從へば通性を實在と見るよりも寧ろ個物の本體或は基本或はアリストテレスの所謂未だ定形を成さざる可能性の如きものと見るに近づけるなり。

實在論はかく種々なる形に言ひ表はされたりしが、爰に注意すべきは實在論に具する萬有神教的傾向なり。若し通性を實在なりとして個性を之れに對せしむるときは畢竟個性に屬すべき森羅萬象は唯實體の外相たるに止まりて其の眞實の本體は通性ならざるべからず。通性をプラトーンのイデアの如く見るも、究竟すれば下なるイデアは上なるイデアに對して實在の少なきものなりと云はざるべからざれば遂に眞の實在者は最高遍通のもの即ち神に外ならずと云ふ論に到達せざるべからず。故に眞實存在するものは畢竟するに神のみにして個々なる萬物は唯だ神の發現せるもの若しは其の状態に外ならずといふ萬有神教風の説に至らざるべからず。而して件の萬有神教的傾向は新プラトーン學派の影響を



現はせるエリゲーナに於いて明かに認められ又アンセルムスに於いてすらも暗々裏に認めらるべし。然れども當時に在りては件の萬有神教的結論は未だ明瞭に又十分に言ひ表はされざりき。蓋し教會の教義たる有神論が萬有神教と相容れざる所あればあり。

「一七」上に述べしが如く實在論種々に言ひ更へらるゝに従ひて多少唯名論に近づく所ありしが、恰も此等兩説の中間に立ちて其の對峙を融解せんと試みたる學者の最も肝要なるを

アベラルドス (Abelardus)

とす(千七十九年に生まれ千百四十二年に歿す)。彼れはロッセリーヌス及びシムボ一人井ルリアムに就きて學べることあり、恐らくは中世紀に於いて最も鋭敏明瞭なる頭腦を具へたりし者は彼れならん。彼れは當時の辯證家の俊秀なる者にしてスコラ哲學の辯證法は彼れに於いて其の頂上に達したりと云ふことを得べし。アベラルドス以爲へらく言辭又は名稱は唯一言一名としては通性のものにあらず、一個の者一特殊のものたるに外ならず。譬へば人間といふ名又は聲は唯だ其

の名たり其の聲たる所に於いては一個の名一個の聲たるに過ぎず、故に打ちつけに通性は唯名のみなりとは云ふべからず、若し未か云は「人間てふもの(即ち通性)は名に外ならずといふに陥るべし。されば極端なる唯名論は解すべからざるものとなる。一言一名が通性の意味を得るはそが或事物の上に就きて言ひ表はさるゝ(立言さるゝ)に由れり。例へば某人なりと立言することに於いて人てふ名稱が始めて通性の意義を得るなり。然れは通性は立言(sermo)に存すと云ふべきなりと。是れアベラルドスが通性論の主意なり。彼れ尙ほ以爲らく其の如き立言(即ち一主語につきて言ひ表はさるゝ客語)は吾人の概念的思想によりて初めて形づくらる。吾人は五官によりて知覺する事物を取りこれよりして概念を形づくることによりて初めて通性の意味を有する客語を造ることを得。例へば彼れも人なり是れも人なりといふとき人なる客語は通性の意味を有するものにして、其の客語を造らるゝは吾人が吾てふ概念を構成するによる。而して斯かる通性の意味を有する客語を用うることが吾人の事物を知識するに必要なものなりとすれば、件の通性に適ふものが眞實事物に於いて存在せざるべからず。是れ即



ち個々物に於ける類同の性 (conformitas) なり。而して斯く個々差別のものが類同の性を有するはそれが造物主の意中に存する同一概念にかたどりと造られたるが故なりと。

此等の思想は判然とはあらぬと錯合してアペラルドスの所説に存在せり。是を以て後世彼れの説を解釋する者或は之れを概念論(即ち通性は唯名のみにはあらず吾人の概念として存在するものなりといふ論)なるかの如くに解し或は之れをアリストテレース風の實在論なるかの如くに解す。アリストテレース風の實在論に従へば通性は個々物の裡に在り (universalia sunt in rebus) と説き、之れに對してプラトーン風の實在論は通性は個々物に先だちて在り (universalia sunt ante res) と唱へ唯名論は通性は個々物の後ちに在り (universalia sunt post res) と云ふ。

〔一八〕第一期に於ける實在論と唯名論との争ひはアペラルドスに於いて一段落を成せりと云ひて可なり。故に或哲學史家は彼れを以てアリストテレース風の實在論を基礎とする中世紀哲學第二期の思想に移るの橋梁と見做せり。且つまた彼れに於いては當時の思想界に於ける一般の平準を超越せる點を發見

することを得べし。彼れは時勢に先んじて倫理學を一科學として(即ち宗教的形而上學の假定に結び付けざるものとして) 研究し初めんとしたる所あり。彼れ説いて曰はく道德上の善惡は外に表るゝ動作に在らずして意志が自由に認諾することゝ在り故に外部の發表なくとも若し意志の認諾にして存せば道德上善惡の差別は已に成り立ち居れりと。而してアペラルドスはまた重きを主觀的方面に置きて徳行の唯一なる根本的標準は各人自らの良心に従ふことにありと考へたり。彼れの見る所に従へば所謂良心は萬人に通ずる自然の道德の法則に外ならず、而して其の法則の内容は何なるぞと云へば神を愛すと云ふとに約つまる。宗教上の究極事件も亦此の自然の道德の法則以外に出づるものに非ず、基督教は此の道德法の純粹の意味を明かにしたるものに外ならず。

〔一九〕上に述ぶる如く道德上の善惡は意志の自由に認諾するとに在るを以てアペラルドスは人間が祖先より傳へて生まれながらに感染せる罪は寧ろ過失 (peccatum) と謂ふべき者、嚴密なる意味に於いて罪惡 (peccatum) と謂ふべき者にあらずとして其の間に區別を立てたり。又彼れは意志の自由に重きを置く所よりして吾



人が罪惡なくして生涯を送ることも必ずしも全く爲し能ふまじき事にあらずと考へたり。彼れは尙ほ罪惡の救しは懺悔の心によりて來たるとも云へり。かくの如き所説を以て知らるゝ如くアベラルドスは當代の合理論者なりき。彼れは又大に希臘人を嘆して希臘の哲學者は基督教以前の基督にしてソクラテース、プラトーン等は神の啓示を得たる者なり、何となれば神の子は智慧にして智慧の在る所何處にも神の子の聲を聞けばなりといへり。かくの如くアベラルドスの所説は當時の一般の思想を超越したるの點ありしを以て彼れは教會に忠ならずんとする者の攻撃を受けたり。

〔二〇〕アベラルドスに至りて當時の辯證法は其の頂上に達したると共に、精密に考ふれば彼れに於いては教會の宗義と全く符合せりといふ可らざる思想の出現せるを見る。是より先き已に只管論理にのみ準據する辯證法に信用を措かずそれを以て吾人に眞實の知識を與ふるに足らざるもの、却りて宗教上の實際に不利なる所あるものと考へたりし人々あり。或意味に於いて斯くの如き危険なる傾向は實にアベラルドス等推理を専らとせる辯證家の説く所に於いて特に明か

に認むることを得べし。辯證法によらず寧ろ他の道を取りて宗教上の實驗を言ひ表はさんとしたる人々、是れ所謂神秘家なり。理論を嫌へる神秘家クレールゾーのベルナル(Bernard 一〇九一——一一五三)の如きはアベラルドスを窘迫して休めざりき。神秘家の中にも聖弁クトル寺院のフーゴ(Hugo 一〇九六——一四一)を頭とせる輩は只管理論を嫌ふとせざりき。當時の神秘家中最も注目すべきは彼等なり。フーゴは唱へて曰はく宗教上の事柄を會得せんには先づ信仰上の實驗の先だてるもの莫かるべからず。道理に背戻するものは素より信仰するに能はざれど、信仰上の事件は必ずしも悉く道理上考へ得べき事のみなりと言ふ可からず、其の一部分は能く道理を以て考へ得らるべきこと以上に在り。唯、論理を以てする辯證法にのみ依らんとするは是れ宗教上の事柄(信仰上の實驗)を窄むるものなり。吾人の知識は先づ外なる物界を知覺する(cognition)に始まり、次に内なる心界を觀る(meditation)に至り、更に進みて神を觀る(contemplation)に及びて初めて知識最高の段階に達せりと謂ふことを得。此の知識最高の段階に在りては沈思冥想我が心理に事物の眞相を看破するのみならず神に没入融和して形



骸を忘却したる最高なる宗教的意識に達せるなり。

〔二一〕上に掲げしフーゴー及び其の徒即ち所謂ギトル寺院の徒は吾人の心を顧みて其の心生活<sup>ココロノイキ</sup>を自識し描寫するとに心を用ゐたりしが當時また此等の神秘家と共に彼の論理を弄し通性對個性の論に狂せる辯證家に慊たらずして其の眼を自然界の研究に轉じたる者あり。ゲルベルト(Gerbert 1003に死す)はアラビヤ學者の學術に接して開發さるゝ所あり大に數學及び自然科学の必要を唱へたり。其の他當時自然界の研究に着目せる者は主として其の思想をプラトーンが其の自然哲學を述べたる『ティマイオス』に連結せしめたりき。アリストテレイスは當時尙唯だ論理の方面に於てのみ知られたりき。此の輩の中こゝに掲ぐべきの名はコンテス人井ルリアム(1026—1091)及びシヤルトル人ベルナル(Bernard)少しくシヤムポー人井ルリアムに後れて生まれ彼れの死後尙ほ四十年間生存せり等なり。

〔二二〕神秘思想及び自然界研究の二流派は共に當時に於いては辯證法を用ゐたる者即ち嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に在りし流れに過ぎざるが就中

自然界研究の方は他に比すれば至て微少なるものなりき。而して其の中央の流なる辯證的思想も已に盡きて更に其の歩を進め得ざるの有様に立ち至れり。蓋し道理と信仰との和合は一應アンセルムスに於いて成就せられ且つ辯證法の精髄はアベラルドスに於いて極まれりといふも不可なく其の後に及びては在來のスコラ學者の教説を基礎とし其の語を集め其の要を摘みて神學語類を編纂するを是れ事とするに至れり。彼等を名づけて集語家といふ。中に就きて最も有名なるをペトルス・ロンバルドス(Petrus Lombardus)アベラルドスの弟子にして紀元一千百六十年に死す)とす。また神秘派に在りてもフーゴーに於いては多少論理を用ゐたる神學論をも爲したりしが後に至りては只管眼を宗教的信仰の主觀的方面にのみ注ぎて狹隘なるの弊に陥るに至れり。かくスコラ哲學の本流と神秘派と共に停滯不振となるにつれ中世紀の思想は更に之れに新生氣を興ふべき新刺激の來たるを待つの有様なりき。而して中世哲學の一大革新を促すへき新動力は亞刺昆亞及び猶太の學者より來たれり。

希臘の哲學思想は彼等亞刺昆亞及び猶太の學者によりて更に多く歐洲に輸入せ



られ、之れによりて中世哲學は新生面を開き遂に第二期なる全盛時代を成すこととなれり。されはスコラ哲學の全盛時代を説くの前茲にしばらく眼を轉して亞刺毘亞及び猶太の學者間に於ける哲學思想の由來及び其の經過を見ん。

### 第廿五章 アラビヤ及び猶太の哲學

〔一〕モハメット教徒がアラビヤに起こり一手に干戈を執り一手にコランを携へて廣く四方を征伐するや、シリヤ小亞細亞を始として東は印度に入り西は亞弗利加の北海岸を打ち靡かして遂に西班牙半島に侵入せり。而して紀元後九世紀より十二世紀に至る間モハメット教國には文物大に煥發して諸種の學術技藝は基督教國なる西歐に於けるよりも遙かに隆盛を來たし數學天文學化學金石學生理學等の局部的研究に多少其の歩を進めたり。蓋し希臘哲學の末期に於いても這般の局部的研究に従事せる學者少なからざりしが、其の結果はアラビヤの學者の繼承する所となりき。

〔二〕哲學思想も亦此の時に於いて彼等アラビヤの學者間に起こり來たりしが、彼等の専ら遵奉せし所はアリストテレイスの哲學にして、其の論じたる根本問題は畢竟するに(一)相素の論及び(二)原動者の論に外ならざりき。蓋しモハメット教は嚴密に獨一神を禮拜するものにしてアリストテレイスが一原動者を神と見たる有神論は最も其の教理に適ひ易きものなりき。宗教思想と希臘學術より得たる



哲學思想と相接觸したるの様はモハメット教に於けると猶太教に於けると基督教に於けると大に相似たるものあれど、モハメット教國に在りては哲學を講したる者は僧侶にあらずして多くは醫家なりしことに於いてスコラ哲學と其の面目を異にせり。アラビヤ學者間の哲學思想は宗教上よりは常に多少猜忌の眼を以て視られたり。希臘哲學思想は深く彼等の中に其の根を下し特殊なる生長を遂ぐる能はさりき。

(三) アラビヤ學者の最初に希臘哲學より受けたりし影響は直接にアリストテレスより來たりしにはあらずして寧ろ新プラトーン學派の趣を帯びたる思想よりしたり希臘哲學に於ける最後の組織なる新プラトーン學派の影響を最初に受け而して後に溯りてアリストテレスに及べるはアラビヤの學者と西歐のスコラ學者と共に同一轍に出でたり。新プラトーン學派の説に影響せられて出でたるアラビヤの最初の學者をアル、ケンディ (Al Kindi) エリゲンナと同時代の人とす。其の後にはアル、ファラビあり (Al Farabi) 紀元後九百五十年に死す。彼等の思想は畢竟アレクサンドリアに於ける學風を受けたるものなりき。

(四) 尙後に出でたる

イブンシーナ (Ibn Sina)

即ち歐洲學者のアヰセンナ (Avicenna) と名けたる者九百八十七年——千〇三十六年は直接にアリストテレスに溯り其の學を奉したる者にして東方亞刺比亞學者の巨擘なり。アヰセンナ説いて曰はく、萬物の太原たる絶對に純一なるものは完全なるものにして必然に存在するものなり、吾人は其の性質を限定すると能はず。而して之れに對し本來存在する物質あり、物質は單に可能性のものなり。凡べての働らきは神より來たるものにして、神は本來存在する物質を取りて世界を造り成したるなり。此の世界に完全ならぬものあり、秩序の缺けたるあり、又物の個々に差別せらるゝことあるは物質の然らしむる所なりと。即ちアヰセンナは二元論を取れり。また曰はく神によりて第一に(即ち直接に)生ぜしめられたるものは原智 (Intellegentia Svicenna prima) にして是れ凡べての世界を司り又物質を取りて之れに定形を與ふるもの、また凡べての天躰を始めとし吾人の住する大地に至るまで何處にも充ち亘りて宇宙の秩序を保ち活動を生ずるものなりと。



アギセーナの所説に於いて特に注意すべき點は其性論なり。彼れ説いて曰はく、通性は神の意中に在る觀念としては多なる物に先だちて (ante multitudinem) 存在す。多なる物は神の意中にある觀念に象どりて造られたるものにして、一種類の多なる物あるに先だちて其の種類の模範となるべき觀念は已に神の心に存在せるなり。又一種類の事物に通じて言ひ得べきものとしては、通性は多なる物の中に (in multitudinem) 在り、即ち其れ等事物の通性として其の事物に存在するなり。通性はまた吾人の心の中に形づくる概念としては多なるもの、後に (post multitudinem) 在り、即ち多なる物を觀察したる後に吾人が心裡に想ひ浮かぶるものなりと。かくの如く通性を三様に見ることは後にスコラ哲學に採用せられて實在論對唯名論の争ひを決するの一斷案となりき。

〔五〕哲學はモハメット教徒の間に在りては一般に善受せられざりしを以て、東方の該教徒間に於いて其の攷究は漸次に衰へ行けり。かゝる時に當たりて屢々出で來たるは哲學上の懷疑説にして、之れを用ゐて單純なる宗教上の信仰を保持せんとするは往々あるならひなるが、此の時に於いて亦實にかくの如き現象の認めらるゝあり。哲學を以て依頼するに足らざるもの到底確實なる知識に達する能はざるものと見て、經典の教ふる所、宗門に定むる所に隨順することを唯一の安心立命の地としたりし傾向はアル、ガズリ Al Gazali 千五十九年—一千百十一年) によりて表せられたり。

〔六〕モハメット教國の東方に於いて哲學攷究の衰へたる頃恰も其の西方即ち西班牙に於いて其の攷究の起これるあり西班牙の亞刺比亞學者中最も傑出したるを

イブンロシッド (Ibn Roshd)

即ちち歐洲學者のアエロエス (Averroes) と稱へ來たりたるもの (一一二〇—一一九八) とす。彼れは有名なるアリストテレスの註釋者にしてアギセーナよりも嚴密にアリストテレスの説を闡明し且つ之れを遵奉せんと力めたり。彼れアギセーナに對して唱へて曰はく、相は外より素に與へらるゝものにはあらずして本來素に可能性として存するもの唯だそが開發せらるゝもの而してそを開發する者即ち神なり。故にアリストテレスに従へば萬物の創造は可能より



現實に移るの謂に外ならず、全く無きものゝ生出するの謂ひに非ず、換言すれば諸物が已に存在するものゝ内部より自然に開發し行くを謂ふなりと。

又曰はく吾人に於ける原動理性(*sons' noy' tines*)と所動理性(*sons' noy' tions*)とは人類の遍通知性(*intellectus universalis*)の兩面に外ならず。各人が此の遍通理性を受け容るゝの様是れ謂はゆる所動理性なりその各人に受容さるの分量等は相異なりて此の個人的差別の方面は各人の身軀と共に生滅す。人々に受容さるゝの趣に差別はありながら尙それが各人に通して働く同一理性たるの方面是れ即ち原動理性なり。人類の遍通性は永恆のものにしてそれが吾人個々の人に宿りて少らく個人の理性となり、また復歸して同一の知性となるは恰も光線の姑く相分かれて種々の色をなすが如し。故に吾人は個人としては不死のものに非ず、唯遍通の理性を享有せるとに於いて不朽不滅なるのみ。

〔七〕 西班牙の亞刺比亞人中に於いても哲學研究はモハメット教有司の手によりて抑壓せられ而して其の研究は寧ろ西班牙に於ける猶太人間に移り行けり。但し猶太學者間に於ける哲學思想は畢竟亞刺比亞學者の哲學思想に附隨せるもの

と見て可なり。彼等の中最初に掲ぐべきをサロモン・ベン・ガビロル(*Salomon ben Gabirol*)即ち歐洲學者の所謂アヴィセブロン(*Avicenna*)千〇二十年に生まれ千七十年以前に死せり。彼れは新プラトーン學派風の影響を受けたる者なりき。猶太學者中の巨擘は

モセス、ベン、マイモン (*Moses ben Maimon*)

即ち歐洲學者のマイモニデス(*Maimonides*)と名づけたる者なり。一千百三十五年ユルドーヴに生まれ一千二百四年カイロ府に死せり。彼れは大軀に於てアリストテレスの説を奉じたれども猶太教の立脚地より神は相と素とを共に無より造り出だしぬと唱へたり。(アヴィセブロン已に彼れに先だちて神が其の創造力即ち意志を以て素即ち物質を造りたりと説けり)マイモニデスの後を襲ひたるをレヴィ・ベン・ゲルソン(*Levi ben Gerson* 一千二百八十八年頃に生まる)とす彼れはアリストテレスを研究することマイモニデスよりも精しかりしが尙多くはアエロエスに従ひたり。

猶太學者間にも亦哲學に對して懷疑説を取り猶太教の傳説を單純に信仰すると



とを宗教上必要なりとしたる者あり。ラビ、イェフダ、ハレー( Rabbi Jehuda Halevi )  
 是なり。彼れは猶太學者間に於いて恰もアルガヅリーがモハメド教の學者に取  
 りし如きの位置を取れり。

### スコラ哲學第二期

### 第二十六章 全盛時代

〔一〕猶太學者及び亞刺比亞學者の著作は猶太人の手によりて歐羅巴の基督教  
 國に傳へられたり。是に於いて希臘哲學は一は猶太及び亞刺比亞の學者みつか  
 らの論議せるもの、これは概ねアリストテレス及び新プラトロン派の學風を帶  
 びたるものにより、一は彼等がアリストテレスの著書を翻譯せるものによりて  
 漸次歐洲の學者間に知れわたりぬ最初には唯だ寧ろ肝要ならざる一部分の外は  
 知れざりしアリストテレスの論理學も今や其の全部の知れわたるに至り又其  
 の純理哲學、物理學、心理學等も次第に傳へらるゝに至れり。斯くして中世紀學者  
 がアリストテレスを受容したることは略、第十二世紀の中ごろより第十三世紀  
 の中葉に至る一百年間に於いてせられたり。

最初かくして基督教國に輸入せられたる希臘哲學の著作は新プラトロン學派風  
 の臭味を帯びたるもの多かりし故を以て教會の反抗を受け而して此の反抗は初  
 めはアリストテレスの著書にまでも及びたりしが漸々彼れの哲學と新プラト



イン派の學說との全一視す可きものに非ざることの明かになるに従ひて彼れの著書の認許せられ、後には其の研究を奨励し遂には其の學を講ずるを以て教會の學者に缺く可からざるととなすに至り、而して單に哲學者(Philosophus)と云へばアリストテレイスを意味することゝなれり。即ち當時はアリストテレイスが哲學上の主權を握りたりし時代なり。

(二) かくの如くにアリストテレイスがスコラ學者に受け容れられ又尊崇さるゝに至りたるには其の理由あり。其理由の一は彼れが哲學の方式が當時の教學を組織するとに便利を與へたること即ち此の點に於いて彼れの論理式が最も有用のものなりしとなり。其の二は教會が自然界に關する知識をも網羅して當時の學界の主權を握りあらゆる世間の事を司るものとなるの必要を感じ而してアリストテレイスは最も這般知識の淵源となるに堪ふるものなりしことなり。其の三は彼れの有神哲學が希臘哲學の中最も教會の教理即神學を組織するに適合せりと思はれたることなり。此等の理由を以てアリストテレイスの哲學の大に用ゐられたるによりてスコラ哲學は其の面目を一新し遂に其の全盛時代に入るこ

とゝなれり。即ち此の期に在りては教會の教理組織に於いて已にアンセルムス等が遺したる功績をも收め之れに加ふるにアリストテレイスが哲學の方式を以てして能く一層偉大なる組織を成就したりし也。

(三) そもそもアリストテレイスが名を以て説かれて入り來たりたる新學說は到底防止し得らるべくもあらず、故に寧ろ之れを容れて其れが決して教會の教義に戻らるものに非らざるを示すと換言すれば教會の教義をアリストテレイスの哲學も辯護するとは當時の教會に取りて最も策の得たるものなりき而して是れまた他方に於いては新プラトイン學派の自然論の傾向を帯びたる說を唱へて教會の教理に違背する方向に出でんとする者の口を噤ましむるの最良手段なりき。アリストテレイスの遵奉せらるゝや、遂には道理と信仰との和合といふも其の謂ふところ道理は各個人の理解力を用ゐて推理したる所よりも寧ろ彼れの哲學に説かれたるものといふ程の意味に變じ來り彼れの說に合ふといふこと是れ道理に合ふといふと同一義なるが如くに思惟せられたり。

(四) アリストテレイスの學說を用ゐて教會の教理に偉大なる組織を興へんと



試みたる最初の學者はヘールスのアレキサンダーなり(Alexander of Hales 英吉利に生まれ一千二百四十五年に没せり)。彼れに優りてアリストテレスの哲學に通じ而して更に一層組織的に教會の教理を説かんとしたる者は次ぎに出でたるアルベルトスマクス(Albertus Magnus 即ち偉大なるアルベルトと稱せられたる者、一千百九十三年獨逸に生まれ一千二百八十年に没せり)。彼れは通性論に斷案を下して曰はく、通性は神の意中に於ける造化の模範としては個々物に先立ちて(ante res)存し多なるものに通じ之れをして一種類を爲さしむるものとしては個々物の中に(rebus)存し、また吾人の抽象して造りたる概念としては個々物に後れて(post res)存すと。此の解釋はさぼろながらに已にアペラルドスの所説に含まり居たりとも見るを得べきものなるが是實際二百年前にアペセンチの道破したるもの、而して畢竟アルベルトはアペセンチの所説を辿りてかゝる斷案を下せるなり。アリストテレスの哲學はアルベルトの所説に取り容れられたれども彼れに於いては其はなほ教會の信仰と全く合一するに至らず寧ろ其が傍に並び立てるの趣ありき。彼れに在りては哲學と信仰とはおのづから殊別のものたるの觀をな

し換言すれば兩者の融合は尙未だ教會の欲したるやうには成就せられざりき。スコラ哲學の立脚地に在りて此の兩者を最も善く結合せしめんとし而して當時の思想界の最大且最好代表者とされるは

トマス、アクイナス (Thomas Aquinas)

なり。吾人は彼れが建てたる神學の大組織に於いて中世紀の大理想の反映を見ることが得。

〔五〕トマスは一千二百二十七年伊太利に生れ一千百七十四年に没せり。

彼れに従へば神學の教へんとする所と哲學の究めんとする所とは全く其の題目を一にす、即ち共に伴しく神なり神に關することは天啓を以て示さるゝと共にまた吾人の理性を以て推知することを得、理性を以て推知することを爲し得ざる者には天啓を以て教へらる。但し宗教上の事柄は皆伴しなみに能く道理を以て推究し得らるべき限にあらず。其の中の或事件(例へば化現の事、三位一體の事等)は理性の論證し得る範圍以上にあり。此等は論理を以て嚴密に證明するとは爲し得ざれども亦其の全く有り得べからざる背理の者に非ざるをを示すを得。約言



すれば天啓は吾人の理性の及ばざる所を補ふものなり、即ち其の關係は一が他の上に加はりてそを全くするにあり。トマスが兩者を和合せしめんとする方法は此の關係を以て根據とす。

〔六〕トマスは先づアリストテレスより得たる論法を以て神の存在を證明せんとし所謂第一原動者の無かる可からざることを以て論據となせり。以爲へらく第一原動者は即ち神にして彼れは純然たる相即ち非物質のもの、全き現實のもの、他より定限せらるゝ所なきものなり神は無より萬物を造化し出だしたり、原物質(最初の素即ち諸物の可能性)亦是れ其の造る所なり。

造化の森羅萬象は神の圓滿相を現すもの語を換へて云へば素に於ける無限の可能性の實現せらるゝものなり。神は世界の太原また其の極致にして萬物は幾多の段階をなし神に向かひて進みゆく其の下なる段階の目的は其の上なる段階に至らんとするに在り。

〔七〕かくの如く幾多上下の段階を成せる万物を大別すれば物質界と非物質界とに分かる。非物質界は純然たる靈智のもの、換言すれば純然たる相の働けるも

の (formae separatae) なり。物質界に於いては相は唯だ物質と相結びて自らを實現す。人間の靈魂は靈智のもの即ち非物質のものなるが故にまた不死のものなり然れども其は靈智者の中にては最下級に位するものなれば物質界に接觸して吾人の肉體を形づくるもの (enlechia) として見らるべき方面を具ふ。此の方面に於いては其は物質に於いて其れ自身を實現するものたる也。故に吾人の精神は二方面を具して恰も物質界と非物質界との聯關をなすが如き位置に在り。而して非物質界は物質界の冠として其を全ふするものたる也。以上トマスの所説に如何にアリストテレスの哲學が其形を更へて用ゐられたるかを看よ。

〔八〕トマスの心理説に於いては吾人の知性と意志との關係を論ずる所最も注目すべきものなり。彼れはソークラテースに原由して希臘哲學一般の通説とされる吾人知見が吾人の行爲の指導者なりといふ説を取りて曰はく意志は吾人の知性が見て善なりと定むる所に従ひ之れを得んとするものなり、即ち意志の對境となるものは見て以て善しとせられたるもの、意志は悪しきものを悪しき者として求むることなし。簡單に云へば意志を決定するものは吾人の智性なり。



知性と意志との關係はこれを神に於いて視るも、又彼れの象かたがに似せて造られたる人間に於いて視るも同一也。神は其知性を以て善と認むる所を意志す、而して彼れに在りては其の自性はれ即ち善にして至善と神性とは同一なるが故に彼れ自ら其の意志の對境なり。即彼の意志を決定する者は彼れ自らなれば彼れは自由自在なる者なり。人間の自由は其知性によりて意志を決定する力に在り。此のトマスの説は一種の決定説と稱すべき者、而して是れは後にトマス派(ドミニカンの徒)と其の反對者なるスコットス派(フランシスカンの徒)との激しき争論の主題となれる者なり。知性と意志との關係に就きてのトマスの説は皆に其の心理上に於てのみならず其の道德論上にも亦深大なる關係を有す。彼れ以爲へらく善は其れ自身に(bonum)善なり善は本來其自身に定まり居り他の制定によりて(existitione)成るものに非ずと。

〔九〕トマスの徳行を論ずるや希臘哲學に於ける倫理思想を取りて智勇、節慾、及び公正の四大徳を列擧し之れを世間的道德の綱目となしたり。されど彼はれ此の四大徳の上に更に信、望、及び愛てふ宗教上の三徳を加へ而して此等の宗教上の徳を以て特に神の恵みによりて吾人の得る所となし、また此れを以て世間的道德の上に位し其の全うするものなりと見たり。

トマス以爲へらく、吾人は現世に於いては最高祝福に達する能はず、されど現世は決して厭離すべきものにはあらで、寧ろ是れ修行の時即ち來世に入るの準備を爲すの時なり。吾人の最高祝福は全く神を觀じ彼れを知り得ることに在り、而して此の境涯は來世に至りて始めて全うせらるべきものなりと。斯くの如くトマスが吾人の最高なる状態を以て吾人が神を觀する知的作用に在りとなしたる所是れ彼れが思想主知的なるを示せるの點なり。

〔一〇〕人類社會の起原に關してはトマスはアリストテレスに従ひて人間は自然に社會を結ぶの性情を具ふと説けり。世上の國家は神の制定に基ける者にして人類が罪過を犯して墮落したるの結果に非ず、其の目的は吾人をして世間的道德を修めしむるに在り。然れども吾人は世間的道德に満足せず、更に一步を進め神前に於けるの救済を得ざるべからず、而して之れを得せしむる者は教會なり。故に教會と國家との關係は前者が後者の上に加はりて之れを全うするに在り。



「一一」斯くしてトマスは一切の事物を上下の二界に分ち、而して常に上なる界が下なる界の冠として其の上に位し、其を全うすといふことによりて兩者の關係を説かんとせり。此の彼れが所説は中世紀に於ける羅馬加特利教會の理想を最も巧妙にまた最も偉大に發表せるものなり。蓋し羅馬教會が天下を治めんとしたるの道は世を僧俗の二級に分ち、俗世間の上に位するものとして僧侶の階級を置き、僧侶亦幾多の段階を爲して其の頂上に法王を戴けり。是れ恰もトマスがアリストテレスの哲學を用ゐて物質界と非物質界との二界を分ち、そが幾多の階級を成せる頂上に神を置けると相似たり。尙ほ此二階級の關係が種々なる事相に於いてトマスの説に現はれたるを列擧すれば曰はく、信仰と道理とは全く同一のものならぬと亦相反するものにも非ず、寧ろ一信仰が他道理の上に位してそれを全うし、又超自然界は自然界の上に位し、非物質界は物質界の上に位し、來世は現世の上に位し、宗教上の徳は世間道德の上に位し、教會は國家の上に位して之れを全うす。万物は段階を成して下段の目的は上段に進むにあり、而して一切の極致は神なり。斯くの如く上下の二界を別かち之れを調和するの趣向は是れト

マスがアリストテレスの開發主義の哲學に得たるものなるべし。彼れが思想はアリストテレスの哲學を應用して之れをスコラ學の目的に適はしめんとしたる最も巧妙なる又最も光彩あるものなりと云ふを得べし。是れ即ちアリストテレスに於いて大組織を成せる自然界に關する目的説をば基督教會の(教父時代に成りたる)人類の歴史に關する目的説に結合せしめて自然界の目的を以て人間界の目的に附隨せるものとし、而して自然界及び人間界の経過に於いて神の目的の成就せらるゝと見たるものなり。此の歴史的世界觀是れ基督教神學の一大特色也。

「一二」トマスに於いて其の頂上に達したるスコラ哲學の全盛期は是れ羅馬法王制度の全盛時代(グレゴリー第七世、一〇七三——一〇八五、インノセンス第三世、一一九八——一二一六)の反映なりといふを得べし。而して斯くの如く全盛時代に達したるスコラ哲學に最も莊嚴なる詩的發表を與へたる者は是れをダンテ、アリギエーリとす(Dante Alighieri、一二六五——一三二一)。ダンテは物理上の知識をアルベルトスに取り、人界の論に關しては概ねトマスに従ひたり(但し國家と教會



との關係を云ふところ既にトマスの如くならず、尙後に叙述する所を看よ。

〔一三〕全盛時代に於けるスコラ哲學は其の組織の偉大にして能く諸種思想を網羅せる點に於いて第一期の辯證論と異なり、此の故に此の時代に於いては中央の流の外に別に神秘派と稱すべきものなし。但し他のものに比して神秘的なりし學者の最も有名なるはボナエンテウーラ(Bonaventura 一二二一—一二七四)なるべし、然れども彼れ思想は格別トマスの所説と異ならず。

〔一四〕當時自然界に關するアリストテレスの著作の知られたる等の事によりて學問の區域大に擴張せられ、アルペルトス(其の植物に關する研究の如きを)初めとして天然物の攻究に心をを用うる者少なからざりき。就中一特色を帯びたるをロイシャ、ペレコンとす(Roger Bacon 一二二四年に生まれ一二九十二年には尙生存せり)。彼は特に希臘學術の精神に感化せられて眼を自然界の研究に注きたる者にして、アレキサンダー、アルペルト、トマス等を輕視し殊に此輩の希臘語を能くせざるを嘲りたり。彼は當代一般の思想界に於ける調子を離れたる趣ありて其が爲せる種々なる自然科学上の研究の爲に教會の窘迫する所となりき。

〔一五〕宗教と哲學と信仰と道理との一致を目的とせしスコラ哲學は上述せる如くにして其の最も偉大なる組織を成しぬ。されど仔細に觀察すれば、信仰と道理との分離は業に已に此の時に其の萌芽を發しぬと云ひつべし。第一期以來の議論を経たる後、またアリストテレスの大に研究せられたる後に於いては當初アンセルムスが信仰と道理との内容を全く同一不二となせるが如くには其の關係を見ること能はざるに至れり。當時自然界に關する事件を初めとし總べて哲學上の論は悉く其の標準を希臘の哲學殊にアリストテレスの説に取りたりしが元來希臘の學術は宗教上の信仰を辯護するが如き目的を以て起れるものに非ず、此の故にスコラ哲學は其の由來と精神とに於いて全く己れと異なるもの、遺物を取りて教會の用に供せんとしたるものなれば遂に哲學と宗教との同一のものならぬことに氣づかざるを得ず。當時に在りて兩者を結合するに最も有効なりし方法はトマスの説けるが如く一を以て他を全うするものと見るとにありき、去かも斯くの如く見るに至りては已に信仰(宗教)と道理(哲學)との分離に一步を踏み出だしたるものと謂ふを得べし。勿論、當時に於いてもライムンドス、ル、ス



(Raymundus Lullus 一二三五——一三一五、其の所謂大術即ち吾人の根本的概念を機械的に組み立て、一切の知識の組織を造り出ださんとを目的とせる機械的工夫を以て有名なる人の如く宗教上の真理は道理上悉く説明し得べきものなりと主張するに力めたる者もありたれど是れはむしろ當時の思想の潮勢にはあらざりし也。斯くして其の由來と精神とに於いて全く相異なれるもの(即ち教會の宗教と希臘哲學と)を相合せしめんとして二者を引き合はしむるほど益其の同一視すべからざる點あるに氣づき來たり遂に信仰と道理とは寧ろ全く其の範圍を異にするものなりといふ斷案に到達してスコラ哲學元來の目的を拋棄するに至らんは其の自然の結果なるべし。スコラ哲學は其の目的の自然として遂に其の第三期即ち衰頹の時代に向かへるなり。

## 中世紀哲學第三期

### 第二十七章 衰頹時代

(一) 種々の肝要なる論點に於いてトマスと反對の位置に立ち所謂トマス學徒とスコリトス學徒との論争を惹き起こしたる

ドンヌスコリトス (Duns Scotus)

に於いて吾人は已に中世紀哲學解躰の第一歩を見ることを得。スコリトスは一千二百七十四年(或は一千二百六十六年)大不列顛(恐らくは愛蘭)に生まれ一千三百八年に歿しぬ。吾人は其の思議の仕方について已にトマスとスコリトスとの間に著るき差別を認め、前者は立宗義的にして後者は批評的なり。但しスコリトスも固より教會の教義を疑ふといふにあらずされど彼れは其の眼を從來の立宗義的論證の効力に着け之れを論評して其の眞に如何ほど確實のものなるかを知らんとせり。而して其の如き批評的思想の自然の結果として從來の神學的論證の効力に疑惑を挟み遂に道理と信仰との分離を促すに至れり。

(二) スコリトスは在來のスコラ哲學者に優りてアリストテレスの哲學の眞



意義を看取し従ひて該哲學と教會の宗義(即ち聖書及び教父時代の所傳に基けるもの)との間には塗抹すべからざる差違あることを發見せり。斯くしてスコトスは哲學者が自然のものとして承認する事柄も神學者(即ち宗教家)に取りては罪惡に基ゐしたる墮落の結果と見做さるゝとさへも云へる所あり。彼れはまた事のついでに哲學者に取りて眞理なることも神學者に取りては非眞理と見らるべきこともあらんと云へり。彼れ神學と哲學とを區別して曰はく、神學は専ら實際的のもの哲學は理論的のものなり、兩者は各其の範圍を異にすと。看るべしスコトスに至りては道理と信仰との關係はトマスに於けるが如く一が他を全うするに非ずして寧ろ異別のものとして相分かつるゝに至れることを。

〔三〕されど信仰と道理との分離はスコトスに於いては尙未だ此の後に於けるが如く甚しからざりき、しかも道理を以て論證し得る教會の教義は已に彼れに於いて大に其の範圍を減縮せるを看る。彼れ以爲へらく神の存在はアンセルムスの論證に於けるが如く神といふ觀念其のものより證據すること能はず、唯だ天地に現はれたる造化の作用即ち結果より溯りて其の原因として彼れの存在を推

知し得るのみ。而も其の論證は尙ほ以て神を全能なる者、無限なる者といふに足らず、また神が無より萬物を創造せりといふ事及び吾人が靈魂の不死なる事の如きは道理上論證し得べき範圍のものにあらずと。

〔四〕通性論に關してはスコトスはアルベルトス及びトマスと意見を同じうして通性は唯だ吾人の假想したるものに外ならずといふ、唯名論者の證に反對したれど個物の何なるかに就きてはトマス等と所見を同じうせざりき。トマスは個性の起因(*principium individuationis*)は物質に在りと説きたり而して物質は彼れに取りては欠乏を意味するものなりき。スコトスは之れに反して以爲へらく、個物は決して不完全なるものにあらず、寧ろ通性即ち一種類のものに通じて其を一種類の物たらしむる所以のもの、換言すれば其の種の物の何物たること(*quidditas*)の外に或物の加はれるなり、而して此の或物は是れ一個物を、此の物たらしめて他物と異ならしむる所以のもの(*haecceitas*)なり。斯くの如く通性に一物をして此の物たらしむるところ加はり而して初めてそれが實物たるなり、故に個物は欠けたるものにあらずして寧ろ全きものなり、個物は是れ即ち自然界の目的なりと。故に



スコートス未だ固より唯名論者ならざれども彼れが個物論に傾けるは明かなり即ち彼れは實在論風の萬有神教的思想に反對して有差別の個物の實在と見るとに脚を立せんとせるなり。

〔五〕心理説上スコートスは知性と意志との關係を論ずる點に於いてトマスと反對の地に立てり。トマスは主張すらく、一般にいへば意志は吾人の理性が認め善となす所のものを選ぶと。スコートスは之れに反して曰はく、斯くては吾人の意志は真正の自由を欠くものとなるべし、何となれば知性の作用そのものには自由性ありと云ふ可からざるを以て若し意志が究極の決斷力を有せずして却りて知性によりて定めらるゝものならば吾人は實際に云爲することの反對に出づる力を有せざる可けれ也。而して若し實行せることの反對に出づるの力なくば眞實に吾人を自由なる者とは謂ふべからず、眞實の自由を缺かばまた行爲に對する眞實の道德上の責任をも缺くへし。吾人が理心作用の實際を顧るに意志は決して常に知性の指導にのみ従ふものに非ずして知性の活動が却りて屢意志の定むる所に附隨し行くを見る。但し吾人の行爲するや本より知性の作用に待つ

所あらざる可からず、若し知る所なくんば選擇すべき事柄も莫からん。然れども知性は唯だ意志の選ぶべき事柄を掲ぐるに止まりて最後の選擇を爲すものは意志なり。吾人が意識の發達する次第を見るに初めは先づ知性によりて思念を浮べ而して思ひ浮べたる件の思念が眞に我れのものとならんには之れに注意せざる可からず、即ち意を注ぎて其の念を強くし明かにするとによりて始めて其れが維持せらる。注意を與へられざるものは唯だ一旦漠然と意識に現はれたるのみにして直に之れを脱し去る。而して此くの如き選擇的注意是を意志の作也。如何なるものに注意するかは意志以外に之れを定むるものなし。意志は自らを定むるもの、全く自在なるもの也故に吾人の心理上の作用に於いて中心位を占むるものは意志なり、意志は明かに知性の上に位するもの也と (voluntas superior est intellectus)。即ちスコートスの取れる所はトマスの知性的決定論に對する非決定論にして、意志の絶對的自由 (liberum arbitrium indifferentiae) を主張したる最好の例なり。

〔六〕スコートスは神に於いても意志を以て其の活動の樞軸をなすものとす。先きにトマスは神の意志は其の智が見て以て善となす所に従ふと説きしが、スコ



トマスは之に反對して以爲へらく意志以外に神の意志を決定する者なし其の意志是れ即ち造化の究竟的原因にして其れ以外其の意志を定むる理由と謂ふべきものなし。物の存在するあるは唯だ神のこれを意志せるが故なり。約言すれば意志の活動が實在の根原なり、知性の示す所なる理由てふものは意志して後に生し來たるものにして意志そのものゝ理由はあらず。

斯かる所見よりしてスコートスは道徳上根本の點に於いてトマスと反對の地位に立てり。トマスに取りては善は本來善として存在するものまた神の知性と離れざるもの也。スコートス以爲らく事物の善と云はるゝは其れが神の意志し命令する所たればなり、神の意志を離れ其の命令を離れて物それ自身に善惡の差則なしと。即ち彼れは善の自性的存在 (*per se bonum*) を否み善惡の區別は理由を附す可かざる神意の活動によりて定まるものなりとせり。次ぎに人間の祝福に關してはトマスは曰はく吾人が至極の祝福は神を知り彼れを觀すること (*visio divinae essentiae*) に在り彼れを觀すること自然に彼れを愛することとは附隨し來たると。スコートスは曰はく吾人の祝福は知性の状態にあら

ずして寧ろ意志の状態に在り即ち意志が神にのみ向かひて只管彼れを愛するの狀態に在りと。

トマスはアウグスティヌスに從ひて吾人の救はるゝと否とは些も吾人の意志の與る所に非ずして唯だ神の恩恵による而して其の恩恵の降る時には吾人に其を受けざるの自由なし、神恵は拒み得べからざるもの (*Gratia irresistibilis*) なりと考へたり。スコートスは以爲へらく吾人の救濟を得ると否との決定は一分吾人が自由意志に懸れりと。また彼れは人間が罪過なくして生涯を渡るは實際には無きことながら、事理の上に於いて出來得べからざる事にあらず自家撞着の事に非ずと云へり。スコートスはアウグスティヌスが意志を重んずるの論に立ちて更にそが正當の論歩を進めたるなり。

〔七〕スコートスが神學と哲學信仰と道理とを分離せしめたることの根據は深く彼れが神の意志に關する所論に根ざせり。彼れは曰はく神の所業は凡べて其の絶對に理由なる意志によりて出で來たるもの而して其の意志みつからの活動以外に其の活動を規定すべきの道理と云ふものなしと。即ち彼れの趣旨を推究



し行けば吾人は道理上神の作爲を推究すること能はず神學上(宗教上)のことは唯だ天啓によりて示され而して信仰を以て受け納るゝより外に之れを知測思議すべきの道なしといふ結論に達せざる可からず。スコートス自身はさばかり明瞭に兩者の差別を言ひ表はさゞりきと雖も是れ正さしく彼れが所論の自然の歸結なり。蓋し彼れは深くアウグステイヌスに負ふ所ありて其の意志を重んずるの立脚地を襲ひたり。是に至りて嚮にアウグステイヌスに存在し延いては中世紀哲學在來の思想に存在せりし二流の思想は明かに分離するに至れり即ち希臘の哲學より傳はれる知性を根本とするの論(アウグステイヌスに於いては新プラトニオン學派風の思想を引きて神を觀ずといふ至高の状態を説けるに存在するもの)と意志を以て吾人の精神作用又廣くは凡べての實在の根據となすの論と是れなり。前者の代表者トマスに於いて見るべく、後者の好代表者はスコートスに於いて見るべし。

〔八〕スコートスに於て已に現れ初めたる信仰と道理との分離は彼の弟子なるオッカムの井ルリヤム(一千三百四十七年頃に死す)

に至りては更に著くなりて殆ど分離の極點に達しぬといふも不可なし。スコートスに於ける個物論の傾向はオッカムに至りて十分に發達して遂に唯名論の復起となりぬ。オッカム論じて曰はく若し通性が個物に先だちて存在せば其の存在する状態に於いては必ず個々物たらざるを得ず、若し又通性を以て個物の中に存在するものとせば是れ通性を多なるものとすなり何となればそは多なる物の一々に存在せざる可からざれば也。また此くの如く見る時は一個物は多くの實物の結合したるものとならざる可からず何となれば種々の通性が一個物に并び存在すればなり。かく通性は個物に先だちて存すとも考ふべからず、また個物の中に在りとも考ふべからず、唯吾人の概念として存在すと視るべきものなりと。オッカムの唱へし所は唯名論とはいふものから、最初ロッセリーノス等が唱道せりし所とは同一ならず寧ろ概念論とも謂ふべきもの也。されど個物以外に實在するものなし、通性は實在物にあらずと説く點に於いて概念論は唯名論と同一の立脚地にあり。

〔九〕個物の外に實在する物なきが故に吾人が知識の本原となるものは個物を



直識すること以外にあらざ。吾人が直に個物を知覚するの心作用を説くことに於いてオッカムはトマス及びスコートスと其の見を異にせり。トマス及びスコートスは以爲へらく、吾人の外物を知るや、外物先づ吾人の感官に働き吾人の靈魂は之れに協力してスコートスはトマスよりも此の靈魂の協方に重きを置けり、該の外物の摸寫を造り而して靈魂は件の摸寫を觀て之れを知覺すと。即ちかゝる外物の摸寫之れを *species intelligibiles* と名づくの靈魂と外物との間に介するあるが如く思惟し靈魂が直接に外物を看取するに非ずとせり。オッカムは件の外物の摸寫を以て外物を二重にするもの畢竟不要なりとして之れを捨てたり彼れに従へば吾人の外物を知るは直接なり、されど吾人の思ひ浮ふる所は外物の摸寫にあらざして唯だ外物の自然の標幟なり。言語は之れと異なりて勝手に定めたる標幟なり。故に吾人の知る所は外物それ自身にあらざして唯その志るしとなるもの也。吾人は先づ個物に接して其の如き個物の標幟となるもの(即ち觀念)を思ひ浮かべ然る後また其等の幾多の觀念の標幟として一概念を思ひ浮かぶ。故にかくの如き概念は事物の標幟と云はんよりも寧ろ事物の標幟の標幟なり。

然れば吾人は外物それ自身の有様を知る能はず。外物の知識に優りて確かなるは吾人の内心を觀るの知識なり。さはあれ内心の知識も所詮靈魂の本體を觀るに非ずして唯其の状態を知るに止まる。之れを要するに一切の知識は外物を知覺するか將た内心の状態を知るか其の何れかの經驗に基きて來たるもの此の他に吾人の直接に知識し得るものなし故にまた神を知る直接の知識なし。

〔一〇〕 神を直識すると能はずば吾人は論理の歩を追ひ論證して彼れを知ることを得べきか。論證によりて吾人は如何ほど神に關する知識を得べきか。此の點に於いてオッカムが吾人の道理上知り得とさせる範圍はスコートスに於けるよりも更に窄まりて殆んど消滅するに至れりと謂ひつべし。彼れ曰はく、神の存在及び其の一なるとは嚴密なる意味に於いて論證すると能はず、果より因を推すの論(是れ尙ほスコートスの以て神の存在を證し得べしと思惟したりし者)を以てするも遂に究極的原因に到達するとを必ずべからず、何となれば因果の連鎖は端なき者にして何處に最初の原因あるかを定むべからずとも考ふるを得べく又假令最後の原因ありとするも其を唯一不二なりとすべき充分の理由なければ也。また



靈魂が非物質のものにして不死なりといふことも道理上充分の證明を爲すべからず。三位一體論、萬物は無より創造せられたりといふ論、神が人間となりて化現したりといふ論の如きは皆に道理を以て證明す可からざるのみならず通常所謂道理に違反する所ありとも云ふことを得べし。此くの如くオッカムに至りては神學は遂に正當なる意味に於いて學問とは謂ふ可からざるもの又宗教上の事は道理を以て證明すべき限りのものに非ざることゝなれり。

〔一一〕 宗教と哲學とが此くの如く全く相分離するに至れると相對してオッカムに於ては教會と國家との關係も全く其の範圍を異にする者となれり。トマスは教會を以て國家の上に位してそを全うする者と爲し、がオッカムは教會を以て唯だ出世間の事吾人の靈魂の事のみを司るものとなして曰く、僧權(sacerdotium)は些も世間を治むる政權に干渉すべきものにあらず、世間を治むる唯一の權は王權(imperium)なり、法王は俗世間に關する一切の政事上の權力を有すべきものに非ず。(此の點に於いてオッカムは時の佛蘭西王等が法王の權力に抵抗せしに左袒せり)。即ち教會と國家とは決して上下の關係を成して一が他を全うする者に非ず、全く

相分離し其の範圍を異にすべきものなり。是れより先きダンテが國家と教會との關係を對等のものとしたりしとに於いて己に兩者の分離の始まりしを看る。オッカムはまた國家の起原を論じて曰はく、國家は個人が相互の利益を圖らんが爲めに結べるものにして、即ち利益上の趣意を以て個人の隨意に團結せるもの以外ならず。此の國家の起原に關するオッカムの思想は後に至り民約説としての種々の形を取りて發達し來たり。

〔一二〕 スコトスが言のついでに宗教家に取りての眞理と哲學者に取りての眞理とは全く殊別のものなりと云へるとはオッカムに至りては明瞭に意識されたる又言表されたる思想となりぬ。以爲へらく哲學者に取りて眞理ならぬとも宗教家に取りて眞理なることを得べく、また宗教家の承認することにして哲學者の承認す可からざると無きに非ず。當時かく二者の範圍を異なりと爲し、より彼れ此れ其の眞理をも異にせりと見るに至り、從ひて「二重の眞理」といふ説の廣く唱道せらるゝに至りぬ。而してかく「二重の眞理」ありて神學上眞なるを哲學上眞なるとは全く相異なれるものなりとせらるゝに至りてはスコラ哲學當初の目的



は已に拋棄せられたりと謂はざる可からず。されど斯くの如くスコラ學者等が道理と信仰との分離を主張するに至れるも決して羅馬教會の宗義に反對せんの旨意に出でしにはあらず、却つて其の宗義を更に堅固なる基礎に置かんとを目的としたりしなり。蓋し彼等は宗教を哲學と調和し哲學上の理論によりて信仰を辨證せんとせば却つて哲學的理論の爲めに累はさるゝとを免れずと見、全く理論に累はされざる境涯に宗教を置かんとし、而して其を以て唯だ天の啓示と教會の所傳及び教權とによりて吾人に授けらるゝものとしたりし也。

「二三」かくの如く道理と信仰との分離し行ける傍に神秘的思想は一の大なる流派を成すことゝなりぬ。オッカムの説けるが如き唯名論(即ち吾人は外物其の物を知ること能はず唯だ吾人の心に喚起されたる標幟をのみ知るといふ論)に立ちて純理哲學を排斥するところが神秘的思想と相結びたるものをピエール・ダイイ(Pierre d'Ailly 一三五〇——一四二五)及びゲルソン(Gerson 一三六三——一四二九)に於いて見るとを得。此等の人々に先だちて現はれ神秘説の最も偉大なる代表者となれるをエックハルトとす(一二五〇乃至一二六〇)に生まれ一三二九以前に死せり。彼

れは所謂獨逸神秘學派の開祖にして神秘説は彼れに於いて初めて明瞭に又大胆に發表せられたり。謂はゆる獨逸神秘學派は其の由來に於いて教會の宗義に對しては頗る獨立の態度を保てるものなれば嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學と區別するを要す。此の派の目的とせし所は教會の定めたる宗義の合理的なることを辨明せんとするよりも寧ろ各個人の直接に意識する深遠なる宗教的經驗を了解しそを言ひ表はさんとするに在りき。其の説の表白の仕方より見るも他のスコラ學説とは大に其の趣を異にせり。そは其の教説は一般人民の使用する言語を以て直接に一般の聽衆に訴ふる説教壇上より吐露せられたる者にして所謂スコラ學者が當時の教會の用語たると共に學者の用語たりし拉何語を以て書籍にものせるとは同一ならず。又狭き意味に謂ふスコラ哲學と異なりて、淵源の如何を問はず各自の宗教的經驗を了解するに適せりと思はるゝものは廣く之を攝入し殊に新プラトーン學派風の思想を吸收せる所甚だ多しとす。此の獨逸神秘學派は後には流れてペール(地名)の神の友と呼ばれたる輩の(異端視せられ)説となり、又タウンル(Tauler 一三〇〇——一三六一)及びスーソー(Suso 一三〇〇——一三六五)



の如き人々によりて繼續せられては通俗的説教を主とするものとなりぬ。

〔一四〕こゝには神秘學説として最も注意すべき

エックハルト (Eckhart)

の説を述べん。彼れ以爲へらく萬物の太原は想と物とを超越したる能く名狀す可からざるもの、即ち無と名つくるの外なきものなり。是れ即ち神性なり。而して件の名狀す可からず退定す可からざる神性が實際に活動する神となるは自らを知るの知識による即ち萬物の太原たる神性に自らを知らんとする働き起こりこゝに眞實の存在てふものは創まれり。自らを知らんとする活動を起こさるる状態に於いての神性は無といふより外に名つくべき語なし。造化作用は畢竟神性の自識作用に外ならず、實在は其の根底に於いては自識作用なり。(即ちエックハルトの取る所は主知論なり)。神が自らを知らんには先づ自らを言ひ出ださる可からず、之れを譬ふれば恰も吾人が我が影を鏡面に投して始めて我れを見得るが如し件の自識作用によりて始めて能言なる即ち主観と所言なる客観とが相分かる前者は父なる神にして後者は子なる神なり、而して父の言としていひ出ださ

れたる子が復父に歸る所、換言すれば兩者の相離れざる所(即ち其の相互の愛)を聖靈と名づく。故に父なる神と子なる神とは別かれながら猶ほ一にして、神は聖靈に於いて自らを愛する者なり。されど此くの如く神の自らを發現する働は時間  
に於いて始終を有するものに非ず無時なる永劫のものなり。

〔一五〕子即ち神の自らを發言したる者に於いて造化の模範は具ばる、語を換ふれば子は萬物を造化する者なり。されど其の造化作用は畢竟するに神が自らを知り自らを言ひ表はす作用に外ならざれば神以外に萬物に於ける實在なく、神を取り去らば一として獨立自存する物ある可からず。獨立自存する物としては萬物は非實在なり。萬物は唯其れが神なることに於いてのみ實在を有す。之れを神と區別するものは唯其の個性なり。即ち神と萬物とを區別する所以のものは自他彼我の別をなし此處彼處の別をなし時に於ける前後の別をなし數に於ける一多の別をなすもの、約言すれば其の差別相の外にあらず。差別相を取り去らば萬有は一なり、差別相に於いて観るがゆゑに個々相異なりたる萬物として見ゆるなり。



〔二六〕神を外にして實在するものなし、故に實在するものはまた凡べて善なるものなり。不善なるもの、不完全なるものは積極的に實在を有するものに非ず、寧ろ非有なり。炭火の我が手を焼くは唯だ手に熱を欠けるが故なり、不善は欠乏に外ならず。地獄に墮落して苦しむものは非有なり、欠乏なり。造化されたる者が自らを自存獨立のものとして我執を起す是れ一切の迷妄の淵源、一切の罪惡の本源なり。(如何にエックハルトの神秘説に於いてスコラ哲學の濫觴なる而して新プラトーン學派風の趣を帯びたる彼のエリゲーナの説に類似する點あるかを看よ。)

眞理の本體を知らんと欲せば萬物の差別相より眼を轉じて神に歸入せざるべからず。人間は自ら意識して神に歸入するを得。而して人間の心に萬物は其の理に於いて (ideally) 包含せられ居れば吾人の心が神に歸入することに於いて萬物は神に歸入することを得るなり。神と萬物とは互に離るへからざる關係を有す、吾人が神を見ると吾人が神に觀らるゝとは同一不二なり。吾人が神を知ることとに於いて神は自らを知るなり、此の際能知の主觀と所知の客觀とは同一なり。

神は自らを愛するの愛を以て我等を愛す、そは吾人に於いて神に愛せらるゝ者は神自らなれば也。かくの如く神と我が心が合一する所(即ち神を知る)の知識は是れ神より來たりて吾人の心を照らす光即ち其の恩恵なり。朽ち果つべき物に絆され之れを追ひ求め我意を執するの心を離れて只神をのみ知り神をのみ愛するに至りて吾人は初めて究竟の怡安に達するを得べし。こゝに至りては神か吾人の靈魂に於いて生まれたりと謂ふべく、又神が人間となれりとも謂ふべし。斯くなれる人は之れを基督と名づくるも可なり、否神と名づくるも可なり。

〔二七〕上述せる如くスコラ哲學が其の當初の目的を放棄するに至れる傍には神秘家の流れが大に膨脹して教會の宗義に對しては著るく獨立の位地を取り、又教會の常に排斥し來たれる新プラトーン學派風の思想をも調和することゝなれり。而してかゝる神秘的傾向と自然界研究の傾向とを合しまた學術界の新精神の鬱勃たらんとすることを示しながら尙ほ舊時代の世界觀を脱せずして恰も中世紀思想の殿となれる者を

ニコラウス、クザーヌス(一四〇一—一四六四)



とす。彼れの哲學に於いては新時代の將に開けんことを示すに足るもの  
 みれども、その思想は尙ほ教會の宗義に忠實にして其の目的とするところ從來中  
 世紀社會の貴重視したる信仰及び希望を一の哲學的組織に造り成さんとするに  
 あるか故に彼れは尙ほ中世紀時代に屬すべきものなり。而して彼れに於いては  
 上の如くスコラ哲學本來の思想、神秘的流派、及び從來多少存在したりし而も殊に  
 新時代の旗幟と稱すべき自然界研究の傾向の相合せを見るが故に吾人は彼れ  
 を以て一方には中世紀思想界の結末を成せると共に又新時代へ移らんとするの  
 趨勢を示せるものと見るを得べし。

〔一八〕 ニコラウスに従へば吾人の知識に三段あり。最下の段階は感官の知覺  
 にして、唯だ事物のおぼろげなる様を示すもの、即ち未だ知識として明らか成形つ  
 くられざるの材料を與ふるものなり。第二の段階を辨別智(Ratio)となす。是れ思  
 想の矛盾律に従うて事物を辨別するものにして、時間に於いて、空間に於いて及び  
 數量によりて事物を辨別するは其の作用なり。最高の段階は理智(Intellectus)に  
 て即ち反對のもの、中に一致を發見するの作用なり。矛盾律に従うて相反する

ものを相別かつのみならず更に進みて其の中に根本的一致を發見するもの、是れ  
 吾人の知識の最高段階なり。差別相を見る第二段の知識は遂にものづから平等  
 相を見る第三段の知識に移らざるべからず、而して差別を極め行かば其の究極に  
 は遂に平等を發見せざるべからず、之れを譬ふるに猶ほ圓を大にし行かば弓と其  
 の弦とが遂に一致し三角形の一角度を大にし行かば其の角度を成す二邊と他の  
 一邊とが遂に合一するに至るが如し。最高の知識は一切の反對の合一すること  
 を直觀する(Intuitio)に在り。故に若し辨別知を以て事物を差別するを名つけて知  
 識と云はば、理智を以て平等相を發見するをは無識と名つくべし、換言すれば辨別  
 智の掲ぐる一切の差別及び反對を拂ひ去りて初めて理智の見に達し得べし。  
 總べて差別的思想の念ひ浮ぶる所は未だ以て眞の知識となすに足らざるを見る  
 に至りて即ち此等の差別的想念を去り無識無念想の状態に入るに至りて初めて  
 眞知に達したりといふとを得べし。而して是れ即ち有意識の無知(Docetia ignorantia)  
 なり。

〔一九〕 斯く吾人に於ける最高の知識は反對するもの、間に一致を發見するに



在るが其の反對の一致 (coincidentia oppositorum) 是れ即ち神なり。神は有限を合一する無限なり。蓋し有限は差別及び反對を以て成り而して之れを融會合躰せしむる所以これ無限なる神なり。神は有限に反對したるの無限にはあらずして有限に合一したるの無限なり、無限なると共に有限なるものなり、神は萬物を疊めるもの (complicatio)、世界はそを開きたるもの (exhication) なり。故に神に於いては差別と平等とは相離れたる者にあらず、凡てを含める神 (deus implicitus) 是れ即ち差別雜多に開發したるの神 (deus explicitus) なり、即ち神は多を合するの一、有限を統一するの無限にして、彼れは極大なると共に極小なり、是れを譬ふれば猶ほ限りなき圓に於いては其の中心と周圍との一なるが如し。極大と極小とは斯くの如く一なるが故に諸物各々それの様に於いて全界を示せるものと見るを得べし。換言すれば一切が一切の中に在り (Omnia ubique)、そは一切が神の中に在り、而して神が一切の中に在ればなり。

ニコラウス自らは萬有神教を排斥すと云ひながら、彼れの説の實際如何ほど萬有神教的思想を含めるかは甚だ見易かるべく、又此の點に於いて彼れが思想に神秘的傾向の存することは明らかなるべし。但しニコラウス以前に於いても無限てふことを以て神を説く思想はありたれども、無限と有限とを以て神と萬物との關係を解釋する説は彼れに至りて一種別様の趣を呈し來たれり。且つ又彼れが説に云ふ天地の間の物皆各々全世界を縮寫すといふ思想は後にしばしば吾人の遭遇する所のものとなる也。

三〇 吾人はニコラウスに於いて神秘的及び萬有神教的臭味を帯びたる純理哲學的思索に自然界の科學的研究の傾向の結はれたるを看る。彼れが近世學術の一大動力とも謂ふべき數學に重きを置ける、またピタゴラス及びプラトーン等の希臘の先哲を貴べるが如き皆是れ將さに轉變せんとする時代の精神を顯はせるものに非ざるはなし。エリゲナーは新プラトーン學派風の臭味を帯びながら嚴密なる意味に謂ふスコラ學と神秘説の要素とを共に其の未だ明らかに開發せられざる状態に於いて包含してスコラ哲學の濫觴となり、ニコラウスは變遷せんとする時代の精神に動かされながら尙ほ全く中世紀の世界觀を脱せずして教會と其の宗義とに忠ならんとせるとに於いてスコラ哲學の結末をなせり。



「二二」羅馬教會が其の全盛を極め、スコラ哲學が盛に生長しつゝありしに當たり、恰も中世紀歐洲の社會に變動を來たすべき大原因となりし十字軍は行はれつゝありき(第一十字軍は自一千九十六年至一千九十九年、第八十字軍は一千二百七十年)。十字軍は先きにモハメド教國の推寄せ來たりしに對し其の打ち返へしとして基督教國より推し出だしたるをも見るべき現象にして、其の結果、希臘及びモハメド教國の文化が大に西歐に輸入せらるゝこととなり、而して件の文化の輸入は當時の學問界に於いてはスコラ哲學の全盛を誘起することとなり。然るに其の結果は此に止まらず、一般西歐人民の眼界を廣うし基督教國以外に却つて文化に進歩したる民人あるに思ひ到らしめたり。かくして知識上の開發は遂に羅馬法王制度に不利なるに至りたり。

離散は教會に不利なると等しくスコラ哲學に取りても亦不利なるものなりき。スコラ哲學の隆盛なりしに當たりてや巴里府の大學は歐洲學問界の中心にして其の言ふ所は學界の問題に於ける最高の判決たるが如き勢力を有したりしが、漸次學問の中心は幾多獨逸に、伊太利に又英吉利に興起するとなり、而して其の結

果はスコラ哲學の統一主義に不利ならざるを得ざりき之れと等しく法王制度の上にありても法王が一時南北に分かるゝに至りしとの如きは其の衰弱を促さざるを得ざりき(是れ歴史に所謂法王權の分裂、一千三百七十八年)。外に現はれたる此等の事實は皆中世紀の理想及び其の理想の發現たるスコラ哲學の解體せんとすることを示せるものなり。

「二二」信仰と道理との分離はスコラ哲學當初の目的の達せられざるを表白したるものなれども、件の分離の唱へられたるは前にも已に云へるが如く教會に不利ならんとの旨意に出でたるにはあらで寧ろ却つて教會の爲めに其の信仰を堅固なる基礎に置かんとを以て其の目的としたりしなり。然れども哲學と神學とが一旦相分かれて前者は専ら世間の事、自然界の事を研究するものとせられ、後者は唯出世間の事、超自然界の事を説くものとせられ、而して哲學が宗教の教ふる所とは全く獨立に研究せらるべきものとなりてからは、其の研究の自然に取りて進み行くべき道は之れを豫想するに難からず。哲學にして若し獨立に研究せられれば、縱令教會の宗教に反抗するの旨意を以てせずとも、其の中世紀に説かれた



る所とは大に相異なる新しき形を取り來たらんは自然の結果なるべし。而して哲學に志ある者が何時迄も二重の眞理といふ如き説に満足せんは期望し得べきとにわらず遂に全く舊時の思想を棄却し萬事を新に造り上げんとするに至るの大勢は決して妨止し得べくもわらず。固よりかゝる變遷は一時に急速に成就せるべきものにはわらず。截然中世思想と近世思想とを區劃するの境限は引き難し。新時代の開けて謂はゆる近世哲學の起る迄には過渡の時代稱とすべきものあり。新學問の精神の興起したる所以を解せんには須からく先づ此の過渡時代の現象を観察すべし。過渡時代に於ける學風の既に中世紀のものにあらざるは見まがふべくもわらず、而して此の時代を経て所謂近世哲學組織の興起するに至れりとは云ふものから中世思想の全く廢れて毫末も其の痕跡をとゞめざるにあらざる新時代の思想家は萬事を其の根底より考へ改めんと志しながら尙知らず識らずスコラ哲學者の形つくりたる觀念を繼紹せる所あるは後去つて説くを看て知るべし。

## 近世哲學史

### 第二十八章 過渡時代

〔一〕 夫れ中世紀より近世紀に移るの過渡は歐羅巴の歴史に於ける大變動の時期にして種々なる原因湊合して其の如き變遷を來たしたるなり。一はダンテ、ベトラルカ、ボツカッチ等、等に捫められ一千四百五十三年コンスタンチノールの陥落によりて更に其の動力を増したる古代文藝の復興により一は種々なる發明及び地理上並びに學術上の發見(活版の發明、亞米利加の發見、印度への航路の發見、コペルニクス等の天文上の發見等)によりて時人の眼界の廣まれると、社會の組織に諸種の變動の起これると(即ち封建制度の衰微、市府の興起、國王の權力の増長、國家統一の傾向等)、又此れに伴へる羅馬法王制度の衰微、腐敗、及び宗教上に於いては羅馬教會に對する大打撃即ち宗教改革等、是れ皆中世紀を變じて歐羅巴に於ける新时期を誘致したる原因なり。

當時學問界に於いても舊時代の遺物に満足せずして何等かの新しきものを求め



る精神の鬱勃たりしを見る。而して此の精神が先づ古代文藝の復興に於いて其の満足を求めんとしたりしは自然の事なり。蓋し既に中世紀に於いて端緒を開きたる古代文藝の復興は當時ますます其の潮勢を高め來たり中世思想に厭きて新を求めたる眼は先づ古代希臘の文化を嘆美するに向かひたり。それ希臘思想の特質は自然的にして人間的、世間的なり。其の世間を樂み、吾人の知見を開くに よりて能く自ら幸福なる生を送り得べしといふの信仰に充ちたるは、中世紀の超自然的なる出世間的、宗教的なるとは大に異なれり。斯く其の精神を異にしたる古代の文藝を修むる (Humanities) を以て人をして人らしからしむるに缺くべからざる事となしたる、是れ即ち當時の新學風にして之れを唱導せし人々をヒューマニストと名づく。中世紀に於いて教會の打ち從へたりし世間的思想が彼等ヒューマニストの唱導に於いて復活し來たりたりと謂ふべし。

かくの如く中世紀の思想とは大に其の趣を異にする希臘の文化に引かれて其の思想を復活せしむる外に又多少新しき傾向を取りて進まんとしたる者ありき。されど此等の新思想が組織的のものにあらずして概ね想像に奔るの傾を有せし

は自然の事なりき。

以上は過渡時代に於ける思想界一般の状態にして、之れを約言すれば一は古代殊に専ら希臘の思想に對する嘆美及び其の思想の復興、一は未だ組織を成さざれども種々の方面に大膽に動き出でたる思想を以て其の特徴となし得べし。此の過渡時代に於ける學風を見れば新精神の鬱勃たるの様を窺ふべく、將に來たらんとする何等かの大なる新しきものを探求し豫期せるの様を認め得べし。

(二) 斯く當時の學問界の大變動は先づ古學の復興によりて創められしが、其の復興の最初の又主要の舞臺は伊太利にして、之れに次げるは獨逸なりき。ピタゴラス派の學說、デモクリトス、エピクロス、さては羅馬の折衷的通俗的哲學及び懷疑說等幾多の古代哲學は陸續として時人の注意を惹きて當時に復活し來たれり。

此等復興せる古學の中最も大なる流をなしは自らプラトーン學派とアリストテレス學派となりき。中世紀に發達したるアリストテレス風思想は専らトマスの解釋に據れるものなりしが、當時復興し來たりしは曩にスコラ學者の眼に映じたりしアリストテレスならずしてアリストテレス自家の學說の真相



を捕捉せんとするの研究なりき。然れども此等のアリストテレーヌ學者の中にも差別ありて二大流派を成したり。一はアエロエス派にして専らアエロエスの解釋に従へるもの、其の中心はパドヴァ大學にありき、此の流派の有名なる學者はアキルリニー (Achillini. 一千五百十八年に死す)、ニローフォー (Nifo. 一千三百七十三年生、一千五百四十六年死) 等なり。他はアレクサンドロス派にして有名なる註釋者アプロヂイシアスのアレクサンドロスに従へるもの、此の派の學者中最も有名なりしはポムボナツツ (Pomponozzi. 一千四百六十二年生、一千五百二十四年死) なり。善く當時の美術的精神に投合してアリストテレーヌ學派よりも更に見るべき新結果を來たしたるは寧ろプラトーン學派なりき。プラトーン學派といふも實際は新プラトーン學派風の臭味を帯びたるものにして、フィレンツェのアカデミーを以て其の中心とせり。プレト (Pletho. 一三五五——一四五〇) 其の弟子ヘッサリオン (Bessarion. 一四〇三——一四七二) 及びマンシッポ、マッサーノ (Marsilio Ficino. 一四三三——一四九九) 等此の派の錚々たるものなりき。此等プラトーン派の學者も又アリストテレーヌ派の學者も但しプレトは大に基督教的思想を脱して希

臘思想に染み、ヘッサリオンは教會に對して無頓着なりしが一般には決して公然教會に反抗を試みることなく、此れ等兩派の相争うて他派を攻撃するや其の非基督教の性質を擧げて之れを駁するを常とせり。アリストテレーヌ學派はプラトーン學派の萬有神教的なるを以て非基督教のなりとし、プラトーン學派はアリストテレーヌ學派の自然的傾向を以て非基督教のなりとせり。されど其のスコラ學說に反對せるは二者共に一なりき。

スコラ哲學に對する最も銳利なる攻撃は専ら其の論述の仕方に對して) ヒュマニストの中羅馬の學者の常識を重んじたる折衷的哲學思想に就けりし人々より來たれり。此等のヒュマニストはシセロ等を歎美して其の麗はしき修辭に着眼し之れをスコラ學者の無味乾燥なる論述の仕方に對比して専らアリストテレーヌの論理學即ち中世紀に用ゐられたる形式的論理を嘲りこれを以て眞に吾人の知識を開發するに足るものに非ざりたり。ラウレンツォ、ヴァルサ (Lorenzo Valla. 一四

〇八——一四五七) ヴィエス (Vives. 一四九二——一五四六) ニツォリウス (Nizolius. 一四九八——一五七六) 等此の流に屬せり、就中最も有力なりしはヒエール、ドララマ



↑ (Pierre de la Ramée. 一五一五——一五七二)なり。ラモーは痛くアリストテレスを排撃し自ら所謂「自然的論理學」を唱へ吾人の自然になす思想の運用が言語に現はるゝ所を見て新たに論理の法則を發見するを要すと論じ、論理學に種々の改良を爲さんと企てたり。

〔三〕當時思想上の新しき産物には新プラトーン學派風の彩色を帯びたるもの多かりき。蓋し哲學が神學と手を別かちてよりは其の本領とする所おのづから自然界の研究となり、超自然的を以て哲學の關せざる宗教上の事なりとして之を神學に委ねることとなり、而して件の自然界の研究は多くの學者に於いては新プラトーン學派風の趣味を帯ひたるものとなり、又是れが基督教的思想と相結はりては其の結果神智學風のものとなり來たれり。こゝに神智學といふは神に接し之れを識るの知識を得るとを目的としたるものゝ謂ひにして、之れを唱へたる人々は、自然界の何たるを看破すれば其の根底に於いて神を發見することを得べく、自然界の蘊奥を探ることによりて神の秘密に入るを得べしと思惟せり。かくの如き思想の傾向はヨヴァンニ・ピコー (Giovanni Pico della Mirandola. 一四六三——一

四九四)に於いて之れを認むるを得。ロイヒリン (Reuchlin. 一四五五——一五二二)は此くの如き思想にカッペーラの要素を打ち混したり。更に秘術的傾向を帯びたるものは之れをアグリッパ (Agrippa 一四八一——一五三五)に於いて見るを得。當時此等自然界の探求に熱中せる傾向は以て中世紀思想の轉變したるの一徵證となし得べし。今いふ神智學風の傾向を帯びたる學者は自然を奧妙なるものと思惟し吾人は其の秘密に探り入ることによりて神智を得また妙力を得て遂に秘術的不思議力をも得べしと考へたり。而して此等は吾人若し深く自然を究めて之れを用うるとをせば、吾人は偉大なる事を爲し得べしと考へたる時人の思想を反映したるものに外ならず。

〔四〕上に云へるが如き思想の最も善く發達したるものはバラセルスス (Paracelsus 一四九三——一五四一)に於いて認めらる。彼れの考ふる所によれば哲學は自然界の知識也。世界はそが發生の種子たる一躰の者より生じ出で而して此のもの、是れ即ち神によりて造られたる原物質 (Prima materia)なり。此の原物質の中に萬物は未だ其の形を成さずして含蓄せらる、而して此の含蓄せられたるものゝ



開發成長したる是れ即ち世界なり。世界は三界に別かたる、一は地水火風の原素を以て成れる地界、二は星界、三は神界なり。人間に於いても亦此の三界に應ずる三部分あり、一には地水火風の原素によりて養はるゝ肉體、二には星を司る精靈によりて養はれ想念のはたらきを爲す神精、三には宗教上の信仰(即ち神の恵)によりて養はるゝ心靈是れなり。かくの如く人間と世界とは其の成り立ちに於いて相類似し同一の法則が二者に行はるゝが故に、吾人は世界の成立を知ることによりて人間を知ることを得。世界は活物なり、人間に似て時代を経て成長するものなりと。此くの如く人間と世界とを其の成り立ちに於いて相同じきものと見る即ち大宇宙小宇宙の論は當時種々の形を取りて現はれたり。

斯くの如くパラセルスは自然界に行はるゝ同じ力が人間に行はるとなし、所より自然界の秘密を探り其の知識を醫術に應用せんと試みたり。以爲へらく疾病は生活の氣の妨げらるゝことによりて起こると。此の生活の氣をアルケウス(Archon)と名づく、而してアルケウスは自然界全體を保つ所の自然力(之れをヴルカーヌス[Vulcanus]と名づく)の一特殊のはたらきに外ならず。生活の氣を妨

ぐるものは其の氣に反する地上及び星界の力なるを以て吾人は其等を探知することによりて之れを防ぐを得べく、因りて以て吾人の疾病を療醫するを得べしとかく考へてパラセルスは自然界を知ることによりて得る醫療の秘術を尊崇したり。

〔五〕パラセルスに於いて他の思想と相混じて見るを得べき秘術的思想は外界として横はる自然界の秘密に探り入らんと力めたるものなるが今外界の代りに吾人の内界即ち人性の根底を看破して直接に神に接せんとしたるもの、是れを神秘學説となす。前者は大宇宙の方面より全體の秘密を探らんとせるもの、後者は小宇宙の方面より同一の秘密を探らんとしたるものなり。小宇宙は大宇宙の粹を集めたるものとせらる。神秘説は一面に謂へる神智學風の流れに屬するものと見らるれど、其の外にまた他の淵源を有せり、即ち中世紀の末つ方に發達したる實行的神秘説是れなり。羅馬教會の儀式的なるに反抗したるプロテスタント教は元來宗教の生命を以て外形の行爲にあらず各自の内心の實證にありとしたりものにして其の起原に於いて明かに件の實行的神秘説に聯絡したるものな



り。ルター自身も自ら神秘家の趣を帯びたりしが、渠は後に至りては聖書の文句を以て信仰の標準と見做し宗義を形づくるとに傾きたり。「ルター派のプロテスタント教的神學を形づくることに於いて最も力ありしはメラニヒトン (Melancthon) にして彼れはプロテスタント教義を組織するにアリストテレースの哲學を用ゐたり。同じくプロテスタント教の中でもカルヴィン派は専らアウグスティヌスに憑據せり。斯くプロテスタント教徒が宗派を分かちて各宗義を形づくらんとするに反對し、殊にプロテスタント教に用ゐられたるアリストテレース風の思想に反對して其等の宗派に係はらざる基督教的哲學を形つくらんとしたるを以て有名なるはタウレルルス (Taulerius) なり。かくてプロテスタント教徒が宗義を樹て、經典の文字に拘泥するの傾向に反對して吾人各自の心理の宗教的實驗を基礎とする神秘家の流を持續せんとしたる人々の起れるありき。シュエンクフェルト (Schwenckfeld 一四九〇—一五六二) フランク (Frank 一五〇〇—一五四五) 及びバラセルススの影響を受けたるヴァレンティン、ヴァイゲル (Valentin Weigel 一五三三—一五八八) 等其の重なるものなり。ヴァイゲル以爲へらく我れを棄て、神に合一

したるの生命を有する者は宗義上文字上斷定する所の如何に拘らず皆眞に宗教の生命ある者、皆クリスチャンなりと。此等の通俗宗教的神秘家とは少しく其の趣を異にし神秘學者として最も肝要なる位地に立てるは

ヤーコプ・ベーム (Jakob Böhme 一五七五—一六二四)

なり。已に中世紀に於いて現はれたる獨逸神秘學は彼に於いて復活し且つ榮ゆるに至れり。ベームは製靴を業としたりしが一時諸方を遍歴して到る處に醗酵しつつありし種々の思想を吸収したり。其の在所の有司に叱責せられたるにも拘らず又文筆に嫻へる身にあらざりしにも拘らず其の胸中に鬱積せる思想は温良なる彼を驅りて書を著すとを思ひ止まらざらしめき。

〔六〕 通俗を旨としたる神秘家に優りてベームは眼を自然界に注ぎたり。獨逸神秘派の流れに於いて酌むことを得る一種の宗教的哲學に加ふるに自然界の秘密を探求する傾向を以てしたるはベームが神秘説の特色なり。彼れはなべての神秘家の如く自己の宗教的實驗を以て出立したり。彼れは己れの宗教的實驗の上より考察して自然の性と、生まれ更はりたる性との相對することを發見せり。



即ち彼れは其の宗教的實驗に於いて、吾人が自然の状態より出立し而して其の中より更に生まれかはりて新しき性を現はすことに進むを見、此の自然の様とそが更に生まれかはり行く状態との對峙を以て人性の根底を示すものなりと見たり而してペーメはかく吾人の心底に於いて發見したるものを以て世界の起これる所以をも考へんとせり。彼れは萬物の暗黒なる大原を名つけて神に於ける自然の性即ち未だ生まれ出でざる神といへり。此の暗黒なる大原が其の自らを現はし自らを知らんとする衝動 (Drang) によりて始めて活動する神となる。而してそが自らを知らんとするは是れ即ち其れが知るものと知らるゝものとに分裂するなり。かく神の自ら分裂することなくんば凡べての活動のあらんよし莫し。かくては唯存在の暗黒なる大原あるのみにして未だ眞に存在物ありとはいふべからず。かくの如く凡べての活動、凡べての存在は自らが相對峙するものに分かるゝことによりて起る。相對峙するもの無くば凡ては唯單一なる無なり。ペーメは曾て日光が棚上の錫の器に映じて光り耀けるを見豁然として此の理を悟りぬと言ひ傳ふ。錫に當たること無くは光は光として耀かず錫も亦耀くこと

なし。神が相對するものに相分かるゝことによりて光を放つも亦かくの如し神の智慧がこゝに輝き初むる也是に至りて眞に活動する神が生まれ出でたるなり。斯く神が自らを觀ることに於いて父と子とに別かれ而して父の子を觀るはたらしきの出づる是れ聖靈也。是に於いて三一神が神の原性より生まれ出でたる也。』ペーメは詳しく神の自らを世界に現はすはたらきを説かんと試みたり。彼れは世界の創造を七段階に分ち委細に酸の收縮及び甘の伸張作用により萬象の生ずる最初の段階より漸次に進みて感覺及び知識作用の生出するに至るまでを説けり。彼れは更に地上の歴史を叙して人間の靈の墮落することより其が再び神に還り彼れに和合するに至る次第を詳説せり。此等はペーメが其の神秘說に雜ふるに自然界の神智學の見解を以てせしものなり。彼れは凡べて豫言者風の語氣を以て其の思想を述べ、其の説く所の言辭は頗る晦澁なれども神秘說に特有なる一種幽玄の趣を帯ぶる所なり。

〔七〕 上に述べたるが如く新プラトーン學派の影響を受けたる自然界を神智學的に觀るの傾向が一は秘術風の思想に至り又一はペーメの神秘說に至りし傍に、



又伊太利の自然哲學と名つくるものに於いて更に優りたる意味にて自然界に關する哲學思想の發達せるを見るを得。蓋し哲學が神學と分離して専ら自然界を考ふるものとなりしに因り、又新プラトーン學說の影響を受けしとに因りて茲に一元的なる、萬有神教的なる而して頗る想像的なる一種の自然哲學の成り出でたるは解し難きとにあらざ、且つ自然界を活動する神と同一體なりと見て宇宙の美をたゞへたるは又大に古代文藝復興時代の美術的精神に適合せる者なりき。而して此くの如き思想はパトリツヰ(Patrizzi) 一五二九—一五九七に於いて殆ど全く新プラトーン學派風の形に言ひ表はされたり。彼れよりも獨立なる思想を保持して所謂伊太利の自然哲學を開發したる者はカルダーノ(Cardano 一五〇一—一五七六)、テレシオ(Telasio 一五〇八—一五八八)、ジョルダノ、ブルノ(Giordano Bruno、一五四八—一六〇〇)、カムパネラ(Campanella 一五六八—一六三九)等なり。

#### 〔八〕 ジョルダノ、ブルノ

とす。彼れは當代の最も光彩あり最も大膽なる思想家なり、己れ羅馬教會の僧侶

なりしにも拘はらず其の懷抱せる説を吐露して毫も憚らざりき。彼れに親善なるもの之れを諫めて其の直言を慎まんことを勧めたれども、彼れ聊かも枉ぐること莫かりしを以て七年間獄舎に繋がれし後遂に火刑に處せられたり。ブルノは宇宙を觀て活動するもの又無際限なるものとしたり。彼れは當時已に世に傳へられたるコペルニクスの天文上の新説を探り更に之れを推し擴めて宇宙全體を蔽ふものとなしたり。コペルニクスの説ける所は地球及び其の他の遊星が太陽を中心として回轉すといふに在りて、羅馬教會が其の宗教上の信仰に結び附けて信じたる如くに大地は宇宙の中心には非ず一の遊星に外ならずとせり。ブルノは更に其の説を擴張して曰はく、幾多の星體一太陽を中心とし其の周圍を回轉して一圓體を形づくり而して斯かる圓體無數に存在し、宇宙には無數の世界ありと。此の際限なき宇宙をしかあらしむるもの即ち萬有を能造化の方面より觀たるもの(Natur naturans) 是れ即ち神にして世界はしかあらしめらるゝもの即ち萬有を所造化の方面より觀たるもの(Natura naturata) なりとせり神は宇宙の全體を貫きて之れを活動せしむる所以の生命也。萬有は活物たる一體を成



すもの之れを譬ふれば根より梢に至るまで生氣全樹に通ひて葉を出だし花を咲かすが如く宇宙には同じき神の生命の通ひ居るなり。

斯く神によりて活き之れによりて形を成せる萬物を分割すれば遂に割かつべからざる極微のものとなる。此の極微なるものは物體なると共に精神なり、是れ即ち心物の兩面を具ふる原子(アトモ)モクリトスの所謂アムトとは異なり)にして之れをモナドと名づく。此のモナドは宇宙を活動せしむる勢力の個々に分かれて發現したるもの換言せば各モナドはそれ々の様に於いて神を現はすものなり。故に一切の物皆それ々に全宇宙の本體を寫す鏡と見るを得べし。

萬物各々全宇宙の一部として他と相聯結して一大調和を現す。調和は萬有の真相なり。萬有は神の生命の現はれたるものなるが故に完全なり、善美を盡くせるものなり。此のブルノーの説に於いて當時の文藝復興時代の美術的精神は最も偉大なる哲學的發表を得たりと謂ふべし。

〔一〇〕 カムパチルラはブルノーとは異なりて教會に従順ならんと力めたりしが政治上の理由によりて二十七年間幽囚の身となり、後に救はれて佛蘭西に行

き、既に彼處に起これりしデカルト派の學者等と霎時相交際したり。彼れは中世紀末葉の思想を受けて神學と哲學とを分かち神學は信仰に根據するもの、哲學は吾人の經驗に基づき而して數理及び理論に従ひて研究を進め行くものなりとせり。彼れは又吾人が一切の知識の起點は自己を知るに在りとなし、以爲へらく、吾人が自ら經驗する所を顧みれば、我れは作爲し、知識し、又意志するものなることを知る、即ち我が經驗に於いて我れの性が力と知と愛とを以て成れることを知り、また同様の性を具へたる者と交渉することを知る。諸物の性は吾人自らの性を知ることによりて推知するの外なし。吾人の知識の中に就き第一に確實なるは我れの存在と我れの性を知ることとなり、而して之れを基として神の存在を推知し得べし、そは我れの有する神てふ觀念は我れの如き有限者の造り得る所に非ず無限なる完全なる者によりて始めて與へらるゝを得ればなり(後去つてアカルド)。而して其の神の性質も要するに力と知と愛とに外ならずと知る、唯だ其の凡べてが無限なるのみ。

萬物は悉皆活けるものなり。生命なき者より生命ある者の出づべくもあらず。



物々皆或は愛欲し或は嫌惡す物質の運動も自らを保存する衝動によりて起こり、遊星の太陽を回るも其の中心に引かるゝの情あればなり。虚空は充たされんとを欲求す。カムパテルラは万物が神によりて生ぜらるゝ次第を新プラトニ學派風に云ひ做したり。神より生し出でたる万物は皆其の本源なる神に和合せんとするの性を有す、是れ即ち宗教の基く所にして、物々皆宗教心を有すといふことを得べし。

〔一一〕 謂はゆる伊太利の自然哲學が一方に於いて開發せられつゝありし時に已に精確なる科學的研究の他方に起こりて時人が自然界を見るの眼を新にせんとせるあり。是れ即ち近世の自然科學の發端なり。プルーノ、カムパテルラ等に先だちコペルニクス(Kopernikus. 一四七三——一五四三)出で、地動説を唱へたり。彼れの初め其の説を唱へしや表面上は唯た之れを一種の臆説として提出したりしが、其の説おひくゝ當時の進歩したる思想家間に廣まりプルーノに於いては廣大なる哲學的世界觀に編み込まれたり。

其の後ケプレル(Kepler. 一五七一——一六三〇)出で、更に天文に關する研究を進

めたり。彼れの學術的思索は宇宙の調和といふ觀念を根據とせり、此の點に於いて彼れは文藝復興時代の一般の思想に據れるが如くなれども其の研究せる所はピタゴラス學派風の數理に關する想像説にはあらず又所謂伊太利の自然哲學の類ひにもあらず、精確なる計算を基とせるものなりき。即ち自然界の研究は彼れに於いては神秘的ならず神智的ならずして數學を應用したる科學的のものとなり。彼れ以爲へらく真正の知識は精確に計量を爲し得る所に在り。而して此の計量的觀察是れ即ち近世科學の一大特色なり。此の科學的研究法の後にガリレオによりて更に開發されたることは後章に敘述すべし。

〔一二〕 當時如何に學問界の眼の自然界に注がれたるかは上來述べたる所の如くなるが自然界が斯くも歎美され貴重せられたると共に當時の一特徴といふべきは國家の重大視せらるゝに至りたることなり。古代希臘に於いては宗教は國家の附屬物に外ならざりしが、中世紀に在りては二者の關係全く之れに反して國家が宗教に附屬するの有様となれりしは嚮きに陳述せるが如し。而して近世に入るに當たりては恰も神學と哲學と、超自然界と自然界との相分離せるが如く、



出世間の事に關する教會と世間を治むる國家とがまた相分かれて國家は全く殊別獨立のものとなりたり。而して國家の獨立及び尊嚴を説くに畢生の方を費したる者は、之れを先づマッキヤエルリ (Machiavelli) 一四六九——一五二七に於いて見るを得。彼れ曾て其の友に贈れる書中に曰へらく「運命我れをして絹絲を語り毛を織ることを語り損益を語り得ざらしむ、我は國家に就きて語らざるを得ず、然らざれば全く黙せんのみ」と。彼れは國家盛衰の原因を歴史上に求めて以爲へらく、國家の盛衰するや其の由りて盛衰する歴史上の法則あり。國家の成り立ちや、其が救濟維持の策や、皆歴史を講じて後初めて知るを得べしと。而して彼れが實際の人類の歴史に就きて見たる所に從へば、人間の飽くことなき慾望を以て動くものにして常に惡事に傾き善事を爲すは唯其の止むを得ざる時に於いてするのみ。政治上の問題は道德上の論辯を以て解釋せらるべきものに非ず、須からく力によるべし、腐敗したる國家に在りては特に然りとす。元來國家は唯人間の利益及び必要に生むるものなるを以て、國家に關することは凡べて利益の争てふ立脚地より觀ざるべからず。國家を統治する者は宜しく擅制の權を以て其が國家の

隆盛を計るべし、苟くも此の目的にだに益するあらば如何なる手段を用うるも可なり。目的は手段を正しくす。是れをマッキヤエルリが有名なる政治論とす。當時彼れが伊太利に在りて唯一の目的となせるは其が生國の獨立と繁榮となりき、面して羅馬法王の權力は以太利の國家的獨立と相合はざるものなりと見て痛く之れを攻撃せり。

マッキヤエルリは非教會主義を執りしが當時羅馬教會の方に於いても (イエズイト徒中に) 國家の論を爲したる學者あり。中に就いて有名なるをベルラルミーノ (Bellarmino. 一五四二——一六二二) マリアーナ (Mariana. 一五三七——一六二四) 等とす。彼等は教會の下に在らざるものとしての國家の起原を考へて曰はく、國家は人各利益を計るの心に由り形つくられたるものにして其の權を神聖にするは獨り教會の能くする所なり。國家の主權は本來人民に在るものなれば教會が君主の權を神聖す可からざるものとせざる限りは人民の意に隨ひて之れを取りかへすことを得べしと。當時羅馬教會の版圖を脱したる國々に於いてイエズイトの徒は斯かる思想に基きて革命的思想を鼓吹せんと試みたり。此の點に於いて



てプロテスタント教徒の國家論は其の趣を異にし國王の權は神の制定に出でたるものにして人民は必ず之れに服従するの義務を負ふものとなしたり。

〔一三〕 教會の宗義に拘ると無くして全く獨立に國家及び政治を論じたる學者の中に就き最も肝要なる者を掲ぐれば、英吉利人にはトマス・モーア(Thomas More, 一四八〇—一五三五)ありて宗教に對する寛容主義を唱へ、佛蘭西人にはボタン(Bodin, 一五三〇—一五九七)ありて歴史的事實の研究に心を用ひ、伊太利人にはツェンテ、リリス(Gentilis, 一五五一—一六一一)ありて私權の原理を物理の法則上より論ぜんと試み、獨逸人にはアルトス(Altus, 一五五七—一六三八)ありて民主權を唱へ社會は人民の相約して成せるものにして何人も人民の權を取り去ること能はず、また之れを分割すること能はず、國王は唯だ國家の最高の役人たるに過ぎずと論ぜり。

國法の論を爲したる學者の中最も有名なるを和蘭人フーゴー、グロウシウス(Hugo Grotius, 一五八三—一六四五)とす。彼れは天啓によりて定まれる神定法と人間の定める人定法との區別を爲し、又アリストテレスの説を取りて人間は本來

社會的の者なりとし、而して又た此の人間の社會的性質を根據として凡べての權理上の論を演繹せんと試みたり。彼れは自然法と制定法とを分かちて曰はく、自然法は凡べての人間即ち理性を有する者に遍通なるもの、制定法は歴史及び國土の差別によりて相異なりと。彼れは尙ほ自然法及び制定法の各、を分かちて人と人との間に律するもの(Jus Personale)と國と國との間に律するもの(Jus Gentium)との二つとなせり。後者は即ち萬國公法にして其の論彼れが名聲を後世に遺したるものなり。

〔一四〕 上に述べたるが如く當時は様々の説出で、様々の傾向を示したりしが、尙整然たる組織を成せる者どては無く、頗る大膽なる所ありしと共に又多く想像に失したり。かくの如く一方には種々なる思想の沸騰しながら未だ能く其の形を成さざるに他方には昔時人心を支配したる思想の已に勢力を失へる時代に屢々出で來るは懷疑的傾向也。而して此の懷疑的傾向の實に當時に現れたるを看る又其の傾向は古代の懷疑説の復興によりて強められたる所あり。古代の懷疑論者の既に説ける所なる五官の知覺の誤りあると及び人々の所信の相異なると



等を根據として懐疑的思想を吐露したるはモンテーヌ(Montaigne. 1513——1592)なり。彼れもへらく吾人は眞理の何なるかを確實に知覺し能はざれども何を爲すべきかを定むることは能はざるに非ず、吾人が行爲の規範として依るべきは一は自然の性に從へるの生活、一は天啓の教示、是れなりと。蓋し後者は即ち宗教の信仰にして前者は世人が常識を以て善しとするを指せるに外ならず。モンテーヌと同じく佛蘭西人なるシャロン(Charon. 1541——1603)に於いて亦た懐疑的傾向を見る。シャロン説いて曰はく懐疑の目的は一は研究心を盛にする、一は宗教上の信仰を貴くするに在り。吾人は究理心を以て遂に確實なる眞理を發見すること能はざるを知らば、あつから宗教上の信仰を尊ぶに至るべしと。是れシャロンが懐疑説を用ゐて宗教の實行に利せんとせるなり。されど彼れはまた以爲へらく、吾人は全く眞理を所持すること能はざるも、其を求むることを得。吾人は眞理を求むるが爲めに生まれたるものにして、眞理の探求是れ即ち吾人の生活を價值あらしむる所以のものなりと。

葡萄牙人サンシネス(Sanchez. 1603)に於いて吾人は中世紀哲學

の終りに出でたる唯名論風の立場よりするの懐疑説を見る。彼れ以爲へらく微小なる人間如何にして限りなく大なる宇宙を知り究むるを得んや。吾人の經驗は唯だ事物の外面に觸るゝのみにして到底其の内部の本性を知ること能はず。吾人の眞に知り得べきは吾人自らの爲し得ることのみ、唯だ實行してまかゝることによりかくの事を爲し得と知るのみ。

かくの如く懐疑説は究理的考察の眞理に到達し得るを疑ひたる所より多く隱家を實務上の事に求めたり。即ち或は通俗に謂ふ世間の道徳を以て吾人の則るべき唯一の標準となし或は宗教上の信仰を以て吾人人間の依憑すべき基礎となして只管實際を重んずるの傾向に出でたりしが、又しかすると共に空論を排斥し事實を貴びしとに於いて近世學術の一大潮流なる實驗的研究の進歩に益する所ありき。蓋し近世の新哲學思想は懐疑を以て始まりきと謂ふも可なり。先づ在來の思想を一掃し全く根底より新に確實なる方法に從ひて確實なる知識を形つくらんといふと、是れ近世哲學の冒頭に掲げられたる目的なり。

〔一五〕 近世學術の祖と云はるゝ人々に於いては恰も言ひ合はせたらんが如



くに舊思想を捨て一切の先入を去りて學問界に大革新を來たさんとする大志望の懐かれたりしを見る。而してかくの如き學問上の新組織を成すことに最も必要なるは其を組織せんための新方法なり。此の故に學術の研究法を明かにすることが近世哲學の當初に於ける最も肝要なる問題なりき。本章に叙述したる過渡時代に於いて種々なる新思想の沸騰したるを見れども、未だ大なる組織の成れるものあらず、唯だ心あてに一大新組織を成すべきの根底を探りつゝありしもの如し。而して未だ其の如き組織に達し得ざりしは主として確實なる又有力なる新方法を明かにせざりしに由る、其の如き研究法を明かに意識することなくして多くは唯大膽に想像に走りしに由る。近世の新哲學は實に其の如き新研究法の明瞭なる意識に始まれり。新研究法と新學問の理想とを明かにすることによりて哲學の一大新时期を開くに至れるは恰も希臘哲學に於いてソークラテースによりて新时期の開かれたりしに比すべし。而して其の如き研究法は要するに確實なる出立點に起こりて確實なる知識を造るとに存すれども謂ふところ確實なる方法に二途を分かつを得べし。即ち一は確實なる根據に立脚すといふこと

をば吾人が實驗する數多の外界の事實を蒐集し觀察するにありとするもの、一は謂ふところ確實なる根據を吾人が意識の確實なる證明に求め意識に於いて直接に確實とせらるゝ所を根據とし之れよりして理を究め歩を追うて進みゆくを要すとするもの、是れなり。後者即ち意識の直接の證明に根據するとは已にアウグスティヌスが所説の一方面に於て其の端緒を見たるものにして是れ近世哲學に於ける大潮流たる究理學派を成したるもの也。前者即ち外界の個々なる事實を多く觀察して漸次に確實なる知識を組織せむとするものは是れ即ち近世哲學の他の大潮流なる經驗學派なり。



## 第二十九章 近世學術の濫觴

〔一〕 前章に述べたる過渡時代、他語にていへば文藝復興時代(即ちヒューマニスト時代)に於ける思想の舞臺は専ら伊太利、次いで獨逸なりき。然るに其の後羅馬教會がプロテスタント教の勃興に對し自衛策を講じて益、其の主張を固くしたると共に内部の改良を行ひて其の勢力を強めたる結果として新學術思想勃興の氣運は伊太利に於いてはあつたから抑壓せらるゝこととなり、獨逸に於いては宗教改革に次いで起りたる戦争によりて一時學問の衰頹を來たしたるが爲め、近世哲學當初の舞臺は英吉利、佛蘭西及び自由制度を布きて大に思想信仰の自由を興へんとしたる和蘭なりき。謂はゆる經驗學派を成すに至りし學統の濫觴及び發達は専ら英吉利に於いて見ることを得べく、而して他の大潮流なる究理學派は佛蘭西に起り其の舞臺は延いて和蘭に及べり。

こゝには先づ究理派並びに經驗派の哲學上の組織の成立する以前に於ける近世學術の濫觴、殊に其の研究法上の論を述べべし。是れ即ち近世謂はゆる自然科学の基礎を開けるものなり。

〔二〕 已にテレンシオ、カムパテルラ及び懷疑學者等經驗主義を主張して吾人の知識は經驗を基礎とすべき者なりと説けり。されどテレンシオ等は斯くの如く説きながら其の實際に爲せる所を見るに想像に走り一躍して純理哲學論に飛び上ることに躊躇せざりき。畢竟彼等は未だ經驗的研究の何たるを明瞭に自識せる者にあらず。此の經驗的研究法を先づ最も明かなる自識もて説き出だせるは

フランシス・ベーコン (Francis Bacon 一五六二—一六二六)

なり。是れ即ち彼れが近世學術の歴史に重要な位置を占むる所以なりとす。ベーコンの著書中最も肝要なるを“Essays”『論文集』“Advancement of Learning”『學問の進歩』彼れ後に之れを拉丁語に移し且敷衍して“Degnitate et Augmentis Scientiarum”を題しき及び“Novum Organum”とす。

〔三〕 ベーコンは明かに在來の舊學問の信憑するに足らざること、其を全く根底より革むるの必要とを認めたり。是れを以て彼れは切りにスコラの學風を彈訶し中世紀に行はれたりしアリストテレイス風の論理即ち三段論法を以てする演繹法をば吾人が知識の擴張に於いて價值なきものと見、アリストテレイスが



學術の舊機關「オルガノン」に對して新機關を説きたり、是れ即ち其の「ノーム、オルガナム」なり。彼れに於いて新學問の精神は伊太利の自然哲學者等に於けるよりは更に明瞭に更に組織的のものとなれり。其の功績は新學問の組織を建てたるに在るよりも寧ろ自然科學の新理想と新研究法とを掲げたるに在り。彼れが自然界に關する實際の研究としては殆ど一も見ざるべき者なく、其の蒐集したる事實上の知識は概ね從來存在せる書籍等に據れり、また其の實際用ゐたりし思想にも中世紀より傳來せる者少なからず。斯くの如くペーコンは實際學術の研究によりて新しき天然の法則を發見せしにもあられぬば、また新經驗的哲學の組織を成せるにもあらず、其の功績は専ら自然科學の歸納的研究法を明かにせんと力めたるに在り。此の意味に於いて彼れを近世學術の祖なりといふ、固より不可なし。

〔四〕 ペーコン以爲へらく確實なる知識に達せんには吾人は先づ古き先入を去らざるべからず。固よりペーコンを懷疑論者といふこと能はざれども、一切の先入を去りて全く新しく確實に考へ直さざるべからずと論ぜざる點に於いて彼れは舊思想に對して懷疑的の心構こんがまをなせりといふは不可なかるべし。彼れは吾人

が學術研究の途に上るに當たり須らく去るべき先入として四つの事柄を擧げ之れをイドローラ (Idola) 即ち偶像と名づけたり。以爲へらく此等は吾人が自ら造り設けて尊敬を與ふるものなれども畢竟吾人の妄想に外ならずと。彼れが掲げたる四個のイドローラの第一は、其の劇傷の偶像 (idola theatri) と名づけたるものにして古來言ひ傳へ語り次ぎて世間一般に信せられたる傳説等指せり。以爲へらく、總じて昔より言ひ傳へたる古人の教説等は一種の權威を有するものとせられ吾人は之れを考査せずして受け容るゝ傾向を有す。是れ學者の第一に去るべきイドローラなり。吾人は此等の傳説典故に依傍するに代へて各々自ら我が知見によりて事理を精察考究せざるべからずと。第二に去るべきは人々の交際に起るものにして之れを市場の偶像 (idola fori) と名づけたり。其の中最も大なるものを言語とす。吾人は言語を以て實物となすの傾向を有し言語を知れば已に眞實の知識を得たるが如く思ひ、言語の存するあれば其が表はす實物も亦眞に存在するかの如く思ふを常とす。されど此の如き書籍的知識は眞實の知識にあらず。眞知識を得眞學問を爲さんには先づ實物を觀察し自然界を研究せざるべからず。



第三に去るべきは個人各自の性癖なり。吾人は各自の性癖に循ひて狹隘偏癖なる獨斷の見を執し易し、是れ恰も己が棲む穴に閉ぢ籠もりて其の他を顧みざるが如き過なりとてペーコンは之れを洞窟の偶像(idola specus)と名づけたり。各自の性癖の影響する所かくの如き偏見を生じ易きが故に吾人は必ず他人の經驗をも考察して廣く比較的研究を爲さるべからず。第四に去るべきは凡そ人間の性質上なべて有する傾向にしてペーコンは之れを人類の偶像(idola tribus)と名づけたり。其中最も著大なるは吾人が目的を追ひて萬事を行ふより推して自然界の出來事も亦恰も何等かの目的に向つて生起するものなるが如くに觀ることは是なり。然るに此の目的觀は眞に自然界の現象の生起を説明する所以の道にあらざ、自然界の事は畢竟原因結果の機制的關係を以て解釋せざるべからずとせり。かく目的上より自然界の現象を觀ずして全く機制說の上より之れを考ふるは是れ即ち近世自然科学の一大主義にしてアリストテレスの用ゐたる目的觀上の説明とは大に其の趣を異にせり。ペーコンは斯く先づ諸種の先入を去りて虚心平氣にして新なる知識の組織を立てんとを要求せり。

〔五〕 次にペーコンは在來の知識を以て満足せしむること能はざる學問の理想を掲げ其が如何なる部分の又如何なる種類の研究によりて組成せらるべきかを説き、次に其の如き理想に循へる學術の研究法を説けり。ペーコンの所説に於いて特に吾人の注意すべきは此の研究法なり。彼れ先づ説いて曰はく、吾人の依據すべきは經驗なり、凡そ學術の研究は多くの事實を経験するに出立し而して漸次に此等の事實に通ずる法則を發見せまくする歸納法(induction)に依らざるべからずと。是れ彼れがアリストテレス及びスコラ學者等に反對して形式的論理を新知識の開發に無用なるものと視而して之れに對して説きたる謂はゆる學術の「新機關」なり。

歸納的研究を爲さんには先づ事實を蒐集せざるべからず、此等の事實是れ即ち歸納の據るべき事例(instance)なり。事例の蒐集は自然界に出來する事柄を平叙することによりて成すを得べし、而して之れを彙めたるものは是れ *historia naturalis* なり。ペーコンは自ら此等の事例を集めんとしたれども此の點に於いて彼れが蒐集の淵源を爲せるものは多くは書籍なりき。



事例の蒐集に次ぎて吾人の爲すべきは其を解釋すること、(interpretatio)なり。解釋とは一現象をして爾あらしむる所以の者の發見するを云ふ。自然の事物は種々なる性質によりて成る例へば温熱の如きは一種の性質にしてペーコンの所謂チユア(Chyua)なり。試に温熱といふ性質を解釋せんには須からく其をして爾あらしむる所以のものを發見すべし。ペーコンは中世紀哲學より傳來せるアリス・トテレース學派の用語に用ゐて之れをフォーム(form)と名づけたり。フォーム(相)は一性質又は一現象をして爾あらしむる所以のものなるが故に其の性質現象の在る所必ず之れあり、之れある所必ず其の性質現象あり。フォームの多く在る所には其の性質亦必ず多く存し、其の少なく存する所には其の性質亦必ず少なく存す。ペーコンは此のフォームを名つけて法則(legis)とも云へり。斯く様々には言ひ做せれど彼れがフォームをいふや未だ全く中世よりの思想を脱却せざるの跡歴然たり。遮莫夥多の事實を蒐集せるのみにて其の事實が何故に然るかを討究せずば未だ確實なる法則を發見したりと云ふべからざる事は彼れの能く看取せる所なり。然らば斯くの如きフォーム(例へば温熱のフォーム)を發見するの道如何。ペーコン説

いて曰はく、先づ温熱の存在する數多の事物を集め一の表を作り之れを積極品となし次ぎに温熱の存在せざる事物、但し成るべく積極品に似て唯だ温熱なき點に於いてそれと異なるものを集めて第二の表を作り之れを消極品となす。さて又温熱の多少に順ひて種々なる事例を列擧して第三表とすべし。斯くして第一表の積極品中に存在するものより其の第二表に通ずるものを除き去り、又第三表に於いては温熱の多少に比例して多少を爲さざるものを引き去るべし、そは此等は皆温熱のフォームと見るべきものならぬ也。斯くして温熱のフォームならぬものを除却し行かば遂にそれと見ざる可からざるものに到達すべしと。是れをペーコンの説ける歸納的研究法とす。

〔六〕 吾人は斯かる歸納的研究法を以て自然界を探らざるべからず。されど斯くして吾人が自然界を探りて確實なる知識を得んとするもペーコンに従へば其の目的は畢竟實用に在り。知識は即ち力なり。以爲へらく自然を使役せんと欲せば先づ之れに隨順せざるべからず、自家の空想臆測に走らずして自然の法則を知らざるべからず、自然界の法則を知ることによりて能く自然力を使役し利用



するを得べしと。先きに過渡時代の秘術的思想に於いて天然界の秘密に探り入りて之れを用うべしと説けるが如き漠然たる思想に代へて精密なる科學的(歸納的)研究を以て天然の法則を確め之れに従ひて能く天然力を用ひ得べしといふ理想はベーコンの明かに意識せし所なりき。而して是れ當時の思想界の大志望を掲げたるもの也。人間はかくの如き力によりて偉大なる事業を爲すことを得べく、また之れによりて吾人の生活を改良して人生に幸福を來たし得べしといふ新希望新信仰を以て充ち滿ちたる時勢の聲がベーコンによりて發せられたる也。

〔七〕 ベーコンに於いては哲學は即ち自然界の研究なり。されど謂ふところ自然界の研究は唯物界にのみ關するものにあらず。精神作用に係る事相(社會的及び心理的現象)の知識も亦自然科學的歸納法を用ひて初めて確實にせらるべしと云ふことは是れ已に彼れが腦裡に浮かべたる所なり。是れ彼れが眼光の遠きに透徹したる所にして、一言にして云はば物界、社會、人心に關する一切の自然科學的研究の理想は彼れによりて意識されたりと謂ふべし。彼れは中世紀の末に起りたる宗教と學問との分離を傳へて、吾人が自然に具ふる道理心を用ひて得る知

識と天啓によりて得る知識とを全く區別し一は他に係はるものならずとせり。

〔八〕 上述せる如くにベーコンは近世學術の歸納的研究法を説かんとしたりしが其の説き洩らしたる最も大なる一點は數學の必要なりき。彼れは數學を應用して一切の物理的現象を分析し以て其の起これる所以及び法則を定むるの必要に着眼せざりき。此の點に於いて最も善く近世物理研究の着眼點を明かにし得たりしは

ガリレオ、ガリレイ (Galileo Galilei) 一五六四——一六四二

なり。彼れ説いて曰はく吾人の知識作用は先づ觀察即ち經驗を以て始めざるべからず、而も唯個々なる事柄を觀察するのみにて學理的知識の形づくらるべくはならず、須からく其の事柄を迎ふるに法則てふ觀念を以てすべし、觀察したる個々なる事柄は法則に纏むると是れ吾人の知識作用なり。而して物理現象の法則は畢竟するに之れを物體の部分が運動するの關係に求めざる可からず。吾人が物體に就きて感覺する感官上の性質は主觀的のものにして物體そのもの、具する所にあらず、物體其の物に於けるの變動は其を成せる部分が其の場所を移すと云



ふとの外にあらざ。故に物理現象の原因を探るといふは先づ其の現象を物体内分の運動に分拆し而して其の各部分の運動の相集まりて數學上生ずべきの結果と見て其の現象の生起を了解するの謂なりと。ペーコンが歸納法の主眼は現象のフォームを探求するに在りしがガリレオの研究法とする所は數理上定め得る運動の最も單一なるもの換言すれば運動の單元を分拆し出だすことに在り。故にガリレオに於いては物理現象の原因といふ事が新鮮なる且つ明瞭なる意義を有することとなり運動學の原理に従へる近世學術の物理的説明の根本主義は彼れによりて明かに説き出だされたるなり、彼れ以爲へらく數學上明かに定め得る限り吾人の知識は達するを得るものなりと。性質上の區別を分量上の區別に歸せんとする近世學術の傾向はこゝに於いて十分なる意識を以て進み來れり。ガリレオに於いて見るを得る機械的説明を廣く諸種の現象に應用して一の大膽なる哲學上の組織を立てたる者を英吉利人トマス・ホッブスとす。

### 第三十章 トマス・ホッブス (Thomas Hobbes) 及び其の論敵

〔一〕 ガリレオにより物理研究の方法として最も明かにせられたる機械的説明を廣く諸種の現象に應用して一の大膽なる哲學上の組織を立てたる者を英吉利人トマス・ホッブスとす。ホッブスは一千五百八十八年四月五日生まれ、父は一牧師なり。其の生まるゝや恰かも西班牙がかのアルマードを浮かべて將に英國を撃たんとする由聞こえわたり舉國戦々恟々たりし時に際せり。彼れ十五歳にしてオックスフォードに入りスコラ學者の教へ來たりたるアリストテレス風の論理學及び物理學を脩められたれども多く之れに向つて趣味を感じず、然れども此の時に於いて彼れがかの中世紀の末葉に起りたる唯名論に得たる所少なからざりしとは蔽ふべからず。其の後カエンデシ家に師傳たりし故を以つてしばし歐洲大陸に旅行し特に佛蘭西には久しく其の足を駐めて當時知名の學者等と交はり文學及び學術數學又自然科学の研究に其の心を注ぎたり。巴里に在りてはデカルトの親友なるメルセンヌ及びカンセンデ等と相來住し自國に在りてはペーコンと相織り又其の曾て以太利に行きし時には多分ガリレオと相會したりしなら



ん。千六百三十七年英國に歸りて後其の開發し得たる思想を組織し其が學說を傳ふべき著述を成就せしとに着手せり。千六百四十年議會が王權黨を窘迫し初めんとするやホッブス其の危害の己が身にも及ばんとを慮り國內の紛擾を遁れて佛蘭西に行きこゝに靜に其の學を攻ずるの地を求めたり、蓋し彼れ自國に於ける非王權黨が上下の安寧を亂さんとを憂へ既に之れに對する自己の意見を吐露したればなり。然るに其の後彼の國家論を發表したる其の有名なる著述リゾイアサンの故を以て彼は加特力教徒及びエピスコパルかたぎの王權黨に容れられず其れが爲め英國王子(後の英王チャールズ二世)の師傳たるの位地を失ひ、千六百五十二年英國に歸れり。爾後只管其が著作の完成に従事し、又王朝の復興するに逢ひては國王チャールズ二世の厚遇を受け、千六百七十九年九十一歳の高齡を以て歿せり。彼れは終生娶らず。

ホッブスが著書の主要するものを擧ぐれば、千六百四十年 *Elements of law, natural and politic* を作り此の書は公にせざりしに十年の後著者の承諾なくして *Human Nature* 及び *De corpore politico* と題する二書に分かちて出版せらる。千六百四十二年 *De*

*cive* を著す(千六百四十七年増補す)、此の書は *Elements of law* の終りの部を改作して獨立の一書としたるもの、是れ即ちホッブスカ哲學組織の第三部門を成すものなり。千六百五十一年 *Leviathan, or the matter, form and power of a commonwealth* を著す。千六百五十五年 *De corpore* を公にす、是れ彼れが哲學の第一部門を成すものなり。千六百五十八年 *De homine* を公にす、是れ彼れが哲學の第二部門を成すものなり。此の二書と響に著したる *De cive* を以てホッブスの *Elementa philosophiae* となす。

(二) 傳へ云ふホッブス曾て巴里に在り、一日其の地の學者等と會談したりし時、感官の知覺の何たるに關する問題の提出されしに其の坐に之れを解釋し得る者の莫かりしかば、彼れ此の時より切りに此の問題を考索して、竟に若し物體全く靜にして又其を形成する部分聊も移動すると無くは一切の辨別、隨うて一切の知覺作用は起らざるべしと云ふことを思ひ得て、爾後一心不亂只物體の運動にのみ其の思索を注きたりとぞ。而して茲に彼れは其の哲學の根本思想を得たるなり。彼れに従へば凡べて存在するものは物體なり、凡べての出來事は物體の運動に外ならず。謂はゆる心的現象も究竟すれば物體の運動なり。而して物體の運動は機



械的に必然なる因果の關係を以て生起するもの也。哲學は此の物體の運動を論ずるもの、委しく云へば其の運動によりて現象の原因を説明し又其の原因によりて現象の生ずる所以を説明するもの、即ち結果よりして原因を推し原因よりして結果を知るもの也、而して謂ふところ原因結果も共に物體の運動に外ならずと。斯く考へてホッブスは哲學上吾人の考覈し得べき範圍なる一切の現象は皆機械的に説明し得べきものなりとし、一切の問題を物體及び其の運動より演繹的に考索せんとせり。是れ即ちガリレオの物理説を以て演繹的學術の基礎となさんとしたるものなり。彼れ曾て偶然にもエウクレイデースの幾何學を得てこゝに演繹的學術の好模範を發見したりと云ふ。彼れが哲學的思索の専ら演繹的にして數學を重んじたるとは彼をしてペーコンと大に其の趣を異にせしむ。ホッブスの哲學は三部門を以て成る。第一部門は通常謂ふ所の物體を論ずるもの、即ち物理の學なり、第二部門は人間を論ずるもの、第三は人間の相集まりて結成する國家を論ずるもの也。

三三　こゝにはホッブスの物理學を陳ぶるの必要なし、吾人の注意を價ひするは

其の人間及び國家の論なり。人間論の中に就き最も注意すべきは必理の論なり。彼れ以爲へらく、外物が吾人の感官に印象(impression)を與へ、而して件の印象が心臓に傳はりてこゝに知覺を生ず。色聲香味觸等の感覺は分物に具はれるものにあらず、主觀上のものなり、一旦生起したる感覺の尙其の痕跡を止めたる、是れを記憶といふ。記憶の集積したるもの及び之れを基とし類を以て推して將來を豫期するとを相合したるもの、是れ即ち吾人の經驗と名づくるもの也。

吾人の心作用に極めて肝要なる關係を有するは言語の能力なり。言語は吾人の經驗したるもの、中相似たるものを纏めて之れに與へたるもの、符號なり。通性は吾人の作り設けたるもの、即ち言語に外ならず。吾人が通常名づけて高等なる心作用といふは言語を取り扱ふ作用なり。判定とは言語を繋ぎて其の合ふか合はざるかを見るを謂ひ、推論とは判定を連結せしむるを謂ふ。吾人の名づけて理性(reason)といふは作り設けたる這般記號即言語の結合する作用に外ならず。

〔四〕　人間は外物に接して之れを知覺すると共に又快不快の感をも起す。而して此等快苦の感に加へて、それを豫期する念の加はるによりて欲求及び嫌惡の



こゝろを生じ、また愛憎の念を生ず。凡そ吾人の行爲は欲望によりて起こるものなり。若干の欲求相争うて其の中最も強きもの、勝を制したるを意志と名づく。故に意志の判断は自由なるものにあらざ、其の欲求相争ふの機械的作用に因りて決せらるゝは猶ほ物體の現象が機械的必然の作用に従ひて生ずるが如し。

〔五〕 ホッブスの倫理説及び政治論は一種の特色を帯びたるものにして當時の思想界に大なる反抗を喚起したり。彼れは吾人が自然に具ふる欲求を本として道徳を論ぜんとしき。以爲へらく、吾人に取りて善きものは吾人の欲するものに外ならず而して萬人の俾しく有する根本的欲求は自己を保存することにあり。故に自存自衛は吾人に取りて第一に善きものなり。而して人間は自然に其の根本的欲求に従ひて行動して他を顧みざる者なるが故に、其の原始の状態は決してアリストテレース及びクロシウス等の云へるが如く社會的のものに非ずして寧ろ萬人を敵とする (*Bellum omnium contra omnes*) の状態なり。

されど斯く萬人が萬人を敵とする状態に於いては吾人は少しも安寧なる生活を營むこと能はず、かくては却て自己の保存に便利ならざるを悟るに至る。是に於

いてか人類は其の根本性なる利己心によりて遂に安寧の必要なことを發見せり。然るに安寧を保たんには互に自然に有する絶對の自由を制限して他を害せざることを約せざる可からず、而して件の約束を實行して全體の結合を保たんには全體の上に立ち絶對の權力を有して破約者を罰する主權者なかる可からず。是に於いて人類は國家の必要を發見せり。一國家の主權者は全體の上に絶對の權力を有する者にして臣民は皆絶對の服従を義務とせざる可からずと、是れ即ちホッブスが當時政治上の動搖甚しからんとせる、英國の政治界に在りて主張したる專制主義なり。

彼以謂へらく斯く國家の主權者立ち其の制定したる法律ありて、初めて爲さねばならぬ事と爲すべからざる事の區域は生ず。若し法律なくんば善惡の別かゝる所唯各人の欲する所と欲せざる所との別に歸す。蓋し各人の欲する所が其の者に取りて善なるもの、欲せざる所が其の者に取りて惡なるものにして、欲する事も爲すべからず、欲せざる事も爲さざる可からずと謂ふ道徳上の法則或は命令に存在せず。此の如き法則又は命令は法律ありて後に在るものなりと。但しホッ



パスに従ふも法律以外に各人に取りて自然に善なるとと不善なるとの區別全く無きにあらず。例へば暴飲暴食は我が健康を害ひ自衛の道に適はざるものなれば法律の有無に拘らずして不善事なり。唯彼れに従へば社會的關係に於ける正邪善惡の區別は法律の規定によりて初めて成立すと云ふなり。

法律、隨うて道德の淵源が主權者の所定に在るのみならず、彼れまた須からく其が絶對の權力を以て國教を定むべし。國教は畢竟國家の安寧を保持せんが爲めの用具に過ぎず、故に臣民は凡べて國教を奉ずべきもの也。但の道理上宗旨を信ずると否とは別論なり。そは國教として凡べて臣民の守るべき國家保存に必要な形式上の所作の外ならず。故に宗旨は猶丸藥の如し、之れを丸呑みにすべく噛み砕くべからず。別言すれば道理上眞理非眞理を問ふは學問の事にして宗教の事にあらず。斯くホッパスに於いても哲學は吾人が自然に享有せる道理心を以て自然界を研究するに止まるものにして宗教とは全く異なる範圍に屬するものとせられたり。

## 〔七〕

ホッパスの學説は近世哲學史上唯物論の早く最も明瞭に發表されたるも

の彼れが思想を行ふや其の唯物論的論據よりして一筋に其の論理的結論へ向かひ行けり、彼れが學説は首尾よく相貫徹せるものの一なり。又彼れの唱へたる心理説は是れ其の後述綿として續きたる謂はゆる英國心理學研究の端緒を開けるもの又特に其の國家及び道德の論は自然主義の見地と其の結論とを最も明瞭に又大膽に唱道したるものとして多くの反抗を喚び起し爲めに英國に於ける倫理學の研究に大刺激を與へたり其の相繼いで現れたる倫理學説はしばらくはホッパスに對する答辯ならぬは無き有様なりき。

ベーコン及びホッパスに因りて喚起されたる新學術思潮の外に當時英國に在りては他の流派の思想を代表せるものありて此れが當國の其の時及び其の後の精神界に及ぼせる影響は輕小ならざるものありしが而も哲學思想上は主としてプラトーン學(委しくは之れを新プラトーン學派を通して觀たるもの)に依傍したれば其の所説は新見地を開拓するとは與りて多く力あらざりき。斯かる流派の思想を代表したる者の主なるはケンブリッジのプラトーン學者と名づけらるゝ人々なり。



ケンブリッジのプラトーン學者等は一方にはホッブスの自然主義を排斥するに力めたりと共に又ビュリタン宗徒等の非哲學主義に反對して宗教及び神學の事を吾人の理性もて考ふるを至當なるとせり。ベーコン及び殊にホッブスは其の學術上の見地に於いて全くビュリタン宗徒等の神學思想と相容れざりしが宗教と哲學とを全く相分離して後者は専ら自然界の研究を事とするもの、前者は吾人が理性を以てする研究には毫も係かる所なきものとしたり。ケンブリッジのプラトーン學者等は其の何如にも同意せずして哲學と宗教との一致を保たんとせり。彼等は又哲學思想を宗教上に用うるにもスコラ風のアリストテレース哲學に據ることをせず又殊に中世末期の唯名論的學說を排斥して寧ろ新プラントーン學に其の主要なる思想を仰き隨ふて神秘說の傾向を具へたり。ホッブスの唯物論及び自然主義なる道德論に對する攻撃は先づ最も此等のプラトーン學者等より來たれり。

ケンブリッジなるプラトーン學者の録々たる者はラルフ、カッドナルス(Ralph Outwor  
 モーア一六一七——一六八八)及びヘンリー、モアー(Henry More 一六一四——一六

八七)なり。カッドナルス主張すらく眞理は感官以上のものにして是れは神靈に於いて永恆に存するもの、吾人は唯吾が心を開いて之れを受け容るべきものなり。ホッブスが云ふ物界の如きも是れ亦單に感官上のものにあらず物界てふ觀念は既に整然なる數理上の關係をも含蓄するものにしてかの絶えず變易する感覺の能く形つくる所にあらず。道德上の原理も數學上の眞理と共に神の知性に本具せる永恆なるもの神意又は人意の制定によりて始めて成れるものに非ずと。カッドナルスが著書の主なるものはThe true intellectual system of the universe(千六百七十八年出版)及び其死後千七百三十一年に發刊されたる Treatise concerning eternal and immutable moralityなり。

ヘンリー、モアーは一切の存在物を以て廣方を有するものとし只物界と身體とを區別して前者は縦横深の三廣方のみを具へ後者は第四廣方を具ふとせり。此の故に心界は相透徹混入すると爲し得れど不可分なるもの物界は分割し得らるれど相透入し得ざるもの也。斯く考へてモアーはホッブスが吾人は物界以外の實界を考ふる能はずと云へるの論に答へんとせり。彼れ以爲へらく無限なる空間



は神みづから具する性にして、吾人の靈は只限りあるとに於いて神靈と異なるのみ。彼れは斯く廣袤を以て心物共に凡て實躰と云ふべきもの、具ふる所となせるの外また活動てふとを以て一切實躰の性と見做したり。蓋し凡ての實躰は神より出づる靈活の氣を以て充たさるれば也。世界に磅礴たる此の靈氣は無意識にして而も能く神の目的に循ふて動作するもの諸物間の感應及び動物界の本能等皆此れによりて説明し得べしと。斯くモアアが心物を相對せしめて其の異同を論ぜんとしたる、是れ既に當時世に知られたるデカルトが學說の影響を被りたるもの也。哲學上彼れが著書の主なるものは *Enchiridion metaphysicium* 及び *Enchiridion ethicum* なり、著作全集千六百七十九年發刊。

### 第三十一章 デカルト (Rene Descartes)

(一) 先きにカムパテルラの條にも又ホッブスの條にも已に其の名を掲げたるデカルトを以て近世哲學に於ける大組織を立てたる最初の人となす。上來敘述したる新時代の學問界の精神即ち從來の思想に依傍せずして根底より新しく確實に萬事を考へ直さんといふ志望は彼れに於て最も大なる形を取りたり。而して通常彼れを以て近世哲學上の一大潮流なる究理又は主理學派の開祖とするは彼れが新哲學の方針を樹て、吾人の意識の直接に確證する疑ふべからざる所に立脚し之れを根據として次第に究理の歩武を進め以て哲學の大組織を建設せんとしたればなり。

デカルトは一千五百九十六年三月三十一日佛蘭西國トゥレーヌの門閥の家に生まる。生來蒲柳の質、幼少より病がちなりしかど已に夙く其の才能の非凡なるを顯せり。其の問ふ事柄の常に理窟に傾けるを以て彼れが父は彼れを呼んで哲學者と云へりきとぞ。ラ、フレッシなるエスイトの學校に入り十八歳に至るまで當時の學問なるスコラ學の組織に従へる哲學及び物理學等を學習せり。然れども彼れ



は其のこゝにて習得せる所を以ていと不満足に思へり。唯彼れが最も好めるは  
 數學なりしが、此の數學に對しても唯一時は興味を失ふに至りき。これより後彼  
 れは暫く一切學術上の事に疑を挿み巴里府に來たりし後は當時の武士が修めし  
 武藝に専ら心を傾け學問を抛擲したりしが、幾くもなく唯外形的なる生活に厭き  
 て更に沈思冥想の方向に傾き、突然獨り巴里府の靜閑なる處に退き、朋友にも隠れ  
 てありしと二年間なりしが、後にまた廣く世間を知り實の人間を觀察せんと思ひ  
 立ちて自ら兵士となり初め先づ和蘭に行き、後三十年戦争の起こらんとせる時獨  
 逸に於ける兵士の募集に應じ、彼處にてノイブルクの兵營に冬籠りせる時、學術研  
 究の新方針に就きて豁然悟る所ありたり。彼れは此の新發見の日を一千六百十  
 九年十一月十日なりと記せり。件の學問の新方針の彼れが念頭に浮かぶや即時  
 に其が開發に思を凝らし其の湧起し來たる思想の餘りに盛なりしが爲め一時精  
 神の非常に激昂したるの狀態に陥り當夜は奇異なる夢を見翌日は彼れの思想の  
 更に明かになりて真理の光明を得んことを求めて聖母マリアに願を懸けたり。  
 かくて彼れはブラーグの攻落及び匈牙利へを進軍に與かりし後故國佛蘭西に歸

りぬ。彼れが家族は其の妻を迎へて官職に就かんことを欲したりしが、彼れの志  
 望はこゝに在らざりしを以て其の家事を整へ我が所有を賣りて學問の爲めに再  
 ひ漫遊に出で立ちしが其の間彼れが先きに懸けたる願を果たさんが爲めロレット  
 なるマリアの廟に詣で、後に和蘭に居をトして靜かに自家が生涯の大事業と見定  
 めたる學術の研究に取り掛りたり。彼れの和蘭に在るや成るべく其の住所を隠  
 さんか爲めに其の居を移すこと十三たび、また彼れが故國に直接に交通を爲せし  
 は彼れがラ、フレッシよりの親しき學友メルセンヌのみなりき。彼れが斯く和蘭に  
 靜かなる生活を求めたる原因の少くとも一と見るべきは成るべく學術上の意  
 見のために累されざらんとを欲したるにあり。當時學問上の新意見を唱ふるは  
 決して容易の事にあらず、羅馬教會は之に對して嚴しき監督を爲さんとし、ブル  
 ノは己にそれが爲めに焼かれガリレオは表面上其の説を柱げたり。又一千六百  
 十二年巴里府の年少なる學者數人アリストテレースの物理説に反對してアトム  
 論を唱へたることありしや羅馬教會は其の宗義に反對するの故を以て遂に此等  
 の學者を巴里府より放逐したりき。デカルト當時ル、モンド(世界)と題する書の著



作に従事しコペルニクスが地動説を取りて世界の成り立ちを論じ已に完結に近からんとせしが、ガリレオの迫害せられしを聞き之れを秘して世に示さざりき。一千六百三十七年彼れは其の明友の切なる勸告に従ひて初めて『エッセー、フィロソフック』(哲學論集)を發刊せり。此の書は四つの論文より成れるものにして第一はディスクール、ドラ、ソトマ(Discours de la methode. 學術研究法論)是れ彼れが學問上の自叙傳の如きものにして其が哲學の新方針の發見して之れを組織せんとするに至れる順序を述べたるものなり。而して第二及び第三の論文は物理的現象を論じたるもの、第四は彼れが數學上の發見として、數學界にも其の名聲を留めたる解析的幾何學なり。超えて四年『メディタシオーチス、デ、ブリーマ、フィロソフニア』(Meditationes de prima philosophia)を公にせり。是れ彼れが書の最も主なるものにして、其の之れを發刊するに先だちガッセン、ハイホッブス等を初めとし當時の有名なる學者の批評を得て之れを添へまた其の批評に對するデカルト自身の答辯をも附加して之れを出版せり。彼れが學術界に於ける名聲は益々高くなりゆき、而して是れと共に彼れに向へる論難も盛んなりしが、殊に神學者輩は懷疑説及び無神論を唱ふる

者の如く見做して彼れを攻撃せり。其の攻撃はプロテスタント教徒及び羅馬加特力教徒の双方より來たれり。一はその如き煩累を避けんが爲めなりけん、彼れは瑞典の女王クリステ、イーテの招聘に應じて其の官廷に行けり。されど慣れざる宮廷の生活と北地の氣候の彼れに適せざりしとに由り、瑞典に赴ける翌年遂に病を得て歿しぬ。時に一千六百五十年二月十一日なりき。

上に掲げし『Essais philosophiques』及び『Meditationes de prima philosophia』の外、デカルトが著書の主なるものを擧ぐれば、『プリンシピア、フィロソフニア』(Principia philosophiae) 哲學原理 一千六百四十四年刊行、『トレテ、デ、パシオン、ドラ、ム』(Traité des passions de l'âme) 心情論 一千六百四十九年刊行及び彼れの死後に出版せる『メ、ロ、ム』(de l'homme) 人間論等なり

デカルトは其の自ら好める學術の研究に靜に従事し得んがため成るべく表面上當時の教會に反對せず、成るべく嫌疑を受くることを避けんとしたり。此の點に於いて彼れは羅馬教會の宗義にあらはに反對しても尙猛進して退かざりしアル、ノとは大に其の性質を異にせり。彼れは學問上には自信に富み自ら標置する



こと頗る高く凡べて彼れの主唱せる所は自家の新発見によりて得たるものとし、他に學べる所あるとを承認するに吝なりき。

(二) 彼れか一千六百十九年獨逸のノイブルクにての発見と名づくるものは是れ其が畢生の哲學研究の方針を定めたるものなり。其の時彼れ思へらく凡そ多數の人相寄りて成す事には相和せざる節ありて、全く一人が根底より造り上げたるものに比して不完全なる場合多し。吾人は各、生れ出で、以來未だ知慮の發達せざる時より種々なる人に接し種々なる所傳を何心なく受け容るゝ者なれば吾人の知識は其の組織及び根底に於いては極めて不完全なるものと云はざる可からず。故に確實なる知識を得んには一市府の家屋古びて其の用を爲さざるに至れば、全く之れを打毀ちて一の秩然たる計畫に従ひて新たに建設するが如く、吾人は須からく吾が懷抱し來たれる思想を兎に角に一旦毀ち去りて之れを全く其の基礎より建て改むべしと。而して斯くする事の方針として彼れの掲げたる個條の第一は極めて明瞭に且つ判然と吾人の思考したるもの、外は何事をも全く受け容るべからずと云ふこと第二は困難にして解し難き事柄に逢へば其の難解

の點を委細に分析すべしと云ふと、第三は最も簡單に又最も平易なるものより始めて順次に複雑なる事へ進み行くべしと云ふこと、第四は吾人の研究の中に入るべき事柄を漏らす所なく網羅すべしと云ふこと是れなり。デカルトは學術の研究は斯くして進め行かざるべからずと見たり。彼れは決して實驗を輕んじたるにあらず寧ろ研究上吾人の考ふべき事柄は餘さず之れを網羅するの必要を認め而して實驗したる事柄に就き極めて明瞭にして疑ふべからざる點を見定むるを要すと説けるなり。斯く直接に明瞭且つ正確なる立脚地より山立して徐々に其の歩を進め而して一步々々に吾人が所見の確實明瞭なることを吟味し行くべし。約言すれば彼れの研究法の骨子と見るべきものは先づ直覺的に明瞭なる事件を根據とし、而して之れを出立點として進み行く一步々々が亦吾人の思想上直覺的に明瞭ならざる可からずと云ふと是れなり。斯く明瞭なる一根據より究理し行く所より見れば彼れの研究法は演繹的なりと謂ふべし。唯吾人の問ふべきは、上述せる研究法に従ひて彼れは實際吾人の明瞭に承認すべきもの、外何物をも取り入れざりしかまた彼れが究理を進め行ける歷程に過誤なかりしかと云ふと



りとす。

〔三〕 デカルトは上述せる趣意に従ひて先づ疑ひ得る限りを疑へり。以爲へらく知覚は吾人を迷はすことあり故に知覚の示す所をも疑はざる可からず又吾人が理性を以て思考したる事も疑訝を免れず。それは悪魔といふ如きものありて吾人を惑はさんが爲めに吾人に理性を賦與したるかも知る可からざればなりと。斯くデカルトは考へて竟に一切の事を疑へり。されど彼れの疑ひしは畢竟確實なる知識を得んとを目的としたるにて唯漫に疑ふがために疑へるにあらず。故に彼れは疑の中に更に疑ふべからざる根拠を發見せんと力めたり。而して彼れは遂に其の根拠を疑惑そのものゝ疑惑せざるべからざる點に得たり。以爲らく吾人は凡べての事を疑ふを得、されど疑ふ以上は我れの疑ふといふことは疑ふべからず。而して疑ふと謂ふことは吾人が思ふの一種なり、故にかくの如き思ひを我れが思ふと云ふことは如何にしても疑ふべからず。即ち我れが思ふと云ふとは確實なり、我れが思ふと云ふこと確實ならば之れと共に思ふ者即ち我れの存在するとは疑ふべからず、換言すれば思ふと云ふことに即して思ふ者の存在する

ことは吾人の意識の直接に明瞭に證明する所なりと。是れデカルトが建てたる哲學の出立點として有名なる『我れ思ふ故に我れ在り』(cogito ergo sum)と云へる句に主張したる所なり。デカルトの意に従へば我れなる者は思ふといふ働きより離れたる者に非ず、我れの我れたるは唯思ふ者といふとに在り。而して彼れは此の思ふことをするものを稱して心(mens 又は animus)と名づけたり。こゝに彼れが我れ思ふといへるは我れ意識すと云ふ程の廣き意味を以て云へるなり。

〔四〕 我れ思ふ故に我在りと云ふ句に故にてふ語を用ゐたるによりて恰も三段論法やうの推論の如くに見ゆれど、デカルト自らの辨明せる所によりても明かなる如く、こは決して推論に非ずして意識直接なる證明なり。我れ思ふと云ふことに即して思ふ者の存在することの知らるゝなり。即ち思ふと云ふことの在ると共に思ふ者の存在することの直覺せらるゝなれば是れは推論にあらずして寧ろ凡ての推論の原初の根拠となるものなり。

若しデカルトの云ふ如くならば、皆思ふと云ふことのみならず、我れ歩む故に我在りとも云ひ得べきにあらずやと非難に對して彼れ自ら辨明して曰はく、是れ正



當に我が論點を見得たるものにあらず、何となれば歩むといふ如き動作の確實なることは吾人が意識の直接に知り得る所にあらず、此の如きは是れ研究の當初に疑ひたる所のものなり、但し疑ふべからざるは我れの歩むことにあらずして我れ歩むと思ふとなり。歩むといふことは縱令眞實には無しとするも我が歩むと思ふ時のその思ひは疑ふべからず。思はるゝ事柄は誤れりとも思ひ居ることは疑ふべからずと。是れデカルトの自ら説明したる論旨なり。

〔五〕 此くの如く我れ思ふ故に我れ在りといふことに於いて彼れは確實なる知識の第一歩を得たり。彼れは尙ほ此れに就きて考ふらく我れ思ふ故に我れ在りといふことの疑ふべからざるは畢竟それが明瞭にして且つ判然たればなり。吾人の以て眞理となすものは吾人が明瞭に且つ判然と思考したるものに外ならずと。是に於いて彼れは眞理の標準を立て、其の事の判明なることに在りとしぬ。デカルトは此の標準に依り更に推究して我が存在の外に尙ほ同じく眞理の標準に合ふものあるを發見せり。即ち無よりは何物も生ずべからずと云ふとの如きは亦吾人が之れを考ふるによりて明瞭に且つ判然と誌めらるべきものなり。

り。而して此の原理を一特殊の場合に用ゐたるものとして原因は結果よりも少ないき實在を有するものなる可からず換言すれば原因は其の完全なることに於いて結果よりも劣れるものなる可からずと云ふことを承認せざるを得ず何となれば若し結果が原因よりも完全に於て其れよりも多くの實在を有せば其の原因の優れる丈の實在は無より生じたりと見ざる可からざれば也。

結果

〔六〕 進みて此處に至りての後デカルトは一層其の論歩を急にしゆけり。彼れは意識是れ即ち疑ふべからざる者を顧みて其の中に種々なる觀念あるを見たり。其の一は神(即ち無限者)てふ觀念也。今此の觀念の何處より來たれるかを尋究するに我れを以て其の如き觀念の原因となす可からず。原因の結果に對するや或は製作家が其の製作物に對するが如く前者の後者に優れるか或は一物の形がそれを印象せるものに於けるが如く全く相似たるかの關係を有す。而して我れは何れの意味に於いても完全無限なる者即ち神てふ觀念の原因たるを得ず、我れ自らの性質には限り無きと云ふことを含み居らざればなり。我れは疑惑を懐くといふとに於いて既に我が知識の完全ならぬとを自識す。然らば件の觀念は



吾人が種々の限り有るものより抽象して造り得たるものなるかと問ふに、しか考ふべからず。何となれば抽象は事物の一方面のみを取りて見るものなるが故に限り有るものに就いて如何に抽象作用を施すとも限り無き者を考へ出だし得べくもあらざれば也。又こゝに限り無きといふは圓滿に凡べての實在を有する者の義なるを以て限り有るものを如何に多く集むるも之れよりして斯くの如き意味の無限者てふ觀念を得ること能はず、換言すれば限り有るものを相重加するの數に際限を置くこと能はずといふ意味にての無限は茲に謂ふ圓滿てふ意味にての無限とは異なり、唯幾度數ふるも尙ほ其の上に數を加へ得といふのみにては之れを圓滿完了せる者とは謂ふべからず。故に無限者としての神てふ觀念は我れよりも又我れ以外の有限物よりも得ること能はず。然らば此の觀念は何處より來たれるか。答へて曰はく、此の觀念は眞に圓滿完了せる者即ち神より來たれりと考へざる可からずと。斯くデカルトは我れに無限者てふ觀念の在ることを以て無限者そのもの、實在するを證せんとせる也。彼れは更に少しく別なる言ひ方を以て神の存在の論證を爲せり。曰はく我れの

存在より推して神の存在を證するを得べし。何者が我れをして存在せしめたる我れは我れ自ら隨意に出で來たれる者に非ざるが故に自身を以て我が存在の原因とは見ること能はず。然らば我れ以外の者まかも我れと等しく限りある者例へば父母が我れを存在せしめたるの原因なるか。曰はく是れはた原因と見るべからず。何となれば我れは多くの完全なる事柄の觀念例へは限りなき智、限りなき力、限りなき徳といふ如き觀念を有す、而して上に述べたる理由によりて知らるる如く其の如き觀念を有する我れの充分なる原因となるはその如き完全なる事柄を具へたる者ならざる可からず我れ及び我が父母は不完全なる者にして能くその如き完全なる事柄の觀念の原因たる能はず。故に我れ即ち完全なる事柄の觀念を有する我れを存在せしめたるは完全なる者即ち神ならざる可からず。是に於いてか知る我れを生ぜしめ我れを保つ者として無限者の莫かる可からざるを。

デカルトは尙ほ他に神の存在の證明を掲げたり。以爲へらく神てふ觀念そのものに神の存在を合む何となれば若し存在を欠かば之れを完全なる者と謂ふべか



らず、故に完全なる者即ち神は必然存在すべき者なりと。彼れが此の論證はアンセルムスの有名なる論證と比べて殆ど相同むきが如し、然るに彼れは其の論のアンセルムスの同じからざるを論ぜんと力めたり。曰はくアンセルムスの論證は唯神てふ言葉の意義を説明するに止まる。我が論はしからず、そは我が論旨は唯神てふ言葉は完全なる者といふことを意味し而して完全てふ者の中には存在をも含まざる可からずと云ふに止まらずして、我れは完全なる者といふ觀念を考へざる可からず、而してそれを考ふると共に其の者を實在する者と考へざる可からずと云ふとに在り也。デカルト自らは此くの如くに論ずれども、彼れが此の最後の證明は實際アンセルムスの區別し難し。既に先きにも説明せしが如く、其の根底に横はれる思想を見る時はアンセルムスの論證も諸事物を考ふるには其が必須の根據として圓滿なる者の存在を認めざる可からずと云ふ實在論的思想に基けるを知る。デカルトが論證も畢竟此の實在論上の思想の發表せられたるものに外ならず。請ふ左に更に委しく之を辨せん。

〔七〕 神の存在に關するデカルトが最後の論證の立ち得んには先づ限りなき

者てふ觀念の必須のものたるを要するは勿論なり。縱令神を考ふる以上は存在てふことを含めて考へざる可からずと云ふとも、神を考ふる必要なくばそれは全く無用の論なるべし。而して神を考ふる必要は何處より來たるぞと問はゞ吾人の如き限りある、不完全なる者の存在することより來たらざる可からず。我れの如き不完全なる者の眞實に存在することは是れデカルトが吾人の意識の直接なる證明によりて疑ふべからずとなせる所、而してかく不完全なる者の存在し得んには先づ完全なる者を存在すと考へざる可からず、何となれば不完全なる者を何程多く集むるもそこに完全なる者を得んこと能はず、寧ろ限り無きものを姑く限り見てこゝに初めて限り有るものゝ存在を考へ得べし。此の故に我れといふ如き限りある者の存在にして若し疑ふべからず、又我れが限り無きもの(即ち神)といふ觀念を有し居ることにして若し疑ふべからずば、我の原因として必ず無限者を實在するものと考へざる可からず也。是れデカルトが神の存在を論證するの根本思想なり。一言に云へば原因は實在に於いて及び完全なることに於いて結果よりも劣れるものなる可からずとはデカルトが神の存在を論證する根據にして彼



はかゝる因果の關係は論證を要せずして直接に明瞭なるものと思ひたるなり。されば彼れば吾人が有する完全なる者てふ觀念を以て恰も神が自らを吾人に示す所の吾人の心に於ける彼れの印象なるが如くに見たり換言すれば神が自らを吾人の心に印象したるものは是れ即ち無限なるもの、完全なるものてふ觀念なり。其の觀念と神との關係は譬へば紙に捺したる形と其の形を與へたる模型との關係の如し。即ち完全なる者といふ觀念に於いて神が吾人に觸接する所ありと謂ふべきなり。此の故にデカルトは無限者てふ觀念を以て神が吾人に與へたる所のもの即ち換言すれば吾人が神に造られたる機に於いて生具する觀念なりと見たり。

〔九〕 斯くの如くにしてデカルトは無限圓滿なる神の存在を論證し得たりと考へたり。神は完全なるが故に一切の圓滿なる徳を具ふ。而して其の圓滿なる諸徳の中デカルトの論證を進むることに取りて特に肝要なるは神の誠實といふとなり。神は誠實なるもの故に彼れが吾人を欺くといふが如きことある可からず、是に於いてか吾人の明瞭に思考したる所を以て眞實となすべきとの根據を發

見す。吾人は先きに理性の示す所をさへ疑へりき。されど是に至りてはそれを疑ふの必要なきを丁解す、何となれば理性を吾人に賦與したるは神にして神が吾人を欺かんが爲めに之れを賦與したりとは考ふ可からざれば也。故に吾人が理性を以て推究して明瞭確實なりとする事はそれを明瞭確實なりと信じて聊も之れを危ぶむの必要なきことを知るなり。

デカルトは斯くして神の誠實なることを證し得てよりは其の論歩を進むること益々容易なるに至れり。彼れは最初外界の存在をも疑ひて以爲へらく吾人は五官を以て外物の存在を知覺すれど是れ皆五官の迷妄なるかも知る可らず。されど茲に至りては彼れは全く其の如き疑訝を拂ひ去ることを得たり。以爲らく吾人が五官を以て知覺する外界は吾人自ら造り出だせるものに非ず吾人の力を以て自由之れを有らしめ又無からしむること能はず寧ろ吾人の眼前に備へられたるもの而して外物の觀念は吾人以外の何物かによりて吾人に與へられたるものならざる可からず。而して若し吾人の實際に知覺する所とは全く異なるものによりて其の觀念が與へられたりと思せば、換言すれば外物は吾人の知覺する所とは全



く異なるものならば吾人の知覺は悉皆迷妄なりと云はざる可からず。吾人の知覺に依頼する限り吾人は廣がり有する物體を存在すと思はざるを得ず。故に此の知覺にして若し全く迷妄ならば神は吾人を迷はさんが爲めに吾人に其の如き知覺を賦與せりと云はざる可からず。然るに神は誠實にして斯く吾人を迷はすべき者にあらず故に廣衰を有する外物の存在すといふ知覺は吾人の信憑すべきものなり。但し個々の場合に於いては感官に種々の迷妄の起るあるは勿論なれど廣衰ある物體の存在すといふこと、換言すれば外物の存在すといふことを全く迷妄なりとするは甚だしく吾人が意識の證明に逆らふもの其を迷妄とするは吾人の確實なりとする事物の關係を全く疑ふに同じ。されど上に已に論ぜるが如く圓滿なる神を以て萬物の原因と見る以上はかくの如き疑ひを起すの必要なきなり。

〔一〇〕 かくしてデカルトは遂に論じて物界の存在をも確實なりとするに至れり。彼れが論證の順序より云へば先ず能意識者、換言すれば吾人が各、我と名づくる限りある心體の存在を確め、而して神即ち絶對に無限なる者の存在に論じ至

り、次に物體の存在に論じ至れり。是に至りて此の三つの者の存在は疑ふべからざるととなりぬ、無限者心體及び物體是れなり。而してデカルトは無限者即ち神を以て實體(substantia)となせり。彼れが所謂實體は他に依らずして存在するもの即ち自存するものなり。彼れは亦心と物とをも實體と名づけき。但し神を實體といへると同一の意義にて云へるにはあらず。何となれば有限なる心體及び物體は神に依りて存在するものなれば也。されど心物は神に依るの外に依りて存在する所を有せず、心は心として存在して物に待つ所なく、物は物として存在して心に待つ所なし。蓋し心は意識するものにして物は廣がれるもの、而して意識と廣衰とは全く其の性を異にして一が他に依りて存在するものに非ざれば也。されば神を第一義の實體といふに對して心體及び物體を第二義の實體と謂ふべし。

心體と物體とが各、實體として知らるゝはそが各、特殊の性(attributum)を具ふればなり。心體の何なるかを問はば、思ふとをすものといふの外なし、即ち思ひといふ性によりて初めて心體の存在は知らるゝなり。物體の何なるかを問はば、廣が



れるものといふの外なし、即ち廣がりといふ性によりて初めて物體の存在は知らるゝなり。此等の性はもとより實體に於けるもの、或は實體に屬するものとして始めて考へらるれど、亦實體以外のものを假らざして考へらる。即ち意識は他のものを假らざして考へられ廣袤はた他のものを假らざして其れ自身に考へらる (Per se concipiuntur) ものなり。故に委しくは之を本性と名づくべし。性を以て換言せば性の取れる種々の様として、初めて考へられ得るもの之れを様狀(又は單に様(modus)といふ。例へば物體の位置、形狀、動靜の如きは是れ廣袤の種々の様狀にして廣袤なくしては考ふ可からざるもの也。また感情、慾望、意志といふが如きは是れ皆思ひの種々の様狀にして思ひといふことに依らずしては考ふ可からざるもの也。即ち様狀は其れ自身には考ふべからず、他に依りて初めて考へらる (per aliud concipiuntur) べきもの也。かくして近世哲學に於ける主要なる觀念即ち實體、又は單に體(てふ觀念と共に性、又は屬性)及び様狀(又は單に様)てふ觀念はデカルトによりて明かに掲げ出だされたり。

【一】 上來論述せる所を基として特に物體に就きて論究せるものは是れデカ

ルトの物理說なり。彼れ以爲へらく廣袤といふ本性以外に物體其の物の具ふる性質なし。吾人が五官を以て感覺する諸性質(色、聲、香、味、觸等)は物體其の物の具ふる所にあらず吾人の心に感ずる主觀的のものなり。長さ、廣さ、厚さの外に物體そのものゝ性と謂ふべきもの莫し。此の故に吾人は全く數理的に物體を考ふるを要すと。蓋しデカルトに取りては物體と廣袤とは同一不二にして彼れは廣袤ある所物體あらざる無しとし、隨ひて真空の存在を否めり。若し一器物の内部が真空にして何物も莫からんには、其の縁邊は相附着せざる可からず、其の相分かれて異別のものとなり居るは其の間に廣がれるものあれば也。廣がりのある是れ即ち廣がれるもの物體の存するなり。

物體の物體たる所は廣袤といふことに在るが故に、其の廣がれるといふとに於いては一切の物體皆平等一如のものたり、而して其の差別は唯種々なる部分が種々に運動すと云ふことに存するのみ。故に吾人が一物體と名つけて他の物體と區別するは畢竟廣がれるものゝ一部分が他の部分と別異なる運動を爲すによれり。約言せば物體の差別はそれが種々に區劃さるゝと其れが運動するとの二點に在



り。  
 物体の運動は何處より來たる。曰はく其の究極の原因は神に求めざる可からず。然れども吾人は唯神が物体に運動を與へたることを知り得るのみ、物体の運動に於いて目的の存することを發見する能はず。物体を論ずるに當たりては唯其が動くものなりといふ點に於いてのみ之れを考ふべし、其が如何なる目的を以て動くかは物体の論に挿入すべからざる觀念なり。故に物理上の事は全く數理を以て物体の運動を研究する事の外に出でず換言せば機械的に考ふるの外なし。物体を動かし物体を形づくれる神の目的を知るといふが如きは吾人の僭越に出づ。况んや人間を以て物界の目的となすが如きは潜越に添ふるに放慢の心を以てせるもの也。かくの如く論じてデカルトは物理の論より全く目的觀を排斥せり。「神は物体運動の原因にして而して彼れは常住不變なる者即ち原因不變易なるの故を以て物界の運動は其が全体の量に於いて常に變更すること無し。物体の運動には絶對の増減なし、それが一部分に没すれば他部分に現る。斯く運動に絶對の増減なしと云ふことより運動の三法則を演繹するを得。其の法則の一は、一物

体が一状態に在らば常に其の状態を保存すと云ふと、即ち惰性(*inertia*)の法則と名づくるもの也、其の二は物体の動くや他物によりて妨げられざる限りは直線を取ると云ふと、其の三は運動する物体が他物に觸るれば之れに運動を傳ふと云ふと、是れなり。(デカルトは一物が他物に運動を傳ふる法則を更に委しく説明せんと試みたり)。

〔二二〕 物界の構造は唯物体と其の運動とによりて説明し得べし、詳言せば物体が神によりて動かさると見たる上は唯其の運動によりて自然に物界の形づくらしむとを説明し得べし。上にも云へるが如く物体の本性は廣袤といふことなるを以て之れを種々に區劃すれば種々の異なりたる形の物体を成すべく、又如何ほども小さくそを區劃することを得べし。故に分かつ可からざる物質元子即ちアトムと謂ふべきもの無し。物体を分かちて三種類となす。一は比較的に分量の大なるもの、換言せば比較的大きく區劃されたるものにして、是れ即ち地球を形づくる物質なり、遊星亦此の種の物質を以て成る第二は甚だ小さき球形を成せる物体にして、是れ即ち空氣の元素なり。第三は最も細微にして殆ど個々の部分



を爲さずして全く相聯絡するもの、是れ即ち火氣の元素にして太陽及び恒星は之れを以て成る。

斯くの如き種類の物質は畢竟廣袤の種々に區劃されたるものが種々の運動を取れるに外ならず。されど真空は存在せざるものなれば其等物體の運動せんには唯一部分のみ運動すること能はず其の動くや必ず循環運動を爲す。例へばイが動いてロに行かんにはロは動きてハに行きハが動いてニに行きニが動きてイに行き斯くして循環運動を爲さざる可からず、即ち其等の悉くが同時に一回轉することによりて其の運動は出來得るなり。遊星が太陽の周圍を回るも畢竟遊星を圍繞する最も精微なる物質が循環運動(換言せば渦旋運動)を爲せばなり。又かくの如き渦旋運動の故を以て凡そ物體は一中心に向かひて墜下す猶水の渦を捲くや水上に浮かべる物體が一中心に集まるが如し。一物體の他物體に影響せんには必ず運動して相觸れざるべからず、空隙を隔て、一物體の他物體に影響せん由なし。

〔二三〕

生物學の生物の體軀を論ずるものとしては全く物理學に屬すべきも

の、生體の動作生長等は皆機械的物理作用として之れを考ふるを得べし。デカルトはこゝに於て身體の生氣と精神(心)とを全く區別して生氣は身體の物質的作用に外ならず、非物質なるは唯精神あるのみ而して其の作用は意識に外ならずとせり。即ち彼れによりて身體の生命(いのち)と精神の作用とが明かに全く區別せられたり(而してこは希臘哲學者に於いてはしかく區別されざりしもの、彼等は凡べて活動をなす所以のものを靈魂と見做したり)。デカルトに従へば下等動物は一種の自動機械に外ならず、其の食物を見て之れに趣くもまた鞭たれて啼聲を擧ぐるも、意識ありて爲すにあらず、其の唯純然たる自動機械の作用たること恰も時計が張線(はり)を引くに應じて鳴るが如し。此の説は近世に於いて生體の動作を全く機械的に見んとする思考の先づ最も明瞭に言ひ表はされたるもの也。

デカルトは尙ほ人類に説き及ぼして曰はく、人類に於いても身體は一種の機械に外ならず、身體の生氣となりて其の作動を起すに最も肝要なるものは動物精氣(spiritus animalis)にしてこは物質中最も精微なる種類のものなり。動物精氣は血液が心臓に於ける熱氣によりて温められ頭腦に上り其處にて冷却され又瀝され



てかく精微なる部分となり分かれたるものにして、神経に保たれて全身を廻る。彼れは身軀の動作の起こる所以を説きて曰はく、外物先づ神経の末端を刺環し、其の刺環が腦に傳はり行く、其が腦に於いて動物精氣の集注する部分に傳はり行くこと恰も琴の絲に震動の傳はるが如し、而して更に動物精氣の運動は神経に運動を起こし、次いで其の神経と連続する筋肉の運動を起こし、是に於いて身軀の動作は起こるなりと。斯くの如く生理上より見れば吾人の身軀は全く機械的作動を爲すものに外ならず。然れども吾人は動物とは異なりて精神即ち心を有す、即ち身軀のかく動作するに伴うて意識を有するなり。

〔二四〕 精神即ち心の作用は物軀の運動とは全く其の性質を異にするものなれど人類に於いては二者の相觸接する所ありと考へらる、何となれば吾人は外物が吾が身軀に與ふるの刺激を感<sup>じ</sup>、また吾人の意志の作用を以て身軀の運動<sup>を</sup>起こし得ればなり。此の故にデカルトは二者觸接の點、即ち一の動作が他の動作に通ずる點なかる可からずと考へて、之れを腦に於ける松果腺に求めたり。蓋し彼れは件の松果腺が腦の他の部分の如くに左右に對を爲さずして唯一個軀として

中央に存在するものなるが故にかくの如き職分を爲すに適當なりとし、之れを以て吾人の靈魂の座と見たるなり。委しく言へば、外物の刺激は神経の末端に運動を起こし、其の運動が松果腺に於ける動物精氣の運動を起こし、こゝに感覺として吾人の精神に感せられ、又吾人精神の作用は松果腺に於ける動物精氣の運動を起こし、次ぎに神経の運動を起こし、遂に筋肉の收縮を來たすなり。

かくの如くデカルトは身軀の物質的運動と精神の意識作用とが松果腺に於いて相接するが如く云ひたれども、其の説ける物理の原則に従へば物軀の運動は増減生滅するものに非ず。故に動物精氣の運動が吾人の精神に感覺を起こすとはいふものから、其の運動はそを起こしたることに因りて聊かも減滅すべきものに非ず、また吾人の意志によりて動物精氣の運動を起こすとはいふものから聊かも新しき運動の物質に加へられたりとは考ふべからず。故にデカルトは吾人の精神作用が動物精氣の運動に影響するは唯其の運動の方向を轉ぜしむるのみにして全く新に運動を造り出だすにはあらずと辯明したり。

〔二五〕 吾人の心は常に念ふとを爲す、何となれば心の本性は念ふと謂ふこと



にあり而して其の本性の無き即ち念ひの無き心のある可からざれば也。而してデカルトは一切の個々の念ひを名づけて觀念(idea)と云へり。上に述べたる如く吾人に於いては心と物とが相結ばり居るゆゑに觀念(言ひ更ふれば意識の内容)には只心そのもの、純粹の作用に基づけるものと心と身とが相結ばれるより起るものとの二種あり。デカルトに従へば前者は能動(action)のものにして明瞭なる且判然たるもの也。後者は所動(passion)のものにして不明瞭なる且混雜せるものなり。而して其の双方を各、知と意との二つに分かつことを得。即ち意識の内容は一面より見れば能動所動の二つに分かれ他面より見れば知と意との二つより成る。能動の部分に於いて知に屬するは道理を辨ずる心なり、意に屬するは即ち通常意志と名づけらるものなり。所動の部分に於いて知に屬するは耳目口鼻等の感官によりて起こさるゝ感覺なり、意に屬するものは物欲及び情緒なり。而して想像の中記憶は寧ろ所動の方に屬し構成的想像は能動の方面に屬すとせらるべし。デカルトが心理説の大旨は此くの如し。然れども能動と所動と及び知と意との區別及び其の關係は彼れの説に於いて甚だ明瞭ならぬ所あり。

デカルトは吾人の根本的情緒を六種に分かてり。曰はく驚異(admiration)愛憎、欲望(desire)喜悲、是れなり。一切の情緒は此等六種のものによりて形つくらる。而して彼れに従へば這般情緒は動物精氣の運動が腦及び身軀の他の部分に於ける細察を通して心に突入するに因りて起こるもの(但し驚異の情のみは動物精氣の運動の尙腦中に止まるに因るもの)なり。而して此等の情は皆不明瞭なる觀念にして、吾人の精神を攪擾し其の明知を蔽ふは此等に越ゆるもの莫し。されど吾人の精神は想念を思ひ浮かべ之れによりて動物精氣の運動の方向を轉ずるを得るが故に情を抑制するの力を有す、即ち吾人の思ひ做し様によりて喜怒哀樂の諸情を制することを得べし。

〔一六〕 デカルトは觀念の起原に就きては之れを三種に分かてり。一は外物によりて來たれるもの(advertentie)例へば眼前に横はれる器物の想念の如き是れなり、次ぎなるは吾人の自ら作り設けたるもの(factie)例へば諸種の想像の如き是れなり、第三は吾人生得のもの(innatae)例へば「我」「神」といふ觀念及び數學上の原理の如き是れなり。蓋しデカルトに於いて生得といふ語は二意義を有せり、一は讀みて



字の如く生れながら具ふと云ふ義、他は自明なるもの即ち直接に明瞭に且つ判然として他の證明を待たずと云ふ義、是れなり。此等の兩義は彼れに於いては相錯雜して在り。

デカルトはまた知識上に於ける價値の方面よりしては吾人の觀念を全きもの (adequate) と全からざるもの (inadequate) との二種に分ち、不明瞭なる觀念混雜せる觀念は皆後者に屬すとせり。

全からざる觀念その物をば直に知識上の誤謬即ち迷妄なりとは云ふべからず、迷妄とならんには判定の作用の加はるを要す。判定すとは承認し否認し、可とす不可とするの謂にして、こは即ち意志の作用なり。吾人もし明瞭なる觀念をのみ承認せば過誤の起ること莫かるべけれど不明瞭なる觀念をも可として承認するが故に過誤に陥るを免れざる也。尙デカルトは吾人が意志の作用を以て自由なるものとせり。されど彼れに取りては意志の自由は一種の制限を有せり。以爲へらく明瞭なる觀念に對しては意志は之れを承認せざるを得ず、不明瞭なる觀念に對して承認を與ふると與へざるとは其の自由なり。神に於いては彼れが眞理

と認むる所是れが絶対に自由なる意志の定むる所なり。されど人間に於いては其の意志は常に吾人の善しと見定めたる所に従ひて動く。故に神に於いては其の一切の活動は自由の意志を根據とすれども、人間の意志は之れと同一義にて自由なりといふ能はず、但し尙選擇の自由は十分に之れ有り。吾人は習慣によりて宜しきことをのみ選ぶに至るを得べし。而してかく練習によりて過誤を爲すこと無き状態に達したる是れ最も高等なる自由なり。吾人の情緒も亦制御其の道を得ば却つて善事を爲すの動機となる、而して吾人の意志は好みて徳に合なひ徳行を樂むに至り得るなり。

〔二七〕 以上略、デカルトの哲學を説明し了りぬ。吾人は彼れの學說の中に其の思想の未だ整はざる點あるを發見す、而して後の近世哲學の發達を了解せんには正さに彼が所說中更に説き改むべく更に開發せらるべき點の存在することを見るべし。先づこゝに吾人の注意すべきは、デカルトは根柢より全く哲學を改造せんと志したれども、彼れも流石に中世紀の思想と全く一時に相絶つを得ざりしこと是れなり。即ち彼れが思想中中世紀の遺産と見るべき者あり、而してこれが



彼れの論歩を進むるに隨うて知らず／＼頭を掻げ來たれるを發見す。先づ彼れが神の存在を證明する所を見れば中世紀ぶりの實在論が明かに其の根據を爲せるを知るべし。完全なるものは必ず實在てふとを含有すべきもの言ひ更ふれば完全なるとの多き物は取りも直さず實在の多き物なりと云ふ如き、又因は其の完全なること、實在を有することに於いて果よりも少なきものなる可からずと云ふ如きは是れ皆同一の實在論的思想に基けるものなり。また因果の關係は一切の物を支配して、一物あれば其の因りて存在する何等かの因あらざる可からず、故に其れ自身が自らの存在の原因たりと見る可からざる時には必ず他のものが其の因たらざる可からずと云ふ如きも是れ亦彼れが在來の思想の中につき明瞭なるものとして發見せる所なり。此來傳來の思想はデカルトが哲學の根據、換言せば彼れが思想の出立點(其の假定)を成せりといふも不可なし。而して這般假定そのものに關する討究の尙後に起こり來たることは以下近世哲學思想の發達を叙し行くに隨ひて明かになるべし。

デカルトの據れる論法に於いて尙批評さるべき點あることは哲學史家の屢々注意

せる所なり。蓋し彼れの哲學を立つるや吾人の明瞭に認知し得ることを以て真理の標準となし、さて其の論歩を進めて神の存在を證するに至れり。されど彼れが論證は神の存在を證し其の誠實の徳を具ふることを確め、而して神の誠實なることに頼りて吾人が理性てふものゝ憑據するに足るとを證せんとしたりと見ゆ。此の點に於いて彼れの論に缺陷ありと云はるゝは其の循環論證の過誤に陥らざるかといふと是れなり。そは彼れが先づ真理の標準を確め次第に論歩を進め行きて神の存在を證するに至るまで是れ已に理性に依頼せるものならずや、即ち彼れは一步々々の道理上明瞭に認知したる所を以て真理となし來たれるならずや。然るに翻りて神の存在と其の誠實の徳とを以て吾人の理性の眞實なることを證するは、云はゞ吾人の明瞭に思考したることは真理なりといふを根據として神の存在を證し、翻りて神の存在を根據として吾人の明瞭に思考したることの理性なる(換言せば吾人の理性の吾人を迷はずが如きものならぬ)とを證するなり。是れ正さしく論證を循環せる者には非じか。此の點に於いてデカルトの論は循環論證に陥れりとして非難せらる。されどエルドマンは彼れの爲めに辯じて曰はく、デ



カルトは循環論證の過誤を犯さず、彼れは知識上の根據(Principium Genendi)と存在上の根據(Principium Essendi)とを區別せるなり。蓋しデカルトの意吾人が知る順序より云へば先づ我れの存在を確め次ぎて我が明瞭に思考したる事の眞理なるを確め、而して之れを根據として神の存在を知るなり、されど存在上の根據より云へば神は萬物の本原にして我れも神に依りて存在し我が理性も亦神によりて在りといふとを云へるなりと。エルドマンはかくの如く辯ずれども、デカルト自身が果してかほど明瞭に二者を區別せるかは疑はし。デカルト自らの言ひ表はし方に於いては循環論證の過誤を犯したるの責を全くは免るゝ能はじと思はる。尙デカルトの論に於いて思想の未だ整はざる點あるは本躰といふ觀念の用方なり。彼れは本躰を解してそを他に依らずして自ら存在するものなりと云へり。然らば正當に本躰と云はるべきは神の外あるべからず。さるを彼れは限りある心及び物をも第二義の本躰と名づけたり。されど嚴密に云へば、到底第一義第二義の區別を以て満足すべからず。かく彼れは唯第二義といふ言譯を附せるのみにて正當には用うべからざる本躰と云ふ語を有限なる心及び物に應用して此の二

者をも多少の獨立を有する者なるが如く言ひ做せる點に於て其の思想の整はざる所あるのみならず、其の神を論ずるや彼れを無限なる心として心物の二つの中に就き神を其の一方に結び附けたるとの十分の理由を與ふる能はず。又彼れは界限を取り去りて知性即ち心(natura intellectualis)と考ふれば神といふ觀念を得べく神と云ふ觀念に界限を與へて考ふれば人間の心を得べしと云へり。されど何故に物躰に就きても同様のことを云ひ得ぬかに就きて十分の證明を與へず。

〔二八〕 更にデカルトの哲學に於いて修正を要する點は彼れが心物の關係を説ける所にあり。彼れに従へば、心と物とは全く其の本性を異にして一方を考ふるに他を以てするの要なく、從ひて一方に生じたる事柄の原因として他方を持來たること能はざるなり。廣がりとは念ひとは全く相容れざるものにして廣がりとは念ひならず念ひは廣がりにあらず。故に念ひが何故に念ひならざる物躰の運動を起し物躰の運動より何故に廣がりならざる念ひの起るかを解すること能はず、斯くして其が正當の結論は物心の一が直接に他に影響を及ぼすこと無しといふに至らざる可からず。デカルトも全く此の結論を想起せざるにはあらず



きと思はるれど、強ひて吾人が實際上の經驗に合はさんとせるより吾人の身軀の中唯松果腺の一點に於いて兩者の相接する所ありと説きたり。然れども是れ亦充分なる説明とは謂ふべからず、何故に又如何にして此の一點に於いて一が他に變化を與ふるか、解す可からざる問題なればなり。デカルトは又物軀の運動に絶對の増減なしとてふとに違反せざらんが爲既に吾人の意志が動物精氣を動かすにも新しき運動の量を與ふるに非ずして唯既に存在せる運動の方向を轉ずるに過ぎず、此の故に量に於いて聊かも増減すると無しといふ。然れども是れ亦窮したる説明と云はざる可からず、何となれば縱令假りに運動の量と方向とを區別し得とするも、方向を轉ずといふことが已に一種の變動なれば此の變動は心の念ひに因りて新に物界に生じたるものと考へざる可からざれば也。之れを要するに、心と身との相關する所以はデカルトの説明に依りては解すべからず。かくの如くデカルトの思想に於いて修正を要する幾多の點あり、而して彼れの學說に根據して出立したる論者が先づ此等の點に於いて其の思想を改めんとしたるは自然の事なりとす。彼等の特に先づ二點に於いてデカルトが思想の修正及

び開發を試みたり、一は限りある心と物とが神てふ本軀に對する關係一は心物相互の關係、是れなり。先づ此の第二の點に其論を結び來たりしものはオツツカマオ論者なり



## 第三十二章 デカルトの學說發達

〔一〕 デカルトの哲學は諸方より多くの攻撃を受けたりしと共に、又和蘭を初めとして漸々其の勢力を擴げ行けり。彼れの哲學は最初和蘭のユートレヒト及びライデンの二大學に於いて講ぜられ次ぎつ獨逸に波及し、また其の故國佛蘭西に於いても其の説を信奉する人々を得、特にジャンセンの徒當時の一宗派にして其の中心はホル、ロアヤル (Port-Royal) にあり及びオラトール (Oratoire) と名づくる宗教家の一團體の中に受け容れられき。

〔二〕 心と物との關係は早くよりデカルト學徒の中に注意されたる點にして、此よりして漸次オッカオ論の開發に向かひたり。オッカオ論は佛蘭西人ルイ、ドラ、フォルマ (Louis de la Forge) 及び獨逸人ヨハン、クラウベルク (Johann Clauberg) 等の所説に其の端緒を發見し得れども、此の論を最も明瞭に唱へ出でたるはクラウベルク等と時を同じうせし

アルノール、グーラン (Arnold Geulincx 一六二五——一六六九)

なり。彼れはリョー、エン大學に於いて又後にライデン大學に於いて教授たりき。

彼れか思想の根據はデカルトの立てたる實體てふ觀念及び心物二元の論なり。彼れはデカルトの思想に基きて心と物とが互に相影響んることの出來得べからざるを見、而して尙追加して曰はく、我れは如何にして爲し得るか(其を爲し得るの道)を知らざることをば爲す能はず然るに我れは如何にして感覺の生ぜらるゝかを知らずまた如何にして我が意思する時に我が身體の動かさるゝかを知らず。(是れ嚮にデカルトの據りて考へたる因果の關係に基きて考へたるどころのものにしてグーランの謂ふところは我れの爲すは我が意識を以て爲すことならざる可からず、故に我れの爲す道を知らざることに於いて我れは其の原因たる能はずと云ふにあり)。故に我が心が身體の動作の原因にもあらねば、また身體に於ける運動を以て我が心に於ける變化の原因とも見ること能はずと。之れを要するに真正の原因は限りある心及び限りある物以外に存せざる可からず。然らば何處にありや曰はく之れを神に發見するの外なし。吾人が意志する時に身體の動くは、眞實は神が我が身體を動かすによる、我が意志は唯だオッカオ (Occasio) 又は (Causa occasionalis) 即ち緣(別言すれば唯場合)爲すに過ぎず。即ち吾人が意志する場合に



吾人の身軀は神によりて動かさるゝ也。吾人が身軀上の變動も亦之れと同じく唯吾人の念ひを變化せしむるの縁を爲すに過ぎず、即ち吾人の身軀に一の變動ある場合に神が吾人の心に念ひを起さしむる也。斯く心と身との相影響するが如くに見ゆるも一が決して他の變動の眞因たるには非ずして唯オッカヲオに外ならずと説く是れ此の論のオッカヲオ論と稱せらるゝ所以なり。

〔三〕 されど若し以上の如く云はゞ、我が意志する毎に神は其の力を用ゐて我が身を動かし、外物の刺戟等によりて身軀に變動の起る毎に神は其の力を用ゐて吾人の心に感覺等を起さしむるとなるべく、恰も吾人の意志することに隨ひ又は物軀の動くことに隨うて神は其の時毎に煩はしく作爲するが如く見ゆ。故に此くの如き見解に満足すること能はずしてオッカヲオ論は更に進歩したる形を取るに至れり。其の説に曰はく、吾人の意志する毎に又物軀の動く毎に神が煩はしく其の力を用うるに非ず、又吾人の意志及び物軀の變動が因となりて神を其の場／＼に作爲せしむるに非ず、神がもと吾人の心と身とを造りし時一方の變動が他と相應する様に爲せるなり。之れを譬ふれば恰も時計師が二個の時計を製

造して其の一方の針の示す所と他方の針の示す所とが相應する様に仕掛けたるが如く、一の時計の針が直に他の時計の針を動かすにもあらねば又時計師が一の時計の針の動く毎に之れに従うて他の時計の針を動かすにもあらずと。かく言ひ改めたるオッカヲオ論に已にグーラン自身の唱へ出でたる所と思はる。

〔四〕 此くの如く心に於いて又物軀のに於て起る一切の變動の眞因は神の外になしといふとを取りてグーランは之れを道徳論に應用せり。曰はく吾人は我が意志を以て、即ち我れが原因となりて外界を變ずること能はず、我等は物界の變化に對しては寧ろ唯之れを傍觀するの位置に在るものなり。故に吾人が力の爲し得ざる事に對しては須からく其の事を爲さんとするの欲望を抛擲すべし。吾人は天命に安んじ外界に懸る欲念を棄て知識の外に意志を馳せしむること無く常に安慰を我が心中に發見すべきなりと。

〔五〕 かゝる論が森羅萬象を悉く神に懸りて在る者とし、個々物は獨立自存する者に非ず唯神の存在に與かるとに於いて初めて存在するものとして、萬有神教的傾向に進み行くことは其の自然に取るべき發達の順序なり。グーラン自らも



既に此の傾向に一步を進めて、吾人は神の心に與かる所あるにたりて存在する者なり、神は限りなき心、吾人は限りある心云は、神の心に限界を附して之れを個々に分かれたるものと見れば是れ吾人の心にして、吾人の心より界限を取り去ればこゝに限りなき神の心在り、恰も限りたる空間即ち個々の物體が限りなき空間の部分なるか如し。とかく云ふに至りてはグーランは既に個々の物體が限りなき廣袤の様狀なるか如く、吾人の個々の心は神て無限なき心の様狀なりといふ見地に進みたる者と見らるべし。是れ明かに一步を萬有神説に向けたるものと謂ふべき也。

〔六〕 同じくデカルト哲學の根據より出立し其の思想を進めて一學説を立てたる者あり、是れ

マルブランシ (Malebranche 一六三八——一七一五)

にして、彼れの説きし所是れまたデカルト哲學發達の一結果と見らるべきもの也。マルブランシは上に云へるオラトアール團體の一員なり。彼れ偶然座頭にデカルトの著書『人間論』を購ひ得て之れを読み、恰も我が竊に思ひ求め居たるものに遭

遇したるが如くに感ぜ喜悅禁ずる能はず、遂にデカルトの哲學を根據とし更に研究を運ばすことに一身を委ぬるに至れり。彼れが著書の中最も有名なるは『ド、ラ、ルシユルシ、ド、ラ、ボリテ』(『De la Recherche de la Vérité』)なり。マンブランシ爲以へらく限りある心又限りある物體と同一の意味にて神を心と云ひ又物體と云ふと能はず、されど限りなきものとしては心も廣がりも共に神の具ふる所なり。凡そ有限のものは皆彼れに與かり彼れを分有することによりて存在す。一切の完全なるとは神に備はり、而して之れに與かり之れを分有せるものは是れ即ち吾人の心と諸、の個々なる物體となり。神が思念の對境となるは神自身なり又神自らが其が意志の目的なり換言すれば神は自らを知り自らを愛する者なり。吾人が事物を知るは神が自らを知るの知識に與かるに外ならず。吾人の世界を觀ずるは神の自らを觀ずるとを分有するものなりと。マルブランシは此の意を言ひ表して、我等は萬物を神に於て見るといへり。萬物の存在するは其が神に於ける摸範的觀念を分有すれば也。而して此等の摸範的觀念は神に於ける永劫の眞理にして其は神の意志によりて定められたるものに非ず本來神の性に具はれるものなり。マ



ルフランシは空間が個々の物躰の居處なるが如く、神は吾人の精神の居處なりと云へり。

〔七〕 一切の原因は唯神なり、吾人の知識も畢竟すれば神によりて與へられたるもの即ち神の知識の光によりて照らされたるものに外ならず。吾人の意志の働きて我が四肢の動くは我れが其の眞因たるに非ず我れは唯其の場合を爲すに過ぎず。皆に心と身との關係の然るのみならず、一物躰が他物躰を動かすも眞實一が他の原因となるにあらず。運動を與ふる眞原因は神の外にあらず。

吾人の知識が神の自識を分有するものなるが如く、吾人の意志も亦神が自らを愛するの愛を分有するもの也。如何なる意志も皆多少の善を求めざるは莫し。吾人の究極の目的は唯神を知り彼れを愛することに在り。

〔九〕 マルフランシの學說も一種のオッカオ論たるの趣を帯びたり。彼れはグーランの用ゐたると殆ど同一の語をさへ用ゐたる所あり。彼れの思想は究竟するに一切の原因を神に歸し神を離れて自存する者なしと主張するにあれば、其の傾向は明かに萬有神説的なりと謂ふべし。グーランはデカルトより出立して

進みて萬有神説の方向にむかひ、マルフランシは彼れ自らは此の說を排擧するに力めたれどもグーランよりも更に此の說の方向に進める所あり。彼れが神を謂ひて神は念ひを有すると共に廣がり有す、但し其の念ひ及び廣がりは個々の心が念ふとを爲し個々の物躰が廣がれるとは其の意其義同一ならずと説けるが如き、其のグーランに比して明かに萬有神説に向かひたるを證するものなり。而して是れ即ちデカルトが思想の根擧に在る實在論の正當の結論なるべし個々の存在物は一の完全なる實在物によりて其の存在を得、故に個々に分かるゝほど實在を限るものなりと云ふ思想は應に萬有神説の傾向を取りて進まざる可からず。是れ云はゞ中世紀に於いて既にアンセルムスに存在せり思想の正當の歸結が大に時を隔て、近世に至りて發表されたるものなりと謂ふを得べし。

されどグーラン及びマルフランシの所説は未だ能く萬有神説を完成せるものには非ず。少しくマルフランシに先んじて既に明瞭に又大膽にデカルト哲學の論理的歸結を掲げ萬有神説を唱へ出でたる者あり。是れ即ちスピノーザなり。スピノーザの哲學も此の方面より觀ればデカルト哲學發達の潮流に屬するものと



云ふを得べきが、彼れが萬有説説を唱ふるに至りしには尙外にその淵源となれるものあり、又彼れの哲學にはデカルト學派以外の思潮に屬する要素の攝入せられたる有りて、そのつから一種の特色を帯びたる一大組織を成すに至れるなれば、彼れをゲーラン及びマルブランシと同列にならぶ可からず。

### 第三十三章 スピノーザ

〔一〕 スピノーザの哲學は其の根本的思想に於いてデカルト哲學發達の潮流に屬せる者多しと雖も、又彼れに於いてはホッブス等が自然説ぶりなる思想の相交りて存在せるあり。別言すれば、彼れに於いてはデカルト學派に屬せるものゝ外に、其れとは頗る其の趣を異にせる而も同じく第十七世紀の特殊なる思想と見るべきものゝ相集合せるを認む。此の點に於いて觀るも、彼れは歐洲近世の哲學史上、一種の特色を帯び異様な光彩を放てる思想家なり。彼れは久しき間神學者等の嫌惡する所となり、名高き無神論者として言ひ傳へられたる程なりしが、後にはまた漸々其の哲學の眞價値を認むる學者出で來て、終には彼れを「神に醉へる人」とまで名づけたるノッソウスの如き者あるに至れり。

スピノーザは一千六百三十二年十一月廿四日和蘭のアムステルダムに生まる、其の血統は猶太人にして、父は相應に暮らせる商人なりき。抑アムステルダムの猶太人は西班牙及び葡萄牙より移住せる者にして、曩にも云へる如く西班牙の猶太人間には一時文物煥發して名ある哲學者も出でたる程なりしが、後に異宗旨を奉



ずるの故を以て彼等は基督教徒のために劇しき迫害を蒙ることとなり多く和蘭に逃れ來たり。彼等、和蘭に逃れ來たりてよりは累はさるゝと無く其の昔ながらの禮拜を維持することを得たりしが、斯くなりて後はまた彼等仲間の中に宗旨上の壓制を行ひ厳しく異端と見るべきものを排斥し初めたりき。斯くの如き宗旨上の争ひは當時代の流弊なりきと云ふも可なり。

スピノーザはかゝる猶太人間に在り其の學校に入りて經典を修めたりしが、才學群を抜き幼より頭角を現して十五歳の頃には已に一廉（トカ）の經學者と見らるゝに至れり。彼れは其の後宗教に關しては自由思想を懐けりと評判されたるフランチ、ファン、デン、エン、デといふ醫師に就きて拉丁語を修めたるのみならず、其の頃既に猶太の經學者の教ふる所に慊（トカ）ずなりて寧ろ物理の學に注意を傾け、又後來彼れが哲學思想の起點ともなれるデカルト及びヴォルターノ、ブルノーの著書を見るに至りきと思はる。スピノーザは斯くして其の眼界の次第に廣うなるに隨ひて益々猶太の宗旨を以て満足せざるに至り、而して彼れが意見の漸次に變じ來たるに隨ひて猶太人なる彼れが仲間の中に其の變説に着目する者出で來て、遂に其の意中を

喚き出ださるゝに至れり。スピノーザが變説の知らるゝや同人等は其のまゝに彼れを置くに能はずとして大に彼れを詰問し、或は賺し或は威し、はては若干の年金を贈る可ければ在來の信仰を告白せよと云ふに至りだれど、彼れ之れを聽かざりしかば遂に一日黄昏刺客の刃に罹らんとしたりしが、唯外套を貫かれたるのみにて幸に其の身を逃るゝを得たり。其の後彼れは猶太人間に定められたる掟に従ひ全く猶太人の縁を絶たれ神に呪はれたる者として放逐せられき。此の嚴かなる放逐の式を行はれたるは彼れが廿三歳の時なりき。

爾後彼れはアムステルダム（アム）の傍りなる知己の家に寓し曾て習ひ得たりし眼鏡磨きを爲して口を糊し、専ら哲學の研究に其の心を凝らしたり。此の時よりして已に學問上彼れの指導を受けんと欲する篤志の青年彼れを中心として相會合したりしが如し。千六百六十一年リンズブルクに移り、此處にて『デ、インテレクトゥス、エメンダシオーネ』(De Intellectus Emendatione)及び彼れが名著『エティカ』の著述に着手せしが前者は中絶せり。此の頃よりして彼は當時有名なりし學者等と相交るに至れり。一千六百六十三年にはフォルブルクに移り、千六百七十年にはハーグに移



此の年『トラクタトス、テオロギコ、ポリテイクス』(Tractatus Theologico-Politicus)を出版して大に信教の自由を主張し且舊約書の歴史的批評を開かんとしたりしたため當時の學界の大波瀾を揚げ神學者の嫌惡を受くるに至り。出版の翌年宗教會議は此の書を判して讀むべからざる異端の書となせり。彼れは其の後『エティカ』を出版せんと試みしが、其の噂の世間に傳はると共に其の出づるに先だちて復神學者等の妨害を加へんとするに遇ひ、之れが出版を思ひどゞまれり。スピノーザは其の生存中竟に其の大名を後世に傳ふべき大著を公にせざりしなり。彼れは生涯娶らず、極めて質素なる生活をなせり。其の性質温藉高雅専心永恒の眞理を觀るとを以て樂みとせり。早くより肺患に冒されしが養生其の宜しきを得たりしたため病頓にはすゝまざりしも、次第に衰弱を増し終に一千六百七十七年二月二十一日、彼れが寄宿せる家の主人夫妻も其の死の近きを知らず外出してあらざりし間に唯其の親友なる醫師マイエール一人に侍かれて靜に逝けり。

〔二〕 スピノーザが哲學の淵源に就きては哲學史家の間に種々の異論あれど、彼れがデカルトの哲學に汲める所の多きは何人も拒否せざる所なり。故に或は

彼れを以て先づデカルト哲學の立脚地に在り而して其の後漸々自家の見地を開くに至れりし者となせる史家あれど、彼れが曾てデカルト學徒と名づくべき位置を取れりしとありしか疑はし。彼れは早くよりゾルダノ、ブルノーの影響を受けたる所ありと思はる、其が萬有神説の淵源の少なくとも一部はこゝに在りしならん。又彼れが哲學の神秘說的方面は幼少より其の心を潜めたる宗教觀に原由し(彼れはマイモニデス等の猶太哲學者及びカッパラーに通曉し又後期のスコラ學者の書をも讀めりと思はる)彼れの自然說的方面はホッブス等に負へる所多かるべし。かゝる影響は有りしと云ふものから、スピノーザ自らの特性が其の説を成せる大動力なりしとは固より埋歿すべからず。約言すれば思想上萬有神説に至るべき傾向を含めるデカルトの哲學がブルノーの影響を受けたるのみならず當時の教會の宗義に束縛せられずして特殊の心傾向を有せるスピノーザに觸れて其の當さに爲すべきの發達を爲して遂に萬有神説に到れものと謂ひて可なるべし。明瞭なる觀念を以て出立し、吾人の明かに且判然と思考し得るものを辿りて一步一步究理を進め行かんとしたるデカルトの研究法はスピノーザに至りては全く



數學的のものとなれり。蓋しデカルトに於ても其の全く學術を改造せんとするや數實が最も明瞭正實なる知識摸範として常に彼れの腦裡に浮かべり。數學を最も確學なる知識と見る恰も物理の研究が斯學によりて明確なるものと成れる如く哲學も亦斯數學を應用して初めて從來の亂雜なる状態を脱し得べしといふとは當時の學界に特殊なる思考の一として多くの學者の腦裡に宿りたり。スピノーザは此の思想を懐きて之れを實にせんとしたる者の最好代表者なり。彼れが其の大著に標題して『幾何學的順序に従ひて證明したるエティカ』(Ethica ordine geometrico demonstrata)といへるを見て彼れが論述の如何に數學的なるかを認め得べし。其の論述の方法は幾何學に於けるが如く、最初に定義を掲げ次に公理次に證明すべき命題を置き、さて後に其の證明を與ふるにあり。

〔三〕 斯くしてスピノーザは其れ自身に確實明瞭なる觀念より出立して數學的に論歩を進め行かんとして以爲へらく、眞理は他のものに照らして證明さるゝを要するものに非ず、吾人の之れを思ふや直に其れ自身明かなりとせらる。譬へば光の其れ自身を照らすが如しと。是れ先きにデカルトが明瞭に且つ判然と吾人

の思考する所を以て眞理とせざるに基けり。スピノーザに従へば、眞知識とは個々の事物を悉からしむる所以の理を知るの謂ひなり。單に種々の事柄を集めたるのみにては尙唯漠然たる經驗に止まりて未だ眞知識とは云ふ可からず。只數多の事物を見聞するのみは未だ必ず其の事物のしかる所以を發見したると同じからず。眞知識は其等幾多の出來事を然らしむる所以の根本理を看破する所に在り。之れを本として推考すれば皆一二の事物のみに限らず凡べての物の悉かる所以を其の本性に於いて發見することを得。而してスピノーザが萬事物を説明するに欠くべからざる根本觀念として出立したるは彼れがデカルトに得たる本體(Substantia)と云ふ觀念なり。スピノーザに取りては本體と云ふ觀念ほど明瞭に又證明を待たずして承認せらる可きもの無し、何となれば本體は彼れに取りては凡べての物の爾る所以の基本の謂ひなれば也。彼れ曰はく、我が所謂本體は其れ自身にて存在し其れ自身によりて考へらるゝものに意味すとされば彼れの謂ふ本體は他に依らずして存在し又他に依らずして考へ得べきもの、謂ひなり、即ち凡べての物の實在すと云はるゝ所以を指すなり。故に彼れが所謂本體は其の實在



するとの証明を要すべきものに非ず、語を換ふれば實在そのものを指せるなり。凡べての物の實在に在りと云はるゝは何の處に在りや。畢竟するに、實在に在るものは其れ自身に存在し其れ自身に考へらるゝ者ならざる可からず。他に依りて在るものは其れ自身に實在を在有せず之れを實在せしむる所以の眞の實在者なかる可からずと見て、而して其の實在者を本體と名づけたる也。是れスピノーザが其の謂ふ本體をば自明なる觀念として出立せし所以なり。

スピノーザ説いて曰はく本體は其れ自身に存在するものなるが故に他によりて限らるゝ所なし、即ち無限のものなり若し他によりて限らるゝ所あらば此の所に於いて依他のものにして自存のもの云ふ可からざれば也。無限なるが故に其はまた唯一なり、多中の一にあらざして凡べての實在を成すといふ意味にて唯一のものなり。また他に依らざるもの即ち其の存在の根據が自己以外に無きものなるが故に其を自因(causa sui)と名づくべし。スピノーザは自因の何たるを説明して曰はく、自因とは其の本性が其の存在を含める者換言すれば、其の性が其のものゝ存在を必然ならしむる者を謂ふ、既にアッセルムスに存し又デカルトにも傳

はりたる存存すとより外に考ふ可からざるものといふ觀念即ち是れを謂へるなり。凡べての物の實在を成すものなれば之れを存在せぬものとは考ふ可からず、又其の存在の原因は自らに在るがゆゑに其は必然に存在するもの也と。此の故にスピノーザに取りては必然と云ふは其れ自身に存在すと云ふと同意義なり、又永恒といふと同意義なり。謂ふところ永恒とは時間上の期限を附し難き連續を意味するに非ずして其の物が其れ自身の原因として必然に常住するを謂ふ。故に以爲へらく本體上より觀來たるは事物を時間上前後を爲すものとせず之れを觀るに永恒常住の相(sub specie aeternitatis)に於いてする也。凡べての物は本體に於いては皆同時に永恒常住のものとして存在す、換言すれば時間の連續を脱しる所に於いて其の物の本體上の眞理を發見せざる可からずと。斯く本體は自身が自身の原因なるが故に他にせいめらるゝ所なきもの即ち自由なるもの也。故に之れを自由原因と名づけ得べし。スピノーザに取りては内よりするの(自性其のもの)が爾あらしむるの(必然是れ即ち自由なり)。

此くの如く本體は、自存、無限、唯一、自由、永恒のものなる故に吾人はそれに就きて否



定を意味する形容を下すこと能はず、何となれば否定は實在を限るものなれば也。本體に就きて吾人は唯純然たる存在を言定し得るのみ、其を限定して名づくべき言葉なし、限定は即ち否定なれば也。故に一言にして云へば、本體は自足圓滿完了したる實在と謂ふべきもの也。

〔四〕 かくの如く本體は自足圓滿なる實在にして、凡べての物は之れによりて爾あらしめらるればスピノーザは之れを萬物の原因と見而して之れを神と名づけたり。故に彼れの謂ふ神は通常歐洲の神學者等の謂ふ神とは異にして右云へる本體是れ即ち神なり(*deus sive substantia*)。神を以て萬物の原因なりといふも時間上前後をなして作爲する底の原因に非ず。蓋しスピノーザは原因を説くに於いても數學的に換言すれば論理的に考へたるなり、即ち其の觀念より必然に考へ出でらるべきことを以て該原因に生じたるものと見たり。故に彼れは謂ふところ自因を説明して其を考ふることに於いて必然に其の存在を認めざるを得ざるもの也といへり。スピノーザが所謂因果の關係は猶ほ理由と結論との關係の如し彼れは萬物は神によりて存在すといふも、其は神が意志を用ゐて造化したりと云

ふには非ず、吾人は神其の者に意志といふが如き定限ある相を附すること能はず、蓋し意志は個物として他の個物に對するもの例へば人間の如きものに於いて初めて言ひ得べきものなれば也。また萬物神によりて存在すとは萬物は神より發出せりと云ふの義にもあらず、本體より出でしそれ以外に物の存在せんやう無ければなり。萬物は唯神の必然の性質によりて存在するものにして其の關係を譬ふれば恰も三角其の物の性質と三角形の角度の和が二直角に均しと云ふこととの關係の如し。三角形の角度の和が二直角に均しといふは三角形の性質其のものに具はれる必然の結果なり、結果といふも唯其の如き意味にての結果なり、三角形以外に角度の和の二直角に均しと云ふこととのあらざる如くに神以外に萬物は存在せざるなり。神は萬物に於ける内在的原因(*causa immanens*)なり、萬物以外に在りて之を生ぜしむる超越的原因(*causa transcendens*)にあらざる。故にスピノーザは中世紀の末葉に既に用ゐられる語を用ゐて神をナトゥーラ、ナトゥーラ、ランヌ(*natura naturans*)と名づけ萬有即ち自然界をナトゥーラ、ナトゥーラ、タタ(*natura naturata*)と名づけたり。即ち前者を以て凡べての物を爾あらしむる所以の本體の義とし後者を以て爾あらし



めらるゝ萬物の謂ひとせり。以爲へらく全自然界と神とは相即したるものなり  
 x(dens sive natura)。

スピノーザの所謂神は全く自然界と相離れたるものならざると又び人間に如く  
 心意を有して作爲する者に非ざるとに於いて當時の宗教に於いて一般に信仰せ  
 られたる神と異なれり。故に彼れの説は先づ無神論として彈訶せられ、時人は詳  
 に之れを了解し得ざりしなり。

〔五〕 上に述べたるが如く、本體は無限なるもの、換言すれば圓滿完全なるもの  
 なり、而して其の吾人に知らるゝや其の性によりてす。性(attributum)とは本體の本  
 質を成すものとして吾人の知力の認むる所のものなり。但し本體は圓滿にして  
 凡べての實在を合むものあるが故に限りなく多くの性を具ふ、何となれば其の性  
 は其が圓滿完全の相を顯すものに外ならざれば也。本體其の者の具ふる性は斯  
 くの如く無限に多かれども、吾人の知り得る所は唯だ心思ひと物(廣がり)との二つ  
 に過ぎず。天地萬物の吾人に對するや或は心の方面に於いて或は物體の方面に  
 於いて知らるゝのみ。件の二つの方面以外に吾人に知り得る所なし。されど是

れは吾人の知力の限りあるが故なり、若し吾人以上の知力を具ふる者あらば心物  
 以外の方面に由りて本體を觀ることを得べし。

斯くしてデカルトに於いては第二義の名の下に體を具ふるものとせられたる心  
 と物とはスピノーザに於いては體を具ふるものと視られずして唯一本體の性と  
 のみ見らるゝとなれり、即ちスピノーザはたゞ一本體の存在を許して第一義第  
 二義といふ區別をば全然拂ひ去れり。されど彼れには尙ほ或意味に於いてデカ  
 ルトの二元論を維持せりと見らるべきものあり、即ち彼れが思念と廣袤とを以て  
 全く別異のものとなし其の一方に於ける事相を持ち來たりて、其の他方に於ける  
 事相を説明すると能はず、即ち一を説明せんが爲めに他を因とすること能はず、二  
 者の間全く因果の關係なしと説ける所是れなり。

〔六〕 かく本體の吾人に對するや全く其の性を異にせる二つの方面に於いて  
 知らる。而して此等の各方面に於いて起こる所の種々雑多の事柄あり、スピノー  
 ザは之れを本體の様(或は様狀 modus)と名づけたり。此等本體の様は言ひ換ふれ  
 ば本體の差別相(affectio)又は modificatio)なり。心なる性の方面に於ける本體の差別



相は出沒極まりなき種々の念ひにして此等は多くの個々の心として或は現れ或は没す。廣表の方面に於ける本體の差別相は同じく出沒極まりなき個々の形體即ち種々の形を具して種々に動く個々なる物體なり。而して本體と其の差別相とは相即不離の關係を有す。スピノーザは之れを譬へて曰はく、本體と差別相との關係は猶ほ線と線に於ける點との關係の如し、個々の點が個々なる様に於いての集合を以て線とは云ふ可からず、其が線と云はるゝは個々の様に非ずして二體をなせる所にあり。されど其の一なる點は決して個々の點と相離れたるものに非ず。萬物と本體と亦かくの如し、萬物は其の個々たる様に於いて直に本體(即ち神と)云はる可きものに非ざれども、二者は相即して決して離れざるものなり。史家エルドマンはスピノーザの意を取り、之れを譬へて曰はく、神(本體)と萬物(様狀)とは猶ほ水と波との如し。而して萬物は水に於ける波の如く心の方面に於いても物の方面に於いても種々維多の差別相を現じ出沒變化して歇むときなきと。此の譬喩を見る者は何人も起信論中の有永恒常住なる方面より見れば凡べては唯一無限の圓滿なる本體即ち *natura naturans* に外ならず、有限差別の方面より見れば一

して常住なるもの無く森羅萬象は唯常住なる本體に於いて出沒變化する波の如きものに外ならず、此等即ち *natura naturata* なり

〔七〕 スピノーザは更に委しく本體の様に就きて限り無きもの (*modus infinitus*) と限りあるものとを別かてり。スピノーザが茲に所謂無限様の何たるかに就きては明瞭にし難き際あれど彼れが言へる所を以て推考するに其の大意は必ずしも見難きにはあらざらん。惟ふに彼れは宇宙に存在する心の方面又は物の方面に於ける全體を指して無限様と云へりといふ見ゆ、即ち之れを以て恰も本體(神)と嚴密なる意味に謂ふ個々の差別相即ち有限様との間に位する如きものと見たりと考へらる。而してスピノーザは動と静とを以て物體の方面に於いて無限様となせり、謂ふところは動と静との全體は無窮に變ずること無きものにして或は一方に没し或は一方に出づることあれども、全體の上より見れば常に一の全き様を成し居るものなりとし、かくて動及び静 (*Motus et quies*) をば廣がりの性に於ける無限様と名づけたるならん。又心の方面に於いては無限知 (*intellectus infinitus*) 萬有の觀念 (*idea omnium*) 又は神の觀念 (*idea Dei*) 是れ即ち無限様なりと云へり。蓋しスピノー